

平成 28 年度 教師海外研修報告書

～国際理解教育の授業実践事例集～

新潟県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・長野県



独立行政法人国際協力機構 東京国際センター

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、開発途上国の現状や日本との関係、そこに暮らす人々の生活や国際協力に対する理解を深め、学校における教育活動の一層の充実を図ることを目的に、教師海外研修を毎年実施しています。

平成 28 年度、JICA 東京国際センター及び駒ヶ根青年海外協力隊訓練所では、東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県から 20 名の教員を募り、国内研修を経て、モンゴル、タイの 2 か国に派遣しました。本報告書は、今年度の研修の概要及び帰国後の勤務校における授業実践の実例を中心にまとめたものです。

文部科学省国立教育政策研究所と JICA が実施した「グローバル化時代の国際教育の在り方国際比較調査」（2014 年）によると、近年、欧米の先進的な国々では、従来の知識伝達型の一斉授業から、生徒の主体性を重視した協働学習への転換が図られています。従来から重視されてきた系統的な知に加え、答えのない課題を与え、自ら考え、他者の意見に耳を傾け、それらを踏まえ、さらに発展的に考え止揚していくことにより、問題解決型の知を育成しようというものです。

本報告書で紹介されている授業実践は、正にこのような考え方を促進させる具体的で有効な事例となっています。日常の生活の繰り返しの中ではなかなか気づかないことで、生徒の目線や身の丈に合うテーマを与え、読んで、見て、聞いて、触れるような教材により疑似体験させていく。そして興味を持たせ、協働しながら学習させていく。是非参考にしていただき、学校現場の先生方によって、このような国際理解教育／開発教育の授業実践が積極的に推進され、生徒の問題解決型の知の育成につながることを期待いたします。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた外務省、文部科学省、各教育委員会並びに関係諸団体に感謝を申し上げますとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月

独立行政法人国際協力機構（JICA）
東京国際センター
所長 佐々木 十一郎

目 次

はじめに	佐々木 十一郎	1
1 参加者一覧		4
2 教師海外研修概要		5
3 派遣前研修		8
4 派遣後研修		10
5 研修参加者写真		11
6 海外研修（タイ）		12
7 海外研修（モンゴル）		16
8 授業実践		
2020 年 東京オリンピックの招待状を書こう		
学級活動・道徳 松戸市立東松戸小学校 小学 1 年 菅原 由実		22
スーホの白い馬		
国語 吉川市立関小学校 小学 2 年 朝倉 敦美		28
せかいのなかまとわたしたち		
学級活動 立川市立松中小学校 小学 2 年 安達 友紀		34
モンゴルと小谷と私たち		
特別活動・道徳 小谷村立小谷小学校 小学 2 年 川尻 年輝		40
ごみ削減プロジェクト 2016 IN 更科		
社会 千葉市立更科小学校 小学 4 年 中畑 翼		46
世界の人々と共に生きる		
総合的な学習・道徳 千葉市立幕張東小学校 小学 5 年 窪田 尚美		52
世界の未来と日本の役割		
社会 川口市立戸塚東小学校 小学 6 年 佐俣 絵美		58
算数卒業旅行 国際コース		
算数 大泉町立南小学校 小学 6 年 長田 久恵		64
丸山発世界の旅 ～私たちにできること～		
全教科 新潟市立丸山小学校 小学 6 年 脇坂 聡美		70
世界を知ろう		
生活単元・美術・家庭科 東京都立町田の丘学園 中学部 2 年 大和田 章		76
「水」から考える国際協力！		
社会 新島村立式根島中学校 小学 6 年から中学 3 年 高田 裕行		81
タイの人々の暮らしを通して、私たちにできることは何かを考えよう		
道徳・学級活動 東松山市立南中学校 中学 1 年 奈良 あすか		87

国際理解を通じて、自他肯定感を高め、グローバルに協働する可能性を模索する	
英語 聖徳学園中学校・高等学校 中学1年 山田 英人	93
Lesson6 My Dream	
英語 渋谷区立松濤中学校 中学2年 石井 誠	99
世界平和の実現に向けて、発展途上国に対し私たちができることを考えよう	
世界平和と人類発展の視野に立って、自分の生き方について考えよう	
国語 江戸川区立小岩第四中学校 中学2年 奥村 直之	105
私がフェアトレーダー ～ビジネスで国際協力～	
美術 さいたま市立指扇中学校 中学2年 山岸 啓介	111
第4編 私たちと国際社会 第2章 国際社会の課題と私たちの取り組み	
「未来の地球をともに考える」	
公民 豊島区立明豊中学校 中学3年 櫻井 直	117
考えよう！持続可能な社会の実現のために、私たちができること	
～タイにおける国際協力から佐渡の未来を考える～	
英語・家庭科 佐渡市立佐和田中学校 中学3年 増田 有貴	122
国際的な課題（SDG s）について調査し発表する	
国語総合 埼玉県立所沢北高等学校 高校1年 上田 祥子	128
「包括的」な社会のために、自分ができることを考えよう	
コミュニケーション英語Ⅲ 長野県立中野西高等学校 高校3年 宮澤 まどか	134
9 教師海外研修を終えて	鈴木 啓修 140
10 授業実践報告会	141
11 JICA 開発教育 / 国際理解教育支援プログラム	142
おわりに	佐藤 真久 144

1 参加者一覧

タイコース参加者

	氏名	学校名	担当教科	担当学年	都県
1	石井 誠	渋谷区立松濤中学校	英語	中 2	東京
2	奥村 直之	江戸川区立小岩第四中学校	国語	中 2	東京
3	櫻井 直	豊島区立明豊中学校	社会	中 1	東京
4	高田 裕行	新島村立式根島中学校	社会	中 1	東京
5	山田 英人	聖徳学園中学校・高等学校	英語	中 1	東京
6	上田 祥子	埼玉県立所沢北高等学校	国語	高 2	埼玉
7	奈良 あすか	東松山市立南中学校	社会	中 1	埼玉
8	山岸 啓介	さいたま市立指扇中学校	美術	中 3	埼玉
9	宮澤 まどか	長野県立中野西高等学校	英語	高 3	長野
10	増田 有貴	佐渡市立佐和田中学校	英語・家庭科	中 3	新潟

同行者

	氏名	所属	役割
1	鈴木 啓修	JICA 東京国際センター	アドバイザー
2	和泉澤 浩	JICA 千葉デスク 国際協力推進員	業務調整
3	和田 直	JICA 新潟デスク 国際協力推進員	業務調整

モンゴルコース参加者

	氏名	学校名	担当教科	担当学年	都県
1	安達 友紀	立川市立松中小学校	全教科	小 2	東京
2	大和田 章	東京都立町田の丘学園	生活単元・社会性	中 2	東京
3	窪田 尚美	千葉市立幕張東小学校	全教科	小 5	千葉
4	菅原 由実	松戸市立東松戸小学校	全教科	小 1	千葉
5	中畑 翼	千葉市立更科小学校	全教科	小 4	千葉
6	朝倉 敦美	吉川市立関小学校	全教科	小 2	埼玉
7	佐俣 絵美	川口市立戸塚東小学校	全教科	小 6	埼玉
8	長田 久恵	大泉町立南小学校	算数	小 5・6	群馬
9	川尻 年輝	小谷村立小谷小学校	全教科	小 2	長野
10	脇坂 聡美	新潟市立丸山小学校	全教科	小 6	新潟

同行者

	氏名	所属	役割
1	佐藤 真久	東京都市大学	アドバイザー
2	古賀 聡子	JICA 東京 市民参加協力第一課	業務調整
3	榎本 智恵子	JICA 長野デスク 国際協力推進員	業務調整

2 平成 28 年度教師海外研修概要

■研修の目的

- (1) 国内研修と海外研修を通じ、世界が直面する開発課題及び日本との関係、国際協力の必要性に対する研修参加者の理解を促進する。
- (2) 研修参加者による学校現場等での授業実践を通じ、開発課題を自らの問題として捉え、主体的に考える力、またその根本解決に向けた取り組みに参加する力をもつ児童・生徒を育成する。

また研修参加後は、JICAと協力し、または自発的に教育現場で国際理解教育/開発教育の推進に活躍していただくこともねらいとしています。

[研修で修得を目指すスキル]

- ① 国際理解・開発教育の必要性を理解し、説明できる。
- ② 開発途上国が置かれている現状、国際協力の現場で起きている現状を理解し、生徒・児童に説明できる。
- ③ 開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について理解し、生徒・児童に説明できる。
- ④ 国際協力の必要性及び JICA の概要を理解し、生徒・児童に説明できる。
- ⑤ 上項を踏まえた開発教育（国際理解教育）の授業計画・教材を作成し、授業を実施できる。

■主催

独立行政法人 国際協力機構 東京国際センター（JICA 東京）
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所（JICA 駒ヶ根）

■後援

外務省、文部科学省、各都県及び政令指定都市の教育委員会、
各都県の私立中学高等学校協会

■研修国と派遣人数

モンゴル：10名（小学校・特別支援学校教職員）
タイ：10名（中学校・高等学校教職員）
※研修国は年度により異なります。

■研修内容

- ・日本における座学・ワークショップの実施
- ・開発途上国（JICA の事業現場等）への訪問
- ・学校現場での国際理解教育/開発教育の授業実践

■研修日程

次ページに記載のとおり

■応募資格

次の資格をすべて満たす方とする。

- ① 東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県の国公立、私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校（1～3 年生を担当）、特別支援学校において教育活動に従事していること。
- ② 応募締切の時点で、年齢が満 50 歳以下であること。
- ③ 応募締切の時点で、初任者研修を修了していること。
- ④ 所属する学校の校長の推薦および実践授業の実施、その公開に理解があること。
- ⑤ 研修国の事情を勘案した上で、参加に耐えうる健康状態であること。
- ⑥ 過去に、本研修、JICA 海外ボランティア、JICA 専門家、ODA 民間モニター／国際協力レポーター等で海外に派遣された経験がないこと。

■参加要件

次の要件をすべて満たす方とする。

- ① 国内研修及び海外研修の全行程に参加可能であること。
- ② メールアドレス（パソコン）での連絡（データの送受信を含む）が可能なこと。
- ③ 帰国後、所定の期日内に海外研修報告書を提出すること。
- ④ 帰国後、本研修の定めた期間内に所属校において授業の実践を行うこと。
- ⑤ 当該授業の実践報告書を提出すること。
- ⑥ JICA のウェブサイトにて一般公開されることに同意すること。
- ⑦ JICA が実施する国際理解・開発教育支援事業に協力(エッセイコンテストへの応募など)可能であること。
- ⑧ 本研修の過年度参加者ネットワーク（各都県を含む）づくりに参加・協力可能であること。

■参加費用

(1) JICA 負担

- ・ 事前研修時等の交通費、宿泊費（日当は除く）
- ・ 講師謝金（国内研修、海外研修）
- ・ 航空券代（含トランジットの際の宿泊費）
- ・ 旅行雑費（査証料、空港使用税のみ）
- ・ 現地視察に必要な交通費及び入場料
- ・ 国際協力友の会（海外旅行保険）加入費

(2) 参加者負担

- ・ 食費（日本国内、海外研修）
- ・ 現地宿泊費
- ・ パスポート取得費用
- ・ 予防接種代
- ・ 追加保険の加入費用等（必要に応じて）

※平成 28 年度の募集要項は、JICA 東京のホームページでご覧いただけます。

■研修の流れ

【派遣前研修】

7月2日（土）・3日（日）

- ・研修の趣旨および、JICA や日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。
- ・国際理解教育 / 開発教育への理解と参加型学習の手法の体験。
- ・研修における各自の役割の理解と、海外研修に向けて準備。



【海外研修】

タイコース： 7月24日（日）～8月2日（火）（10日間）

モンゴルコース：8月10日（水）～8月19日（金）（10日間）

訪問国の現状や国際協力の必要性、日本との関係について、実際の現場を訪問することで体験、理解する。

また、授業実践に必要な教材の材料等を収集する。

※帰国後、海外研修報告書の提出



【派遣後研修】

8月27日（土）

海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

【授業実践】

9月～12月（各勤務校において1回以上）

研修の経験を生かした授業を実施し、成果を各自で検証する。

※実施後、授業実践報告書の提出



【授業実践報告会】

12月～2月（各都県別に1回）

研修の成果（主に授業実践）について、教育関係者をはじめとする地域の方に報告する。



【教師海外研修参加後（翌年以降）】

研修の成果を生かして、各所属校および地域で国際理解教育 / 開発教育を推進する。

- ・授業 / 活動のブラッシュアップ
- ・JICA 国際理解教育 / 開発教育支援プログラムの活用
- ・実践者のネットワークへの参加 等

3 派遣前研修

日時：平成 28 年 7 月 2 日（土）・3 日（日）

場所：JICA 地球ひろば・JICA 市ヶ谷ビル

目的：

- ① 地球的規模の課題、途上国の現状、国際協力・ODA、JICA 事業、訪問国の概要等を理解する。
- ② 国際理解・開発教育の理念・意義を理解し、授業実践に用いる教材の作成方法を理解する。
- ③ 研修における各自の役割を理解する。また、海外研修における各種手続き・事前準備を行う。

7月2日（土）派遣前研修1日目@JICA地球ひろば セミナールーム201AB

所要時間	プログラム	目的／説明	講師・進行
09:30	受付開始		
10:00	5 開催挨拶	研修の意義・期待される成果について理解する	JICA 東京 市民参加協力第一課 課長 杉村悟郎
10:05	20 参加者自己紹介	研修にかかわるメンバーを知る	
10:25	30 【事業説明】教師海外研修の概要	研修の目的と全体スケジュール、国内研修・実践授業の位置づけ、研修の流れについて説明 フォーマットの説明含む	JICA 東京 古賀聡子
10:55	30 【講義】日本の国際協力とJICA事業	地球規模の課題と国際協力の必要性の理解、ODAとJICA事業について理解する	JICA 東京 本田龍輔
11:25	5 休憩・移動		
11:30	30 【見学】JICA地球ひろば体験ゾーン	開発教育支援プログラム体験し、世界の課題と国際協力の必要性を知る	地球案内人
12:00	15 【プログラム説明】JICA開発教育支援プログラム紹介	JICAの国際理解教育／開発教育支援プログラムについて知る	JICA 東京 古賀
12:15	45 【国際協力出前講座】	開発教育支援プログラム体験	JICA 東京 本田
13:00	60 昼食	地球ひろばカフェ（J's Cafe）	
14:00	60 【講義】資質・能力と育成に向けた授業づくり	中教審議論および国際的な動向を踏まえ、今求められる資質・能力の再確認、それらを育成する授業案を作るバックボーンを得る	国立教育政策研究所 総括研究官 後藤顕一
15:00	10 休憩		
15:10	60 <コース別> 【講義】訪問国理解	海外研修先の国別概要を知り、文化・歴史等概要、援助の重点分野、日本との関係、安全対策について理解する	タイ事務所 前所長 池田修一
			モンゴル事務所 元所長 磯貝季典
16:10	10 休憩		
16:20	60 <コース別> 【渡航ブリーフィング】海外研修について	海外研修の日程説明、必要な準備、諸手続きについて説明する。渡航における留意点（入国・出国手続き、経路国対応）予防接種、任意保険・航空券手配など	JICA 東京 古賀
			JICA 東京 本田
17:30	15 事務連絡		JICA 東京 古賀
	幡ヶ谷へ移動	移動・チェックイン	

7月3日(日) 派遣前研修2日目@JICA東京 セミナールーム406

所要時間		プログラム	目的/説明	講師・進行
09:00	15	事務連絡	本日の流れ、授業実践計画案提出確認	JICA東京 本田
09:15	90	【講義】国際理解教育とアクティブラーニング	国際理解教育の理念を理解し、生徒の資質・能力を育成する授業案を考える	東京都市大学 教授 佐藤真久
11:00	60	<校種別>【授業実践事例紹介】小学校	国際理解教育実践の考え方を整理、授業計画策定経過説明、事例紹介	過年度参加者 田仲永和
		中学校		過年度参加者 山口翠
		高等学校		過年度参加者 箱田恵理香
		特別支援		過年度参加者 加藤祐圭
12:00	60	昼食	コースごとに研修時のかかり分担も行う	
13:00	30	【講義】授業実践計画の留意点	本研修の成果を実践授業に反映させるポイントを理解する	JICA東京 鈴木啓修
13:30	90	<コース別> 【個別ワーク】授業計画の作成	所属校年間計画、行事予定等の確認、過年度報告・実践授業案を検討の上、授業テーマ・実践授業で伝える内容を設定し、計画書を作成する	東京都市大学 教授 佐藤真久 JICA東京 鈴木啓修
15:00	30	休憩・発表準備		
15:30	60	<コース別> 【グループワーク】授業計画の共有と検討	実践授業計画の共有・グループ内での検討・コンサルテーション、海外研修での要望・取得する教材等の確認	東京都市大学 教授 佐藤真久 JICA東京 鈴木啓修
16:30	20	事務連絡	今後の研修の流れと提出物について	JICA東京 古賀
16:50		解散		



講義「資質・能力と育成に向けた授業づくり」



講義「国際理解教育とアクティブラーニング」

4 派遣後研修

日時：平成 28 年 8 月 27 日（土）

場所：JICA 東京国際センター

目的：海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

8月27日(土) 派遣後研修@JICA東京 セミナールーム406

所要時間	プログラム	目的/説明	講師・進行
09:30	受付開始		
09:55	5 開会挨拶		JICA東京 杉村悟郎
10:00	60 【講義】海外研修の体験を生かした授業づくり	授業実践案の作成に向けて、海外研修の体験/素材を整理し、共有する	東京都市大学 佐藤真久
11:05	45 <地域別>【グループワーク】海外研修の体験の整理と共有	授業実践案の作成に向けて、海外研修の体験を生かした授業づくりについて学ぶ	東京都市大学 佐藤真久
11:50	10 休憩		
12:00	40 【講義】非政府組織NGO(身近な国際協力)の活動理解・協働の可能性	NGOや国際交流協会など身近な国際協力事業に対する理解を深め、授業実践における協働の可能性を考える	山崎唯司
12:40	60 昼食		
13:40	20 【講義】授業実践の振り返りと報告書の記載	PDCAサイクルに基いた授業の実施と報告書への記載について理解する	JICA東京 鈴木啓修
14:00	90 <校種別>【グループワーク】授業実践案の見直し	授業案を校種メンバーで検討し、授業案の改善につなげる	東京都市大学 佐藤真久 JICA東京 鈴木啓修
15:30	15 休憩		
15:45	30 <地域別>【グループワーク】授業実践案の共有と検討	都県毎に授業計画を発表しあい、同じ地域の参加者およびJICA東京スタッフと授業実践案を共有する。都県ごとの今後のネットワーク構築を検討する。	東京都市大学 佐藤真久 JICA東京 鈴木啓修
16:15	15 休憩		
16:30	20 事務連絡	今後の研修の流れ(授業実践、県別報告会、報告書の提出について)	JICA東京
16:50	解散		



グループワーク「海外研修の体験の整理と共有」



講義「海外研修の体験を生かした授業づくり」



講義「授業実践の振り返りと報告書の記載」



講義「資質・能力と育成に向けた授業づくり」

5 研修参加者写真



研修国の概要

【タイ】

正式名称：(和文) タイ王国

(英文) Kingdom of Thailand



首都：バンコク (Bangkok)

元首：ワチラーロンコーン国王 (ラーマ 10 世王) (2016 年 10 月即位)

政体：立憲君主制

面積：51 万 4,000 平方キロメートル (日本の約 1.4 倍)

人口：6,593 万人 (2010 年) (タイ国勢調査)

民族：大多数がタイ族。その他 華人、マレー族等

言語：タイ語

宗教：仏教 94%, イスラム教 5%

通貨：バーツ (Baht)

通貨レート：1 ドル＝約 34.25 バーツ (2015 年平均)

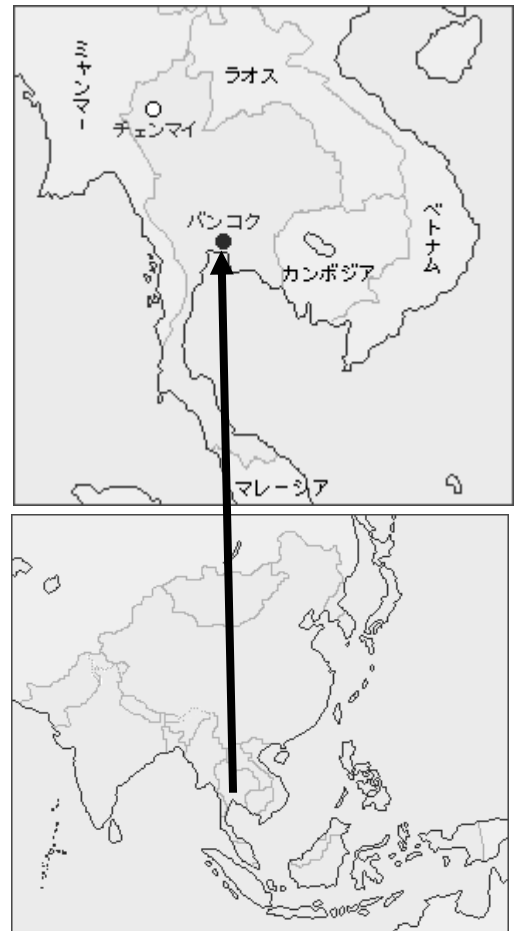
日本との時差：2 時間

主要産業：農業、製造業

GDP: 3,952 億ドル (名目, 2015 年, 国家経済社会開発庁 (NESDB))

一人当たり GDP : 5,878 ドル (2015 年, NESDB)

経済成長率 : 2.8% (2015 年, NESDB)



略史：タイ王国の基礎は 13 世紀のスコータイ王朝より築かれ、その後アユタヤ王朝 (14 ～ 18 世紀)、トンブリー王朝 (1767 ～ 1782) を経て、現在のチャックリー王朝 (1782 ～) に至る。1932 年立憲革命。

気候：熱帯性気候で、雨季 (5 ～ 10 月)、乾季 (11 ～ 4 月) に分けることができる。乾季の中でも 3 ～ 4 月を暑季として特に区別する場合もある。バンコクの暑季の最高気温は摂氏約 35 度、乾季でも 30 度近くになる。

在留日本人：67,424 人 (2015 年 10 月)

タイ国籍の外国人登録者数：45,379 人 (2015 年 12 月現在)

青年海外協力隊の派遣開始：1981 年

【参考サイト】

・ 外務省「各国・地域情勢 (タイ)」

< <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/> > (2017 年 2 月アクセス)

・ JICA「国別生活情報 (タイ)」

< <https://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/ku57pq000005g1bp.pdf> > (2017 年 2 月アクセス)

海外研修日程

日付	時間	活動・訪問先	ねらい
7/24 (日)	午後	成田発→バンコク着	
7/25 (月)	午前	JICA タイ事務所	タイ事情、JICAが行っている事業について理解を深める
	午後	バンケン浄水場	無償資金協力/円借款事例紹介、日本の援助の現状と成果を理解する
7/26 (火)	午前	要援護高齢者等のための介護サービス開発プロジェクトサイト視察	技術協力プロジェクト事例の紹介、日本の援助の現状を理解する
	午後	アジア太平洋障害者センターサイト視察	技術協力プロジェクト事例紹介、日本の援助の現状を理解する
7/27 (水)	終日	サイエンスハイスクール チョンブリ校	タイの教育事情、JOCV 活動について理解を深める
7/28 (木)	午前	レムチャバン港	円借款事例の紹介、日本の援助の現状と成果を理解する
	午後	クロントーイスラム	NGO 団体による教育支援事例の紹介、タイの格差社会の現状や課題について理解を深める
7/29 (金)	午前	セサティアン聾学校	障害者の教育事情、SV 活動について理解を深める
	午後	バンコク都小学校	環境への取り組み事例紹介、日本の援助の現状と成果を理解する
7/30 (土)	午前	バンコク市内視察	
	午後	スラム女性による料理教室 「COOKING WITH POO &FRIENDS」	タイの食、スラムでの暮らしの現状、課題について理解を深める
7/31 (日)	終日	アユタヤ視察	日本との関係、タイの文化や歴史について理解を深める
8/1 (月)	午前	帰国及び報告会準備	
	午後	報告会	研修内容と成果について、JICA タイ事務所に報告する
8/2 (火)	午前	バンコク発→羽田着	

海外研修トピックス

◆バンケン浄水場

円借款のバンコク水道整備事業にて拡張されたバンコク首都水道公社（MWA）バンケン浄水場を訪問し、概要説明を受けた後、施設見学をしました。また、無償資金協力で設立された併設のタイ国水道技術訓練センターも見学させていただきました。



◆要援護高齢者等のための介護サービス開発プロジェクト（LTOP）

バンコクノンタブリー県の保健センターを訪問し、タイの高齢化の現状や LTOP バンコクサイトのプロジェクト概要について説明を受けた後、現地スタッフ等と高齢者宅の訪問しました。参加者は技術協力プロジェクト事例について学びました。



◆アジア太平洋障害者センター（APCD）

センター長より設立の理念について伺い、現地スタッフからプロジェクトの概要の説明を受けた後、第三国研修と施設内にあるヤマザキパンとの協同事業であるパン工房、お店を見学しました。



◆サイエンスハイスクール チョンブリ校

青年海外協力隊員の配属校を訪問し、コンピューター技術の職種で活動する隊員にお話を伺いました。昼食会では 15 名程の先生方と交流し、双方の学校事情について意見交換をしました。午後からは、理数系研究発表会、伝統をモチーフとした美術・音楽・体育の授業を見学し、生徒へのインタビューも行いました。



◆レムチャバン港

円借款事業の供与により建設され 1991 年に開港したレムチャバン港を訪問し、概要説明を受けた後、車で移動し港の一部を視察しました。円借款事例を踏まえて、日本の援助の現状と成果を確認しました。



◆クロントーイスラム

シーカー・アジア財団を訪問し、日本人スタッフよりバンコククロントーイ地区のスラム街について説明を受けた後、実際に案内していただき、子どもたちと交流しました。また、財団の活動についても伺い、NGO 団体による教育支援の活動やタイの格差社会の現状や課題について理解を深めました。



◆セサティアン聾学校

シニア海外ボランティアの配属校を訪問し、幼稚園部のクラスを見学しました。ボランティアの活動について伺い、指導されている美術のクラスの生徒さんの作品などを教室で見せていただきました。



◆バンコク都小学校

バンコク都が主体的に実施しているバイオガспラントの先進校を訪問しました。校長先生に環境問題への取り組み事例を紹介いただき、プラント等を視察しました。実際にバイオガスで料理を作っていただき試食も行いました。



◆料理教室

主に食材を扱う市場を案内していただき、スラムの一角でスラム在住の女性 POO さんに支援団体設立の経緯や活動についてお話を伺い、タイ料理も教わりました。



研修国の概要

【モンゴル】

正式名称：(和文) モンゴル国

(英文) Mongolia

首都：ウランバートル (Ulan Bator)

元首：ツァヒヤー・エルベグドルジ大統領 (2013 年 7 月再任)

政体：共和制

面積：156 万 4,100 平方キロメートル (日本の約 4 倍)

人口：306 万 1,000 人 (2015 年, モンゴル国家登記・統計庁)

民族：モンゴル人 (全体の 95%) 及びカザフ人等

言語：モンゴル語 (国家公用語)、カザフ語

宗教：チベット仏教 (ラマ教) 等

通貨：モンゴル・トゥグルグ (MNT)

通貨レート：1 米ドル = 1,970.3 トグログ (2015 年平均, モンゴル銀行)

日本との時差：1 時間

主要産業：鉱業、牧畜業、流通業、軽工業

GDP：12,015.9 百万米ドル (2014 年, 世界銀行)

一人当たり GDP：4,320 米ドル (2014 年, 世界銀行)

経済成長率：2.3% (2015 年, NRSO)

略史：1911 年 辛亥革命、中国 (清朝) より分離、自治政府を樹立

1919 年 自治を撤廃し中国軍閥の支配下に入る

1921 年 活仏 (カツプツ) を元首とする君主制人民政府成立
(人民革命)

1924 年 活仏の死去に伴い人民共和国を宣言

1990 年 複数政党制を導入、社会主義を事実上放棄

1992 年 モンゴル国憲法施行
(国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国に変更)

気候：大陸性気候であり、年間を通じて雨量が少なく、空気が乾燥している。最も寒いのは 1 月 (全国平均 - 20 ~ - 33 度)、最も暑い時期は 7 月 (全国平均 18 ~ 28 度) である。春 (4 ~ 5 月) は突風、砂嵐に悩まされる。

在留日本人：468 名 (外務省海外在留邦人数調査統計：平成 28 年要約版)

モンゴル国籍の外国人登録者数：7,698 名 (2015 年 12 月現在)

青年海外協力隊の派遣開始：1991 年

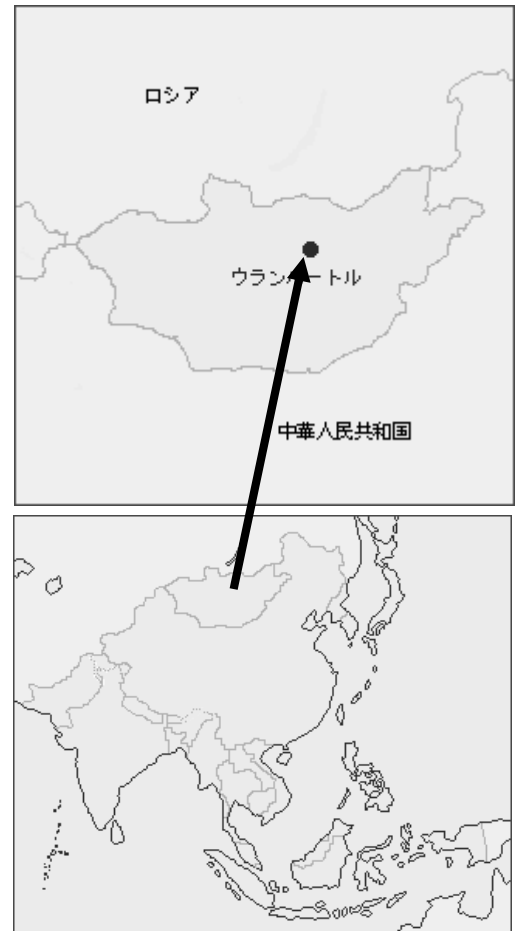
【参考サイト】

・外務省「各国・地域情勢 (モンゴル)」

< <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/index.html> > (2017 年 2 月アクセス)

・JICA「国別生活情報 (モンゴル)」

< <http://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/Mongolia-p.pdf> > (2017 年 2 月アクセス)



海外研修日程

日付	時間	活動・訪問先	ねらい
8/10 (水)	午後	成田発→インチョン→ウランバートル着	
8/11 (木)	午前	JICA モンゴル事務所 JICA事業紹介 安全ブリーフィング	モンゴル事情、JICA事業、日本の援助の現状と成果について理解を深める
	午後	日本大使館表敬 JICAモンゴル事務所 教育分野ブリーフィング	モンゴルと日本の関係について理解を深める 教育分野援助方針、モンゴルにおける教育の特徴について理解を深める
8/12 (金)	午前	モンゴル日本人材開発センター(ビジネス人材育成・交流拠点機能強化プロジェクト)	技術協力プロジェクト事例紹介、日本の援助の現状と成果を理解する
	午後	新モンゴル学園 (青年海外協力隊配属先)	JOCV活動について理解を深める
	夜	ボランティア、事務所員との懇親会	
8/13 (土)	午前	ウランバートル → テレルジ国立公園 チンギスハーンパーク ツェベグマーキャンプ着	モンゴルの自然、文化について理解を深める
	午後	キャンプ周辺のゲル訪問	モンゴル人の暮らしについて理解を深める
8/14 (日)	午前	ツェベグマーキャンプの歴史を聞く 遊牧民のゲル訪問 日本人墓地慰霊碑訪問 ザイサンの丘訪問	モンゴル人の暮らし・文化について理解を深める
	午後	市場調査: ノミンデパート、メルクーリザハ	モンゴル人の暮らしについて理解を深める
8/15 (月)	午前	トゥブ県 子供・家族開発課 (青年海外協力隊配属先)	JOCV活動について理解を深める
	午後	新ウランバートル国際空港建設現場 (円借款、技術協力)	円借款と技術協力の包括的協力事例紹介
		中間振り返りミーティング	これまでの研修での学びの整理、共有を行う
8/16 (火)	午前	セーブザチルドレンジャパンモンゴル事務所 第 39 番学校見学 第 124 番幼稚園見学 チンゲルテイ地区第9、第 10 ホロー役場訪問	国際NGOによる教育支援事例紹介 草の根技術協力事例紹介
	午後	障害児親の会(NGO) (青年海外協力隊配属先)	JOCV/NGO 連携の事例紹介
8/17 (水)	午前	第 118 番学校	初等学校における教育の現状・課題について理解を深める
	午後	JICAモンゴル事務所 環境分野ブリーフィング	モンゴルにおける環境協力の特徴について理解を深める
		ナランギンエンゲル処分場	廃棄物管理能力強化プロジェクト(無償資金協力・技術協力)事例紹介
8/18 (木)	午前	JICA モンゴル事務所 研修報告	研修での学び、今後の授業計画報告
	午後	ウランバートル市内見学 (ガンダン寺、歴史博物館)	モンゴル文化への理解を深める
8/19 (金)	午前	ウランバートル → 成田 着	

海外研修トピックス

◆JICAモンゴル事務所訪問

モンゴルに対する日本の国際協力の歴史と、モンゴルの政治・経済の動向、中所得国に成長したモンゴルへの協力について、重点分野（鉱物資源の持続可能な開発とガバナンス強化、すべての人々が恩恵を受ける成長の実現に向けた支援、ウランバートル都市機能強化）に沿って説明をいただきました。



◆モンゴル日本人材開発センター

目覚ましい経済発展を遂げるモンゴルにおいて、日本的経営を理解するビジネス人材の育成と日本との人脈形成の拠点として開設された通称「日本センター」を視察し、センターで活動する日本人専門家にお話を伺い、日本語の授業を見学しました。

◆新モンゴル学園

新モンゴル学園は、日本式の教育を取り入れた私立校で、生徒や教員が日本へ留学したり交流を行っています。サマースクールでの青年海外協力隊員による日本語クラス（高校1年生対象）を見学、買い物の単元に沿って生徒達と日本語で双方向インタビューを行いました。

また、同学園小学校教諭に集ってもらい、教育の上で感じている課題などについて活発な意見交換を行うことができました。



◆ゲル訪問

文化体験で訪れたテレルジ国立公園で、周辺のゲル2軒を訪問しました。夏の間だけおばあちゃんのゲルに来て過ごしている都会の子供たち、テレルジで馬を放牧し馬乳酒を作る遊牧民のゲル。どちらのお宅でも子どもたちにインタビューすることができ、モンゴル人の暮らしについて理解を深めました。都会の子も遊牧民の子も、よくお手伝いをし、勉強が好きだと言っていたのが印象的でした。



◆日本人墓地慰霊碑訪問

ダンバダルジャー日本人墓地を訪問し、敗戦後、抑留された日本人捕虜の歴史と、その慰霊碑を守り伝えているモンゴル側の努力があることを学びました。



◆トubb県 子供・家族開発課

モンゴルでは、共働き家庭が一般的。学校もほとんどが2部制なので、空き時間や長期休暇の子供の居場所の確保が課題の一つです。トubb県では子供・家族開発課がコミュニティーラーニングセンターを開設。配属された青年海外協力隊員による日本語教室も行われています。



◆新ウランバートル国際空港

新ウランバートル国際空港建設事業に関し、人材育成及び運営・維持管理能力向上プロジェクトの専門家からお話を聞き、現場を視察しました。参加者は円借款と技術協力の包括的協力について理解を深めました。



◆セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 要保護児童支援制度の改善及び強化支援事業

（草の根技術協力事業）実施中のホロー（最小の地区組織）

貧困や保健衛生など様々な問題を抱え、保護の必要な児童に対する支援を、日本の NGO が現地のホロースタッフとのチームを組織して実施中。医師、看護師、学校、ソーシャルワーカー、警察との連携により草の根の活動が根付いている現場を視察しました。



◆障害児親の会（NGO）

モンゴルの障害児への教育は、十分とは言えない状況の中、当事者を中心とした現地 NGO がグループクラスや巡回訪問を行っています。青年海外協力隊員が配属され、将来的に国で実施してほしいサービスモデルの策定や政策提言にもつなげていければ、と活動している様子を視察しました。



◆第 118 番学校

拡大し続ける都市周辺のゲル地区に、無償資金協力によって新設された第 118 番学校を訪れました。二国間クレジット制度による暖房用高効率ボイラーが 2014 年に設置され、地球温暖化対策にも貢献中。

◆ナランギンエンゲル処分場

2008 年に無償資金協力によって建設されたナランギンエンゲル処分場を訪問し、廃棄物管理能力強化プロジェクト（2009 年～ 2012 年）のカウンターパートより説明を受けました。参加者は施設見学を通じ、貧困と環境問題の連鎖についても考察しました。



8 授業実践 研修を生かした国際理解教育の事例

[ESDの視点に基づいた授業実践]

“持続可能な発展のための教育（ESD）”の視点に基づいて授業を実施し、その視点について報告書内に記載しています。

- ・「2. 単元の目標」
ESDで重視する7つの能力・態度に該当するものがあれば（ ）内に記載しています。
- ・「3. 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点（国立教育政策研究所・2014）」
「7授業事例の紹介」の（1）指導案（才）本時の展開の表中「指導内容」に留意した視点に沿った具体的な指導内容を記入しています。該当する視点を【 】内に記載しています。
（例：「・授業の最初に〇〇？と児童に問いかける【1】」）

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

学校名: _____

氏名: _____

【担当教科: 】

● 実践教科等: _____

● 時間数 : 時間 _____

● 対象生徒 : _____

● 対象人数 : 人 _____

1 単元名 _____

2 単元の目標
ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る

3 考えを深めるために対話のある活動を導入する

5 調べ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する

2 子供の多様な考えを引き出す

4 考えるための材料を見極めて提供する

6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

ア・互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観 _____

(2)児童生徒観 _____

(3)指導観 _____

5 評価基準

観点				
評価規準				
評価方法				

※過去の本研修参加教員による実践事例を、JICA 東京ホームページに掲載しています。

<http://www.jica.go.jp/tokyo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/>

7 授業事例の紹介 小単元名【 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 ○○月○○日()第○限

(イ)実施会場 ○○○教室

(ウ)本時の目標

(エ)指導のポイント

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)

(2)授業の振り返り

(3)使用教材

(4)参考資料等

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

10 教師海外研修に参加して

[PDCA サイクルに基づいた授業実践]

PDCA サイクルに基づいて授業を実施し、検証の結果を報告書内に記載しています。

・「9. 授業実施全体の成果と課題及び課題の改善策」

国際協力の在り方や必要性を取り扱う授業プランについて、海外派遣前、海外派遣中、海外派遣後を通してどのようなプロセス（プランの組立て方、プランの修正、苦勞したところ、計画通りだったところなど）を経て実施に至ったかを記述しています。

PDCA サイクルにおけるチェックとアクションの一連のプロセスを具体的に記載しています。



MONGOLIA

学校名：松戸市立東松戸小学校

氏名：菅原 由実

〔担当教科：〕全教科

- 実践教科等：学級活動 道徳
- 時間数：6時間
- 対象生徒：小学1年生
- 対象人数：32人

1 単元名

2020年 東京オリンピックの招待状を書こう

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・「モンゴルと自分たちとの生活や文化を比べ知ること、親しみをもちながら他国への興味関心を深める。(多面的・総合的に考える力)」
- ・「モンゴルと日本のかかわりを知ること、お互いに助け合っていることに気が付く。また、助け合い協力していこうとする心情を育てる。(つながりを尊重する態度)」
- ・「招待状(紹介のページ)書く活動を通して、日本や地域、自分たちの生活のよさに気が付く。また、その一員として生活していこうとする態度を育てる。(進んで参加する態度)」

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、モンゴルの国や文化の理解を通し、他国への興味関心、他国と自国のつながり、自国への興味と誇りを深めていくことをねらいとしている。

本校は、今年4月に開校したばかりの新設校である。本校学区は、まさに開発真只中にある。アパートやマンションをはじめ、大型施設がどんどん建設されている。鉄道や道路などの交通の利便性も高い。その中でも、人々が憩える公園や森があったり、四季の変化が感じられる桜通りがあったりするなど、この地域ならではの自然も多いのが特徴である。本学級の子供達は、生活科での公園探検や季節の遊びを通して、そういったこの地域の特徴を学んできている。この地域で暮らす一人として、これからもその良さを大切にしながら過ごしていってほしいと思う。

今年度はリオオリンピックが行われた。本学級の子供達も、夏休み前からとても心待ちにしていた。その関心の高さからも、「オリンピック」をテーマとした国際理解教育を行うことを考えた。スポーツを通して、世界各国から集まった様々な人や文化が交流するという話から本単元を始める。小学校1年生ということもあり、実体験やクイズなどを通して楽しみながら他国を理解させていきたい。その中で、自国と比べた時に違いよりも似ているところがたくさんあることに気が付かせ、親しみをもちながら相手国を理解していけるようにしたい。また、環境や文化の違う中で生活する人々や、国を超えて人々の生活の向上のために活躍する人がいること、そしてそれらの「人の思い」に気付かせることで、これからの国際社会を担う一員として何が大事であるのか考えるきっかけとしたいと考え、本単元を実践していく。

(2)児童生徒観

LARD(松戸市・言語活用科)の授業、また昼の放送でその日の一口英語や英語の歌が流れてくるなど、児童が外国語に触れる環境が日常にある。本学級の児童も、歌や手遊びを通して外国語に楽しく触れている。

私のモンゴル話にも、大変興味関心をもって聞いていた。自分たちの国や文化の違いがあることを

知り、目を丸くして話を聞く姿が印象的だった。「もっと知りたい」「どうなっているんだろう」というような思いも、授業する度に強くなってきていた。また、文化や生活、国の特徴など異なる外国の国でも、「日本と似ているところがたくさんある」ことや、「日本とモンゴルにはつながりがある」ことを知り、モンゴルへの親しみもさらに増していると感じる。

本学級には入学当初から、世界の国名や国旗に関心を示す児童が数名いた。今は、その児童を中心に、教室掲示の世界地図を見て、進んで様々な国のあいさつや国旗を覚え交流し合う姿も多く見られる。モンゴル紹介の授業と並行して、世界の国のあいさつや国旗を覚えゲームも行ってきたこともあり、様々な国々に関心をもち始めてきていることがわかる。

5 評価基準

観点	1. 関心・意欲・態度	2. 気づき	3. 思考・判断
評価規準	・他国の特徴や文化、生活などに関心をもっている。	・自国と比べたときに、違いだけでなく、似ているところもたくさんあることに着目している。 ・自国が、モンゴルをはじめ様々な国とつながっていることに気付いている。	・4つのキーワードをもとに、モンゴルの国の様子を考えようとしている。 ・モンゴルの特徴と比べながら、日本の特徴を考えている。
評価方法	・発言 ・感想カード	・発言 ・感想カード	・発言 ・感想カード ・紹介カード

6 単元の構成

時	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	オリンピックの招待状を書こう【学活】	・学習の見通しをもつ。 ・学習問題をもつ。	・リオオリンピックについて話す。 ・招待状を書くために、モンゴルのことを学習していこうという見通しをもつ。 ・モンゴルは「なぜ柔道や相撲が強いのか」という疑問から、「強さの秘密を知ろう」という学習問題をたてる。
2	モンゴルのことを知ろう① ～柔道や相撲の強さの秘密～【道徳】	・国の特徴を知り、モンゴルへの関心を深める。	・「食べ物」「気候」「土地」「文化」をキーワードとして、写真を使いながらモンゴルの国の特徴を知る。 ・あいさつやじゃんけん、おもちゃなど実物に触れながら文化体験をする。
3	モンゴルのことを知ろう② ～モンゴルの小学校～【道徳】	・小学校や子供達の様子を知ることで、モンゴルへの関心をさらに深める。 ・異なる環境の中でも、子供達が一生懸命学んでいることに気が付く。	・写真を使いながら、自分たちの小学校と似ているところや違うところを見つける。ちがいがより、似ているところがたくさんあることに着目する。 ・自分たちと同じ小学生の好きな遊びや好きな勉強、将来の夢などを聞く。
4	モンゴルのことを知ろう③ ～モンゴルと日本のつながり～【道徳】	・日本とモンゴルには①もの②人のつながりがあることを知る。 ・お互いに協力することの大切さに気が付く。 ・モンゴルだけでなく、日本は世界ともつながりがあることを知る。	・モンゴルには日本人やもの、また日本にもモンゴルのものや人があることを知る。そこから、両国の間には「人のつながり」や「もののつながり」があることを知る。 ・モンゴルの地で、人々の生活の向上のために活躍する日本人の存在を知る。 ・日本人もモンゴル人も「助け合う」気持ちをもって活動をしていることを知り、互いに協力していくことの大切さに気が付く。 ・日本には、世界からたくさんのものがきていることを知る。日本は世界ともつながっていること

			に気が付く。
5	招待状を作ろう ①【学活】	・これまでの話を聞き、モンゴルの中で自分が一番すてきだなと思ったことを選ぶ。	・これまでの話を振り返り、再度モンゴルの国の特徴を整理する。 ・一番すてきだなとおもった選び、招待状に書く。 ・6回目の授業で紹介することを伝え、紹介の練習をする。
・空いた時間を使い①担当する紹介テーマを決める。②紹介テーマについて、書く材料を探す。それぞれのテーマに対し、その詳しい内容を皆で考える。その内容に合う写真を見ながら、書きたいことをイメージさせる。			
6	招待状を作ろう ②紹介のページを書こう 【学活】	・モンゴルのすてきなところを紹介する。 ・紹介のページを書く活動を通して、日本や自分たちの生活のよさに気が付く。	・モンゴルのすてきなところを、来てくれた先生方に写真を見せながら紹介する。 ・「日本ならではの」を探したり、モンゴルの特徴と比べたりしながら、紹介カードを作る。

7 授業事例の紹介

小単元名【 しょうかいのページをかこう 】

(1) 指導案

(ア) 実施日時 11月29日(火) 第5限

(イ) 実施会場 オープンスペース 1年2組教室

(ウ) 本時の目標

- ・これまでの授業を通し、感じたモンゴルのよさを相手に伝える。
- ・「日本ならではの」を考えたり、モンゴルの特徴と比べたりしながら、紹介のページを作る。

(エ) 指導のポイント

- ・これまで学習したモンゴルの国の特徴と比べながら、ページの内容を考えられるようにする。
- ・自国ならではの特徴やよさに気が付けるようにする。

(オ) 本時の展開

・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規 準・評価
5	1 すてきなところを紹介する。	○写真を見せながら、相手にモンゴルのよさを伝える。	ペア	・伝え方の約束を確認する。 ・1分×3回行う。	話す態度
10	2 本時の目標を確認する。	しょうかいのページをかこう			
		○教師の作った見本を見せて、紹介カードに書くことを確認する。	全体	・見本は大きく作ったものを掲示する。 ・見本を見せて、どんなことを書くかを発表する。 ・「日本ならではの」と「モンゴルと比べて(にているところやちがうところ)」という書くポイントをおさえる。	発言
20	3 紹介文を書く。	○「紹介のページを書こう」	個人	・机間指導し、悩んでいる児童には声をかける。 ・進みがはやい児童のページを投影機で映し、見本とする。	書く態度
5	4 書いたことを発表する。 【7】	○「作ったページを紹介しよう」 ・数人の児童が作った紹介のページを発表する。 ・友達のページを見て、よかったところを伝えよう。	全体	・児童のカードは投影機で映す。 ・ページを書いた感想も発表する。	発言 聞く態度
5	5 学習のまとめをする。	○作った招待状をモンゴルの友達に送ることを伝える。 ○JICAの方から、「世界をつなぐ仕事」についての話を聞く。	全体	・4時間目に行った授業の「世界と日本のつながり」と関連させて考えられるようにする。	聞く態度

※紹介テーマ（11のテーマにしぼり、モンゴルと日本の特徴をそれぞれ考えた。）

国のこと	①土地②気候③食べ物④文化⑤交通・家
学校のこと	⑥学校⑦教室⑧勉強⑨給食⑩行事⑪遊び

(2) 授業の振り返り

【成果】

・これまでの授業を通し、子供達がモンゴルの友達に向けて招待状を書きたいという思いを高めたまま本時の活動に臨むことができた。

【課題】

- ・紹介カードの担当を決めてしまうのではなく子供達に選ばせていたら、もっと書きやすかったと思う。
- ・「日本ならではの」は、1年生にとってはテーマが身近でなく、難しかった。
- ・紹介文を書く際、「日本では」「くらべると」のキーワードをどう入れるか、子供達が悩んでいた。「日本では」は使いやすかったが、「くらべると」は使いにくかった。「にていて」や「ちがっていて」の方が使いやすかった。

(3) 使用教材

①オープンスペースの掲示

【モンゴル紹介コーナー】

【わたしたちが選んだモンゴルで1番すてきなところ】



本校のオープンスペースを使って、モンゴルの文化紹介を行った。モンゴルについての写真を掲示したり、おもちゃや民族衣装などの実物も展示したりして、校内児童、来校した保護者にも楽しんでもらえるようにした。また、授業を通し、子供達が1番すてきだと思ったモンゴルのみ力について書いたカードも、文化紹介の一つとして掲示した。

②教室掲示

【授業コーナー 板書や授業後の感想】

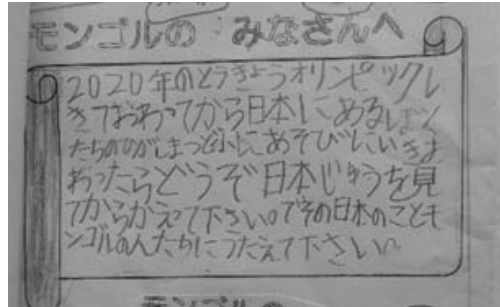
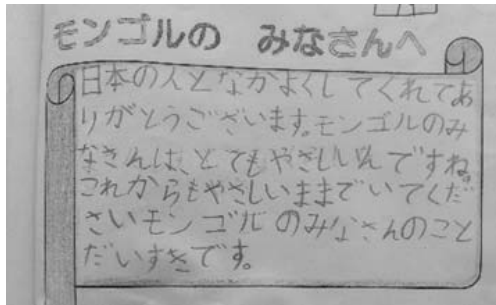


【子供達の関心の高い世界地図・つながり】

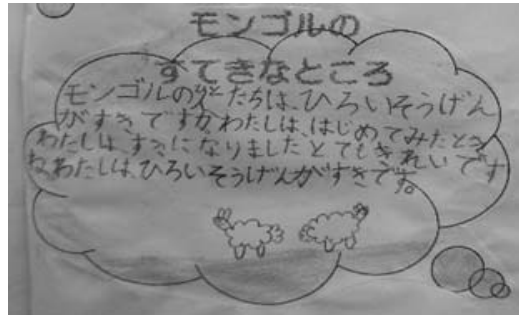
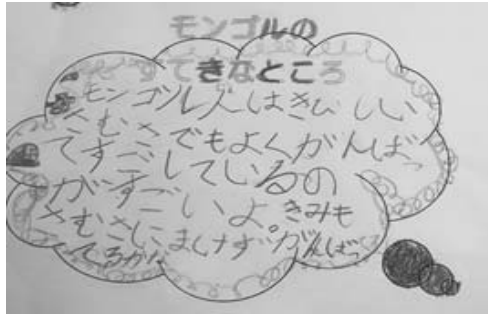


③完成した招待状

【モンゴルのすてきなところ・モンゴルの友達へ】



【モンゴルのすてきなところ】



【日本・わたしたちの学校のしょうかい】

①給食の時間のしょうかい

②日本の春・桜のしょうかい



日本ではきょうしゅくをくばる
とうはんがしまきょうしゅく
とうはんはまををしてはく
いもきてきょうしゅくをくばります。



本では、はるになたらさくらが
かいいにさきはこります。はるになると
はるまつげにうさぎがひらかれて
あたらしい一年生がはいてきます。

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

【毎時間の感想から】

○3時間目

- ・にほんとおなじものやちがうものがあるのをはじめてして、おもしろかった。
- ・おおくのモンゴルのひみつがいっぺんにわかった。ママといっしょに「せかいのこんにちは」もできて、よかった。

○4時間目

- ・3.11のときにモンゴルの人々がたすけてくれたことが見れたし、モンゴルのしょうぼう車もきてたすけてくれて、ありがとうございますと思っています。
- ・日本とモンゴルはたすけあつたりなかよしだったり、モンゴル人が日本の手つだいをしたり日本がモンゴルの手つだいをしていました。
- ・モンゴル人は日本を大事にしているのがわかりました。あと、じしんのときにたすけてくれるモンゴル人がやさしいなとおもいました。

【意識や行動の変容】

○自国への関心

- ・生活科の昔あそび、国語のカタカナや漢字学習などの授業の時間や給食の時間などで、子供達が「日本ならではの」に気が付き、進んで探すようになった。日本の文化や食べ物を中心に、自国への関心が高まっていることがわかる。

○他国への関心

- ・子供達同士の会話(世界のあいさつを言い合う、国名の話をするなど)、図書室から借りる本(文化紹

介の本、国旗の本、世界地図など)を見ていると、様々な国への興味関心へもってきていることがわかる。

・身の回りのカタカナ言葉に反応し、どこの国からきているものなのか話している様子をよく見ることから、特に「もののつながり」に関心をもっていることがわかる。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P 計画	・児童の実態、ねらいや学習内容と教科・領域との関連を考えながら単元計画を練った。 ・「他国への興味関心を深める」「自国のよさに気付く」を大きなねらいとすることを決めた。 ・帰国後、伝えたいことを4つにしぼった。 ①モンゴルはどんな国か②モンゴルの小学校・子供達のこと③モンゴルと日本をくらべる④モンゴルと日本のつながり
D 実施	・国の特徴を考えるときのキーワードを決め、1年生でもわかりやすいようにした。キーワードは、どの授業でも使い、またキーワードをもとにさらに関連させて考えていけるようにした。キーワードは、「土地」「食べ物」「気候」「文化」を基本として、「<u>広い草原</u>」「<u>海がない</u>」「<u>家畜</u>」「<u>赤と白の食べ物</u>」「<u>きびしい冬の寒さ</u>」「<u>祭り(ナードム)</u>」「<u>二部制</u>」、「<u>もののつながり</u>」「<u>人のつながり</u>」などのように広げていたり、増やしていたりした。 ・パワーポイントを使い、多くの写真を見せた。クイズにし、楽しく国のことが理解できるようにした。文化紹介では、衣装を身につけたり、飲み物の匂いを嗅いだり、おもちゃに触れたりした。 ・教室には、1時間ごとの授業の板書やモンゴルを紹介する写真を掲示した。また、本校のオープンスペースに文化紹介・体験コーナーを作り、いつでも誰でもモンゴルに触れられるようにした。
C 検証	・授業の最後には、子供達に「心に残ったこと」として、感想を書かせた。子供達がどんなところに関心をもったか把握したり、新たな疑問に対しては協力隊の方に聞いて応えたりした。次の授業で数人の感想を発表し、友達がどんなことを感じたのか全体に共有できるようにもした。 ・3時間目を授業参観、4時間目を市教委訪問で実施したことで、保護者や教育委員の先生にも授業を参観し、アドバイスをもらった。 ・他クラスで事前授業を行った。子供達の反応を把握したり、改善に向けてのアドバイスをもらったりして自クラスの授業に臨んだ。
A 改善	・招待状を通して、実際にモンゴルの友達とつながることができたのはよかった。 ・紹介コーナーの展示の仕方には工夫と改善が必要である。 ・特に低学年における国際理解教育は、教科・領域とどのように関連させていくのか、今後とも考えていく必要がある。

10 教師海外研修に参加して

この研修で、現地の方、JICAの方々の「思い」を聞くことができた。そこには、「人々の生活をよりよくしたい」という強い思いが共通しており、そして様々な問題の解決に向けて奮闘する姿があった。私は、その人々の姿と思いを、子供達に伝えなければいけないと心を突き動かされ、本実践に臨んだ。

授業を進めていく中で、子供達がどんどんモンゴルの魅力にはまっていった。他の国のことを知ることとはとても面白いことだと話していた姿も印象的である。また、プラスの面に目を向けるばかりでなく、中には二部制という問題に最後まで熱心に関心を寄せていた子もいた。二部制という環境の中で勉強やお手伝いを頑張っているんだねと共感する様子が見られたことも嬉しかった。

モンゴルから帰国後、伝えたいことは山ほどあった。その中から選び、授業を組み立てていくのは難しかった。しかし、授業が終わる度に、子供達が心に残ったことや感じたことを口々に伝えてくれたことから、とてもやりがいのある実践となったと感じる。子供達の興味関心をさらに高めるだけでなく、自分たちで問題を見出し、それに向けてなんとかしようという思いをもつ子供が増えていけば、それがやがて「社会の変容」へつながっていくのだらうと思った。これからの国際社会が「一人ひとりの能力が発揮できる社会」となるよう、子供達と共に考え行動できる教師として励んでいきたい。



MONGOLIA

学校名：吉川市立関小学校

氏名：朝倉 敦美

[担当教科：全教科]

- 実践教科等：国語
- 時間数：12時間
- 対象生徒：2学年
- 対象人数：31人

1 単元名 スーホの白い馬

2 単元の目標

場面の様子を想像しながら物語を読む。

○場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。

(多面的、総合的に考える力)

○物語から心に残った言葉や文を書きぬき、自分の経験と結び付けて、感想をまとめ、交流することができる。

(コミュニケーションを行う力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

「スーホの白い馬」では、スーホと白馬の心の交流を軸に馬頭琴という楽器が作られた経緯が語られていく。今まで学習してきた作品よりも長文だが、動物との温かな絆が描かれ、一つ一つの場面が印象的であり、感動的である。特にスーホと絆を深めてきた白馬の死は、児童たちにとって、衝撃的で心に深く刻まれるであろう。しかし、夢に出てきた白馬の言葉によってスーホの気持ちが変わっていく。自分勝手な殿様に対する怒りや白馬を失った悲しみでいっぱいだったスーホの心がどんな風に変わっていったのかを考えさせたい。

そして、「スーホの白い馬」はモンゴルの人々が大切にしてきた古くから伝わる民話をもとにした作品である。モンゴルで得た教材を使用し、モンゴルの世界に浸らせながら読み進めたい。さらに日本を含む世界の国々で先人から読み継いできた昔話にも興味を持たせ、紹介できるようにしたい。

(2)児童観

これまで児童たちは、「スイミー」「お手紙」等の作品を通して、場面の様子や登場人物の気持ちを想像しながら音読劇をしたり、感想を書いたりしてきた。音読劇では、台詞を暗記し、登場人物になりきって悲しみや喜びを表情や動きで表すことができた。感想を書くときは、学習した物語の登場人物に愛着をもち、どんな気持ちなのか想像しながら読んでいる姿が見られた。多くの子は登場人物の心情を文章から読み取ろうと何度も声に出して読み、想像を膨らませている。

児童にとってモンゴルは初めて知る国である。モンゴル人が騎馬民族であることや馬乳酒やナードムが生活の一部であり、馬がモンゴル人にとってとても身近な存在であることを児童は知らない。そこで児童がスーホという人物、さらには物語の舞台となっているモンゴルについて理解することで、さらに登場人物の心情に迫れるのではないかと考えた。モンゴルで収集した写真や動画を見て、そうしたスーホの背景を理解することでスーホがどうして白馬とこんなに心を通わせることができるのか、どうして白馬を失ったときそんなに悲しんでいたのかということを考えさせたい。

(3)指導観

- 現地の写真や映像を使用し、個人やグループで考える時間をとることで、スーホの文化的背景を知ること、スーホの心情に迫るようにしたい。
- 授業の後半に音読を取り入れた。スーホのくやしさをかなしさ、ずっと白馬と一緒にいたいと願う強い気持ちに迫ることで、スーホの心情を想像しながら、心をこめて音読できるようにしたい。
- 「スーホの白い馬」は、今まで学習した物語の中で最も長く、苦手意識を持つ児童もいた。そのため、実物の資料を多く取り入れ、興味・関心を引き出したい。

5 評価基準

観点	ア 国語への 関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
評価規準	・主人公の行動や会話に注意しながら物語を読み、感想を交流している。 ・登場人物に興味を持ち、環境や心情を理解しようとしている。	・本文を読み、考えたことや感じたことを発表し、友達との違いに気をつけて聞いている。	・登場人物の行動や会話から場面の様子をつかみ、想像を広げて読んでいる。	・本文には様々な複合語があることに気づき、語幹の違いを理解している。
評価方法	観察、ノート、ワークシート、発言	観察、発表、ワークシート	ノート、ワークシート	ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ・ 2	「スーホの白い馬」を読んでのはじめの感想を書き、グループで話し合う。	関心を持って作品を読み、主人公の気持ちを考えながら感想をまとめようとする。	・範読を聞き、物語の全文をとらえる。 ・初発の感想をまとめ、交流する。
3	場面わけをしよう。	「いつ」「どこ」「だれ」を意識して場面わけをする。	・前ばなし場面を用いて「いつ」「どこ」「だれ」を整理し、場面わけをする。
4 ・ 5	あらすじをまとめよう。	中心人物の行動や会話に注目し、物語のあらすじを工理解する。	・穴埋め方式のプリントを用いてあらすじのまとめ方を学ばせ、まとめる。
6	クライマックス場面について考えよう。	クライマックスの場面において、中心人物の気持ちの変化、その理由をとらえる。	・クライマックス場面について考える。 ・何がどう変化したのか、変わったのはどうしてなのかを話し合わせる。
7	モンゴルについて知ろう。	モンゴルの文化や生活について触れることで登場人物の心情をより深く理解する。	・モンゴルの物や写真を見てスーホがどのように生活していたのかを知る。 ・モンゴル人にとって人と馬との関係はどんなものかを知る。 ・馬頭琴の音色を聞く。
8	作品の心を考えよう。	作品が最も伝えたいことをペアでまとめる。	・作品が最も伝えたいことを考え、ペアで話し合い、まとめる。 ・複合語について理解する。
9	最後の感想を書こう。	より深くスーホのことを理解したうえで感想を書き、初発の感想と比べる。	・前回までの授業で学んだことを踏まえてもう一度感想を書く。 ・自分が書いたはじめの感想と比べ、お話を想像しながら読めるようになったかふりかえる。

10	感想を伝え合おう。	グループで感想を伝え合い、友達との違いに気をつけて聞く。	・グループで感想を伝え合う。 ・最初の感想と違うところに着目し、どうして変わったのか話し合う。
11	色々な国の人が大切にしてきた物語を読み、紹介しよう。	友達との違いに注意して、発表を聞く。	・色々な国の昔話や、その土地に伝わるお話を、想像をはたかせながら読む。 ・読んだ本をプリントにまとめグループで発表する。
12	好きな自分の国の物語を紹介しよう。	自分の知っている物語のあらすじを話し合ってまとめ、発表する。	・好きな自分の国の物語のあらすじを書き、グループで話し合う。 ・一冊の本にし、発表する。

7 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルについて知ろう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 1月26日(木)第5限

(イ)実施会場 2年4組 教室

(ウ)本時の目標

モンゴルの文化や生活について触れることで登場人物の心情をより深く理解する。

(エ)指導のポイント

- ・グループに一つずつ写真を配り、話し合わせることで一人一人の児童が主体的、積極的に考えられるようにする。
- ・現地の人たちの生の声を聞くことでスーホにとって白馬がどれだけ大切だったか児童の心に響くようにする。

本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5分	1 本時の課題を提示する。	・本時の課題をつかむ。	一斉		
	どうして白馬のすがたをかえてまで、スーホは白馬といっしょにいたかったのだろう。				
		*いくら仲がいい動物でも死んじゃったら終わりじゃないかな。 *どうしてそこまでしていっしょにいたいのかな。		・白馬を楽器に変えてまで一緒にいたかったスーホの気持ちについて考えさせる。	
10分	2 モンゴル生活クイズをする。	・グループごとにモンゴルの物の写真を見て、何か話し合い、発表する。	グループ	・大型テレビを使用し正解を知り、スーホの生活について理解を深める。	
10分	3 モンゴル人にとって馬とはどんな存在か動画を通して知らせる。	・動画を見て、モンゴル人にとって馬とはどんな存在か知り、自分の意見を発表する。	個人	・教師の話だけでなく動画で現地の人々の生の声を聞くことで説得力を持たせる。	
7分	4 馬頭琴の演奏を聞かせる。	・馬頭琴の演奏を聞き、どんな感じがするか考え、発表する。	個人	・友達の考えと自分の考えを比べられるようにする。	

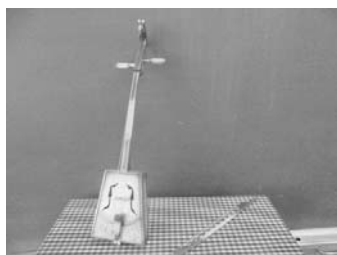
7分	5 スーホの心情をもう一度考えさせる。	・本日の学習を踏まえて、スーホのクライマックスの場面の心情を、もう一度考える。 * モンゴルの人にとって馬は家族なんだ。だからスーホは白馬といっしょにいたかったんだな。 * スーホの白馬を思う気持ちが馬頭琴のかなしい、きれいな音なんだな。	グループ	・モンゴルについて初めて分かったことからスーホの生活や白馬に対する思いを想像させ、感想を書かせる。 ・現地のモンゴル人通訳ダワさんの話を思い出させ、書き出しを助言する。	エ 登場人物の行動や会話の様子をつかみ、想像を広げて読んでいる。 〈評価方法〉ワークシート
5分	6 クライマックス場面を音読させる。	・クライマックスの場面を音読する。	個人	・スーホの気持ちの変化に気をつけて全文プリントを用い、音読する。	
1分	7 次時の学習内容を知らせる。	・次時の学習内容を知る。	一斉		

(2) 授業の振り返り

- ・モンゴルで収集した画像や映像を活用した結果、児童にモンゴルの雰囲気をよく伝えることができた。
- ・教室掲示の国語コーナーは、モンゴルの情報が充実していた。
- ・モンゴルという国への児童の興味・関心を高めることができた。
- ・グループで話し合わせる前に、一人でじっくり考える時間を取った方がよかった。
- ・1時間に2回の話し合い活動を取り入れたため、時間を超過してしまった。これからは1時間に1回の話し合い活動をしっかりさせることで児童の考えを深めていきたい。
- ・導入の場面で「どうして白馬のすがたをかえてまで、スーホは白馬といっしょにいたかったのだろう」という課題をもっとしっかりおさえるべきだった。それが文化的背景を学ぶ動機につながる。
- ・モンゴルの生活クイズの場面では、全て馬に関連するものを出すとモンゴル人にとって馬がどれだけ身近で大切な存在か児童は感じることができた。
- ・馬頭琴の演奏を聞かせる場面では、もっと曲を吟味すべきであった。
- ・交流の場面でグループでの話し合いの際、司会、記録、発表者などの役割分担を明確にすべきだった。消極的な子が積極的な子の意見に流されてしまったり、発言の機会が少なくなったりという場面が見られた。
- ・ワークシートは写真を取り入れ、児童にも分かりやすいようにした。裏面には、振り返り欄を設け、児童が授業で何を感じとったのかを明確にできるようにしたにも関わらず、時間を超過してしまったので、十分に考えさせることができなかった。これからは、時間に考慮し、授業を計画していきたい。

(3) 使用教材

① 馬頭琴、民族衣装



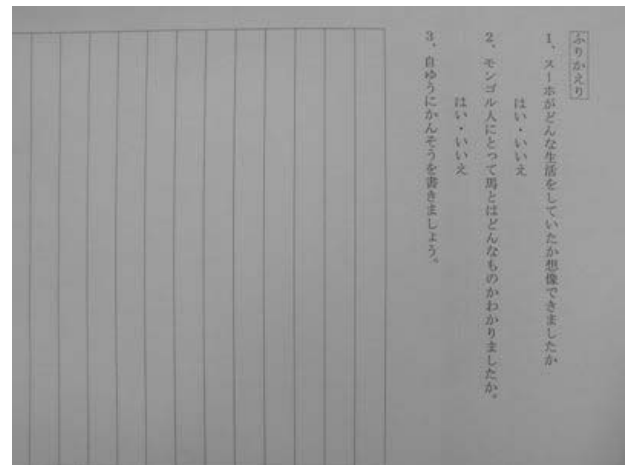
②ゲル、ボーズ、馬乳酒、シャガイ、マニ車、などモンゴル人の生活が分かる写真



③遊牧民のゲルを訪問した際、出会った少女、新モンゴル高校の生徒、通訳ダワさんへの馬についてのインタビュー映像

④馬頭琴の演奏の映像

⑤ワークシート



(4) 参考資料等

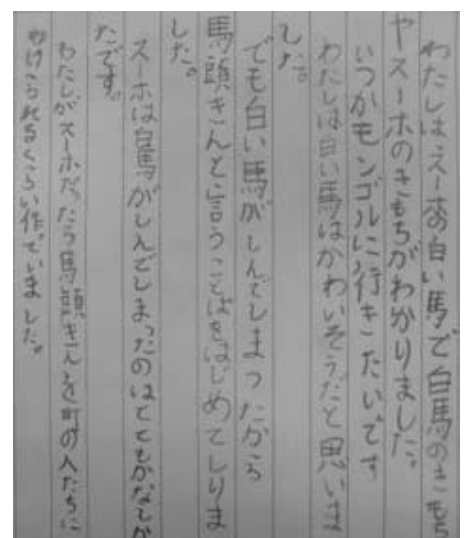
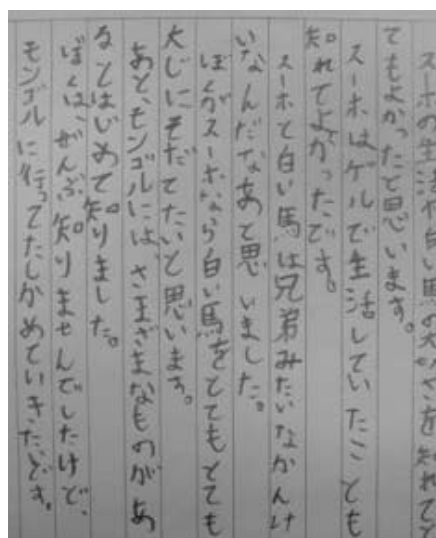
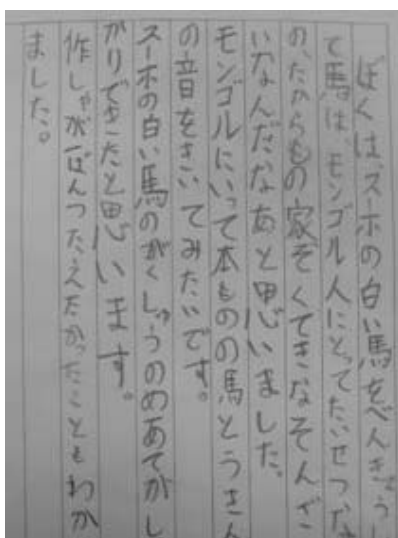
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】

(文部科学省 教育出版 平成23年11月)

- ・日本ユネスコ国内委員会 学習指導要領におけるESD関連記述

(<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339973.htm>)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化



授業の感想

何よりの成果は、この授業を通して初めは長くて難しいと感じていたこの物語が児童にとって楽しい物語になったことである。音読の宿題を進んでするようになった。

そして、児童はモンゴルという国が大好きになり、もっと知りたいと思うようになった。海外への興味を引き出すことができた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

2年生で「スーホの白い馬」を扱うため、海外派遣前から馬頭琴について、馬とモンゴル人との関係について、モンゴル人の生活について学び、児童に伝えようと計画していた。海外派遣中、日本とモンゴルの友好関係を知り、それを授業に取り入れたいと感じた。しかし、国語の授業で取り入れるのは困難であった。そこで、「スーホの白い馬」を通してモンゴルに触れ、よく理解させることが児童にモンゴルに対する友好的な感情を抱かせることにつながると考えた。そこで、モンゴルで収集した資料に加え、児童に分かりやすいようパワーポイントやワークシートなど教材を作成し、授業を実践した。

授業実践の成果としては、教師が実際にモンゴルに行って収集した資料を使用することで児童の心に響いたことがあげられる。収集した膨大な資料から厳選し、揭示のタイミングを工夫することで、児童の自由な発想を妨げることなく、さらに異文化に対する興味・関心を引き出すことができた。また、対話のある活動を取り入れることで、児童の考えが深まるとともに、多面的に物語を捉えなおすことができた。

課題としては、モンゴルの子供たちと交流できる素晴らしい機会を得たにもかかわらず、それを教育計画に位置付けることができなかったことがあげられる。また、これから担任として、また、国際理解教育主任として積極的に提案していきたい。そして「日本とモンゴルの友好関係」についての授業を学級活動等で計画したい。

P(計画)本単元の目標「場面の様子を想像しながら物語を読む。」を念頭に置き、モンゴルで馬に関するインタビューや馬頭琴など資料集めをし、どうすれば有効に資料を使えるかを考えながら指導案を作成した。

D(実施)ねらいを達成するために、写真や映像を活用するとともに話し合い活動を取り入れ、スーホの心情を考えさせた。

C(検証)資料やワークシートは適切だったか、先輩教員から指導をいただいたり、児童のノートやワークシートを見直したりし、改善策を練った。

A(改善)資料をもう一度見直したり、児童がじっくり考える時間を確保したりすることで、今後さらに単元の目標に迫れるよう指導案を修正した。また、資料は他教科、他学年でも共有し、いつでも使用できるようにした。

10 教師海外研修に参加して

今回の研修で、心に残っている言葉がある。「日本とモンゴルは現在とても仲がいいんですよ、と日本の子供たちには是非伝えてください。」モンゴルの日本大使館に訪れた際、参事官の方がおっしゃっていた。モンゴルと日本は互いに理解し合い、支援し合ってきた。相手を知り、認めることの大切さを自分自身、感じる瞬間だった。外国籍の児童だけではなく、一人一人、違うところがあり、それを認め合うことの大切さやおもしろさを児童にも知ってもらいたい。

また、支援を必要とする国の社会情勢、歴史、困窮している根本的な原因、環境問題、技術協力の方々との出会いなど、児童に伝えたいことがまだたくさんある。2年生には、難しくて授業で扱えなかったことを来年以降、活かしていきたい。

この教師海外研修で得た知識、経験をこれからも児童に伝えていく。



MONGOLIA

学校名：立川市立松中小学校

氏名：安達 友紀

[担当教科：全科]

● 実践教科等：学級活動

● 時間数：5時間

● 対象生徒：第2学年

● 対象人数：33人

1 単元名

せかいのなかまとわたしたち

2 単元の目標

- ・モンゴルを知ることを通して、世界の様々な国について興味・関心をもつ。(関心・意欲・態度)
- ・モンゴルの文化や生活を通して、世界には様々な国があることを知り、その違いや共通点について気づく。(知識・理解)
- ・モンゴルと日本との関わりについて知り、自分たちにできることについて考える。(思考・判断・表現)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

国際化・多様化が進み、世界的な相互依存が増大してく中で、子どもたちが将来さまざまな国の人々と関わる機会は多くなると考える。その中で、互いの違いを尊重しながら、自ら考え主体的に生きる力を育むため、モンゴルという国を通して、開発途上国や世界を取り巻く諸問題があることを知り、自分にできることを考える活動を設定した。

2年生という発達段階を踏まえて、導入部(1時・2時)では「モンゴルクイズ」を行い、興味を引き出しながらモンゴルの基本的な情報や文化、生活について知る活動を行う。展開部(3時・4時)ではモンゴルの抱える課題や日本との関わり、活躍している日本人について知り、ポスター制作を通して自分にできることを考える活動を行う。ポスター制作は、それまでの授業で使用した写真を選んで貼り、見出しを書くという単純な作業にした。自分の考えをもたせることに重点を置き、ポスター制作自体に困難を感じさせないようにするためである。さらに、まとめ(5時)ではポスターセッションを行い、考えを深めていく。

(2)児童生徒観

素直で何事にも意欲的に取り組むことができる児童である。今年度は研究授業として、1学期に初めて外国語の授業を行った。ALTの先生との交流や外国語を使うことに対して、柔軟に、また大変意欲的に取り組む姿が見られた。新しい知識や考えを得ることを、楽しむことができる児童が多い。

今回、国際理解教育の授業を行うのは初めてである。事前アンケートを行い、知っている国を書かせると、多くの児童がアメリカやフランスなどの欧米諸国を挙げていた。一方で、開発途上国を挙げる児童はほとんどいなかった。外国語活動などを通して、外国には興味をもった一方で、一口に外国はといってもそのイメージには偏りがあり、開発途上国は児童にとって遠い存在であると感じた。また、同アンケートで「モンゴルという国があることを知っている」と答えた児童は33名中5名、さらに「モンゴルについて知っていることを書きましょう」という問いに対しては、誰も回答することができなかった。このことから、児童はモンゴルや開発途上国についての知識は、ほぼ無いということが分かった。そのため、まずは「知る」という活動を写真や動画などの教材を使って丁寧に行うことで、興味・関心をもたせたいと考えた。そして世界には様々な国があるということ、それぞれの文化や生活があり、また課題もあるということを知り、自分にできることを考える活動へとつなげていきたい。

(3) 指導観

素直に新しい知識を受け入れることができる2年生という発達段階を踏まえて、まずは開発途上国に対して興味・関心をもたせ、ポジティブな印象がもてるように授業を進めていきたいと考えた。これについて、子供たちには、「(モンゴルに)行きたい」という視点で、授業ごとにワークシートに「行きたいメーター」を記録することで振り返らせることにした。また、「支援国・被支援国」という単純な上下関係で捉えるのではなく、「協力国」としての相互依存の関係として捉えられるよう、できるだけかみ砕いて平易な言葉で伝えていきたいと考えた。これについては、「(国と国が)仲良くする」「協力する」という言葉を意図的に用いるようにして子供たちに伝えていく。

5 評価基準

観点	他国の文化・生活に対する 関心・意欲・態度	他国の文化・生活に対する 知識・理解	他国の文化・生活に対する 思考・判断・表現
評価規準	・モンゴルを知ることを通して、外国には様々な文化・生活があることを知り、諸外国に興味・関心をもっている。	・モンゴルを知ることを通して、外国には様々な文化・生活があることを知り、日本との違いや共通点に気づく。	・諸外国が直面する課題に対して、理解を深め、自分がどのように諸外国と関わっていくか、そのために今何ができるのかを考えている。 ・自分に今できることを考えて、ポスターに表現している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート ポスター	学習の様子 発言 ワークシート ポスター	学習の様子 発言 ワークシート ポスター

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
事前	事前アンケート	・児童のモンゴルやその他の海外の国々についての知識について調査を行う。	・事前アンケートをとる。
1	モンゴルについて知ろう。	・モンゴルの基本的な情報(国土、言語、文化など)を知り、モンゴルに興味をもつ。	・モンゴルについて、知っていることを出し合う。 ・モンゴルクイズを行い、モンゴルの基本的な情報を知る。
2	モンゴルの生活とわたしたちの生活をくらべよう。	・モンゴルの子どもたちの生活(学校生活、日常生活)について知り、日本との違いや共通点があることに気付く。	・モンゴルクイズを行い、モンゴルの子どもたちの学校生活や日常生活について知る。 ・日本との違いや共通点について、まとめる。
3	モンゴルと日本とのつながりについて知ろう。	・モンゴルに開発途上国が抱える問題があることを知る。 ・それらの諸問題に対する日本の支援やJICAやJOCVの活動について知る。	・第1時、第2時で見た写真の中に、日本とのつながりがあることを見つけ出す。 ・モンゴルの抱える諸問題について知る。 ・日本がモンゴルに支援をしていることを知る。 ・モンゴルで活躍している日本人について紹介する。
4	自分たちにできることを考えて、ポスターを作ろう。	・開発途上国が抱える問題を踏まえて、自分たちに何ができるかを考える。	・モンゴルの写真を1枚選び、見出しやコメントを入れてポスターを作成する。
5	ポスターセッションをして、自分たちにできることを発表し合おう。	・友達の考えを知ることによって、開発途上国が抱える諸問題や、それに対して自分ができることについて考えを深める。	・友達と交流し合い、ポスターを発表する。

7 授業事例の紹介

小単元名【ポスターセッションをして、自分たちにできることを発表し合おう。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月22日(土)第4限

(イ)実施会場 2年2組教室

(ウ)本時の目標

- ・友達の考えを知ることによって、開発途上国が抱える諸問題や、それに対して自分ができることについて考えを深める。

(エ)指導のポイント

- ・前時までの学習を板書で振り返り、これまでの学習を想起させた。
- ・全体での交流の前に班での交流の時間を設け、ポスターセッションの進め方について理解させた。
- ・なぜそのポスターを作ったのか、その理由や根拠をもたせ、発表させるようにした。
- ・友達のポスターに付箋に感想を書いて貼ることで、友達の考えを知り理解を深められるようにした。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	1 前時までの学習の振り返りをする。 【1】、【4】 【6】	・前時までの学習の流れをおさえ、本時のめあてを知る。	一斉	・問答しながら、簡単に振り返りをする。 ・大切な言葉を押さえて板書にまとめ、今まで学習したことが視覚的に分かるようにする。	
ポスターを はっぴょうし合おう。					
展開 30分	2 班でポスターを発表する。 【2】、【3】 【5】	・班でポスターを発表する。 発表者は、ポスターを見せながら、メッセージ(見出し)と、それを考えた理由を言う。 ・友達の発表を聞いたら、付箋に感想を書いてポスターの裏に貼る。	班	・ただポスターを見せるだけではなく、それを考えた理由も合わせて発表させる。ポスターに説得力をもたせ、相手に自分の考えをより深く分かり易く伝えるようにする。	・開発途上国が抱える諸問題に対して、自分ができることについて考えをもち、表現している。(ポスター、学習の様子、発言)
	3 全体でポスターを見合う。 【2】、【3】 【5】	・自由に友達の書いたポスター見て、付箋に感想を書いて貼る。 ・何名か発表をする。	一斉	・自分の考えと比べながら、友達の発表を聞かせるようにする。 ・自ら挙手して発表させたあと、良かったと思うものを推薦してもらい、より多くの発表が出るようにする。	
まとめ 10分	4 本時の振り返りをする。 【6】	・本時の学習を振り返り、ワークシートに感想と「行きたいメーター」を書く。 ・何名か発表をする。	個人 一斉	・ポスターセッションの感想と、単元を通じた活動を振り返り、感想を書かせる。 ・学習したことをこれからの生活に生かしていけるよう、教師が講話をする。	・開発途上国が抱える諸問題に対して、友達の考えを聞くことによって、自分の考えを深めている。(ワークシート、発言) ・諸外国に対して、興味関心をもっている。(ワークシート、発言)

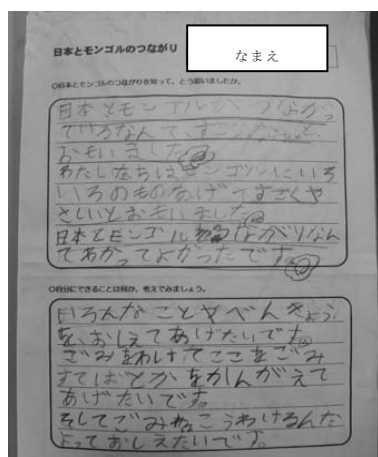
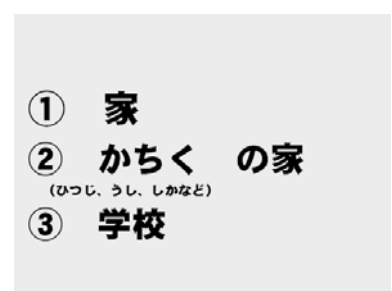
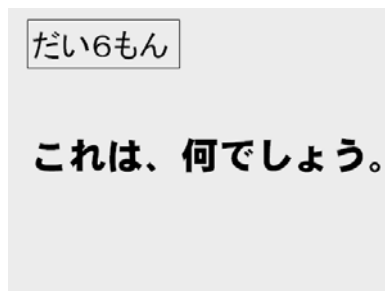
(2) 授業の振り返り

- ・前時のポスター作成では、それまでの授業で使用した写真を選んで貼り、見出しを書くという単純な作業にしたため、1時間で全員が1～3枚のポスターを作ることができた。そのため本時では自信をもって活動に取り組むことができた。
- ・付箋に感想を書いて貼り合うことで、活動意欲が上がった。また、友達の考えと自分の考えを比較して、考えを深めることにつながった。
- ・全体でポスターを見合う活動はあったものの、全員の前での発表は人数が限られてしまった。もう少し、全体で取り上げ、共有することができればよかった。
- ・「ものを大切にする」「ごみを分別する」「協力しあう」「(将来開発に尽力するために)勉強を頑張る」など、子供たちなりに今できることを考えることができた。ただ、ポスター制作の際、例で取り上げた写真や視点に集中してしまったところがある。児童の考えを引き出すような問いや助言が必要である。

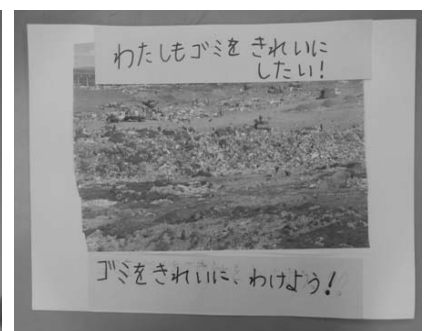
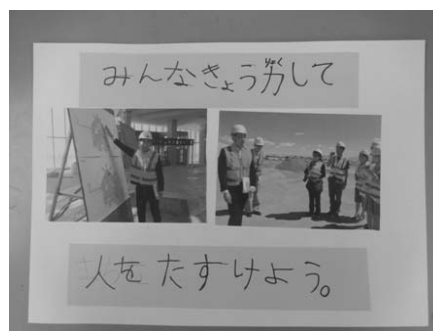
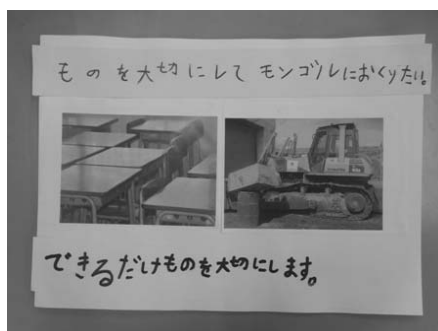
(3) 使用教材

- ・パワーポイントで作成した「モンゴルクイズ」
- ・現地で撮影した写真・動画
- ・現地の青年海外協力隊員が撮影した写真
- ・モンゴルの民族衣装やゲルの模型などの工芸品。
- ・ワークシート

【モンゴルクイズ（パワーポイント）、ワークシート】（一部）



【児童が作ったポスター】



(4) 参考資料等

- ・国別データブック(外務省) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000142135.pdf>
- ・国別生活情報(JICA)
<https://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/Mongolia-p.pdf>
- ・「モンゴル(世界のともだち)」 清水哲郎(著、写真) 偕成社
- ・「モンゴルのごはん(絵本 世界の食事)」 銀城 康子(著), 高松 良己(イラスト) 農山漁村文化協会

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

- ・全体を通して児童の反応はとてもよく、興味をもって意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・休み時間にもモンゴルにふれたり、図書の時間に外国に関する本を読んだりする児童が増えた。
- ・第3時のモンゴルが抱える課題を提示する場面で、児童の関心が下がるのではないかと予想していたが、予想に反して関心が高まった児童が多かった(ワークシートの「行きたいメーター」による見取り)。その理由としては、日本人や日本の機関が支援に関わっていることを知り、「自分も助けたい」「日本の技術はすごい」など前向きな気持ちをもてたからだと思われる。

第1時を終えての児童の感想

- ・いろんなことを知って、たのしかったです。モンゴルに行ってみたいと思いました。
- ・ゲルにとまってみたい。でも外トイレはできなさそう。
- ・モンゴル人が日本人のことがすきなんてびっくりした。うれしかったです。
- ・ふつうにうまとかが歩いているなんてびっくりしました。
- ・モンゴルのことをもっともっと知りたいです。

第2時を終えての児童の感想

- ・もっとモンゴルに行ってみたいと思った。日本と同じことがいっぱいあるのがちょっとびっくりした。
- ・モンゴルの人たちは、自分ひとりでできないことを、家ぞくやともだちとやりあって、水くみやりょうりなどができてるんだなと思いました。
- ・学校がごぜんとごごに分かれていて、びっくりしました。
- ・日本と同じものもたくさんあって、もっとモンゴルに行きたくくなりました。
- ・日本のアニメがはやっていたのでうれしかったです。

第3時を終えての児童の感想

- ・日本とモンゴルがつながっているなんて、すごいなあと思いました。
- ・モンゴルのことをいっぱい知って、モンゴルのしえんをしたい。
- ・学校を作ったのが日本人だったのがおどろきました。かべなどに、日本のこっきがはってあったのもおどろきました。
- ・日本がいいことをしていて、いいなあと思います。モンゴルをいろいろたすけているのがいいです。
- ・モンゴルにきょう力をしたいと思いました。きょう力は大切だということがわかりました。
- ・モンゴルもいっぱいがんばってるんだなと思いました。ぼくはたすけてあげたいと思いました。
- ・できればみんなでほかのくにやモンゴルをよくしたいと思った。わたしも日本のぎじゅつをおしえたいと思った。
- ・大きくなったら、日本語を教えてあげたい。みんなときょう力して学校を少しでもふやしたい。
- ・日本人はすごいぎじゅつをもっているんだなと思いました。
- ・ぼくもジャイカの人たちときょう力したい。
- ・わたしは、大きくなったらしえんがひつようなくにへ行って、ぎじゅつや日本語をおしえたいです。
- ・ぼくもきょう力たいやジャイカの人みたいになりたいです。

第4時、第5時を終えての児童の感想

- ・みんなとてもやさしいと思います。りゆうは、たすけたい、きょう力ということばいっぱいあったからです。
- ・〇〇さんの「ものを大切にしたい」ということばがすてきだと思いました。みんなのポスターや考えを見るのがたのしかったです。

- ・モンゴルのことを知れてよかった。わたしは、さいしょ、モンゴルはいい町だと思っていたけど、ちがうところもあってびっくりした。だから、わたしもゴミをちゃんと分けたりしてモンゴルの町をよくしたい。
- ・みんなのを見て、みんなモンゴルときょう力したいという気持ちがすごくつたりました。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

段階	項目
P 計画	指導計画を立て、授業のねらいと明確にして指導案を作成した。
D 実施	・指導計画ねらいを達成するために、写真・動画・具体物などを活用して授業を実施した。 ・教室の一角に「モンゴルコーナー」を作り、授業で使ったクイズや写真、衣装、工芸品、図書館で借りた本などを自由に見たり触ったりできるようにして、授業時間以外にもモンゴルに触れられるようにした。 ・毎回授業の振り返りをワークシートに記入させた。それに目を通して、次時の授業内容を検討した。
C 検証	〈成果〉 ・モンゴル、そして開発途上国について、興味関心をもつことができた。 ・世界が抱える課題や問題について真摯に考え、児童なりに自分の考えをもつことができた。 ・モンゴルと日本の関わりや、モンゴルで活躍している日本人について知り、問題を身近なものとして捉えることができた。 〈課題〉 ・全体を通して、教師が伝えたいことが多すぎて1時間に詰め込みすぎてしまった感がある。 ・JICAの支援や青年海外協力隊の活動について、低学年にも分かるように説明をするのが難しく、時間がかかってしまった。事前によく検討しておく必要がある。 ・考えをもつのが難しい児童もいた。個別の助言や支援が必要である。
A 改善	・児童の発達段階に合わせた提示の仕方や発問を精査する。また、情報過多にならないよう、必要な情報を取捨選択する。 ・教科や領域などの指導計画を見直し、今後も系統的に国際理解教育を取り入れていけると良い。また、校内での共有も進めていきたい。

10 教師海外研修に参加して

大変学びの深い研修であった。モンゴルでは、旅行では行けない現地の学校や施設の数々を訪問でき、モンゴルの生活の実態と課題について、まさに私自身が「体験的な学び」をすることができた。観光地を回るだけでは分からないたくさんのものを得ることができたと思う。特に、学校への訪問で、職員の方や子供たちと交流できる場や、ゲルで生活体験ができたことなど、授業の素材として使えるものをたくさん得ることができた。学校に戻って国際理解教育の授業を行うということをよく考えて訪問先を選んで下さったことが大変ありがたかった。

また、日本の様々な支援について知ることで、自分自身が相互依存や協力関係について考えるきっかけとなった。日本の支援、特に人材育成における丁寧で相手のことを考えた支援のやり方については大変共感をしたと同時に、誇りにも思った。また、それらの支援により、モンゴル人が非常に親日であるということを知り、「国と国とが互いに協力国であり、良い関係を築くことの大切さ」も感じた。そしてそれは、今回の授業実践を通して軸として伝えたいことのひとつとなった。

子供たちが作成したポスターの中に、「日本のこと、そんなにすきでありがとう ぼくもモンゴルすきだよ」というメッセージがあった。「自分にできることを考える」というねらいからは少し逸れているかもしれないが、このポスターを見つけたとき、私は「この授業をしてよかった」と率直に感じる事ができた。この研修で学び、授業を通して伝えたいと思ったことが、少しでも子供たちの心に刻まれたのではないかと感じた瞬間であった。

今回の授業実践で得たものをもとにさらに研鑽を積み、今後も小学校における国際理解教育を長期的に推進していきたい。





MONGOLIA

学校名：長野県小谷村立小谷小学校

氏名：川尻 年輝

[担当教科：全科]

● 実践教科等：特別活動・道徳

● 時間数：7時間

● 対象生徒：小学校2年生

● 対象人数：19人

1 単元名

モンゴルと小谷と私たち

2 単元の目標

- ・モンゴルやボリビアの文化や生活の違いを学び、世界に目を向ける。(多面的・総合的に考える力)
- ・モンゴルの文化や習慣を知ることきっかけに、世界には様々な国や文化があることを知り、他国を尊重する態度を育む。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人の姿やモンゴルからの支援を知ることを通し、異なる文化をもつ人々と一緒に活動したり、協力したりお互い助け合っていることに気づく。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルを始めとする世界が抱えている問題を知り、自分自身にできることを考える。(進んで参加する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

4 単元の指導について

(1)教材観

国際教育あるいは国際理解教育を推進するための手立ては様々ある。しかし、教師自らが体験したことを通して授業を行っていくことは、子どもたちの心に届きやすい。

現在、たくさんの外国につながる人々が日本で生活している。産業界でも日本経済を支える担い手として重要な役割を果たしていると言える。

これらの人々にとって、社会の仕組みや文化など大きな違いがあろう日本の地で生活していくことは、多くの困難があることが予想される。多くの方々が自力で慣れていかざる得ない状況である。しかし、外国につながる人々に対して、日本の人たちがもっと気軽にコミュニケーションすることはできないであろうか。日本側から外国の文化やマナーを積極的に知り、共生していくための心構えを持つ人々が一人でも多く増えていくことで外国につながる人々にとって住みやすい日本になるように思われる。

これからの子どもたちにとって、多様な見方や考え方をもち、広い視野を持って成長していったらいいと思う。

このことについて、担任自らがモンゴルで学んだこと体験したことを活かし授業を仕組むことで、子どもたちにとって新たな視点を持ったり、見つけたりできる一助になるのではないかと考える。

(2)児童生徒観

本校の子どもたちにとって、隔週または毎週1コマのイギリス人講師からの外国語活動の中で海外を感じる時間もあるが、外国につながる児童が在籍しているクラスはあまりなく、海外を身近には感じていないのではないかとと思われる。

しかし、隣の白馬村や大町市などではクラスメートに外国につながる子どもたちが在籍し、海外を意識せざるを得ない状況になっている。グローバル化が叫ばれている現代、この流れはこれから益々進むものだと思う。近い将来、外国につながる子どもたちとクラスメートになったり、海外へ行くようになったりした時に、どんな国の人々ともコミュニケーションがとれ、手を携えて生きていくことが大切である。モンゴルの人たちやモンゴルで活躍する日本人の姿から、海外連携や国際協力の大切さについて小学生なりに感じられる機会としたい。

5 評価規準

観点	1 関心・意欲・態度	2 国際理解
評価規準	・モンゴルやボリビアの文化に親しみ、興味関心を持って考えようとしている。(1-1) ・友だちと協力して学ぼうとしている。(1-2) ・国際協力について関心を持って考えている。(1-3)	・モンゴルの文化やボリビアの文化を尊重し、知ろうとしている。(2-1) ・日本とモンゴルやボリビアなど、日本と世界の国々との関わりについて知る。(2-2) ・国際協力について知る。(2-3) ・国際協力について自分の考えをもつ。(2-4)
評価方法	・発言、ワークシート ・コミュニケーションの様子 ・授業への参加態度	・発言、ワークシート ・コミュニケーションの様子 ・授業への参加態度

6 単元の構成

0 朝の読み聞かせの時間…「せいかいのひとびと（絵本）」の朗読（10／15）

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	「ハンバーガーの材料はどこから」 (10／21)	・小学生にとって身近なファストフードであるハンバーガーの材料が、外国に依存していることを知る。	・ハンバーガーの材料である、パンズ(小麦)やミート(牛肉)について、世界のどこから輸入されているのか考えさせ伝える。世界地図を利用し、関係国に付箋を貼る。
2	「輸入しているものってほかにあるの？」 (10／26)	・日本が、食材のみならず各種エネルギー資源も外国に依存していることを知り、外国とのつながりを知る。	・食べ物のほかに、日本が輸入しているものは何か問い、石油を代表に各種のエネルギー資源も外国に依存していることを知ること、外国と日本のつながりを感じ、国際協力への大切さを感じる。
3	「モンゴルってどんな国」 (11／2)	・モンゴルの基本情報などのクイズを行い、外国への興味関心を起こさせる。	・世界地図からモンゴルの位置を知ったり、首都の名前を三択形式でクイズにしたり、国会議事堂前での夕方撮影した写真を見せたりしながら、モンゴル国についての概要を伝える。
4	「モンゴルと長野(日本)は同じだよ」 (11／10)	・モンゴルと日本(長野県)での共通点を見つけ、モンゴル国への親近感を感じられるようにする。	・お寺、トロリーバス、塩の写真を対比させ、似ている点を見つけるよう仕組む。共通点が見つかることにより、さらにモンゴル国への関心を高めるように仕組む。
5	「モンゴルを知ろう」 (11／14)	・モンゴルについて理解を深める。	・モンゴル国旗や紙幣についてクイズを通しモンゴルの文化や歴史について伝える。さらにスーホの白い馬の動画、モンゴル語の通訳をしてくださったダワさんによる馬についてのインタビュー、モンゴル語の挨拶レッスンビデオを通して、モンゴルの理解を深める。
6	「わたしは せいか・ガブリエラ」(道徳) (11／19)	・ボリビア人の父と日本人の母を持つせいか・ガブリエラちゃんの詩から、どちらの国も大切に思う気持ちやボリビアと日本の文化の違いを知る。	・信濃教育出版社「わたしたちのみち・2年」より、『わたしは せいか ガブリエラ』の国際理解・国際親善の道徳の授業を行い、ボリビアと日本の文化の違いや、国が違えど子どもに対する思いは同じであり、どちらが良い悪いと言うことはないということに気づけるよう話し合いを持たせる。

7	「国際協力」について考えよう (11/25)	・JICA の活動を伝えと共に、国際協力について考える。	・これまでの“世界について”の学びを振り返り、「世界中の人たちが 仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが大切なのか」考える。 さらに JICA の活動を伝えと共に、国際協力について考える。モンゴル国内で活躍している JICA 隊員を始めとする日本人の活躍されている姿や東日本大震災時のモンゴルレスキュー隊員の活躍の姿から、小学校2年生としてどのような国際協力ができそうか考える。
---	---------------------------	------------------------------	--

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5 5	・これまでの学習を振り返る。【体験】 「これまで、勉強してきたことを覚えていますか。」	・これまでの学習を振り返り、私たちの住んでいる小谷をはじめとする日本は、世界とつながりがあることを確認する。 ・読み聞かせをした、絵本「せかいのひとびと」の1節を用い、違うところが素敵なことだということを確認する。	一斉 一斉	・これまでの学んだことを、パワーポイントスライドのダイジェスト版を見せながら振り返らせる。 ・絵本「せかいのひとびと」の1節を紹介する。	・日本と世界の国々との関わりについて知る。(2-2)【発言】
10	「世界中の人たちが 仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが 大切なのだろうか」(ペア)【探求①】【1・2・3】				・友だちと協力して学ぼうとしている。(1-2)【相談の様子】
10 5	・JICAについて説明する。 ・青年海外協力隊員の活動を紹介する。 ・新ウランバートル国際空港の建設に携わっている飯島さんの活動を紹介する。 ・東日本大震災のモンゴル国レスキュー隊員の活動を紹介する。	・JICAについてのイメージ動画見ながら活動の概要を知る。 ・トゥブ県で日本語指導をされている青年海外協力隊員山崎さんの授業の様子を見る。 ・新ウランバートル国際空港の人材育成および空港建設に携わっている飯島さんからのメッセージを聞く。 ・東日本大震災の時に、レスキュー隊員の活躍をはじめ、モンゴルの方々が日本にたくさんの支援をしてくれたことを伝える。	一斉 一斉 一斉 一斉	・JICAの説明動画を用いながら、活動内容をなるべく端的に伝える。 ・動画(日本語指導教室・山崎隊員)協力隊員の思いや持ち味を活かした活動であることを伝える。 ・モンゴルで活躍している方は、協力隊員だけでなくいろいろな方々がおられることを伝える。 ・東日本大震災時のモンゴル国レスキュー隊の動画を用い、日本も支援されており双方向の支援があることを伝える。	国際協力について知る(2-3)【3・4】 国際協力について関心を持って考える(1-3) 国際協力について知る(2-3)
	「世界がよりよくなるために みなさんは どんなことができそうですか」(ペア・小グループを問わずクラス内で自由に相談)【探求②】				【1・2・3】
	・感想をまとめる。 「どんなことを考えたのか、発表してください。」【6】	・本時を振り返り、感想を発表する。【発信】	個人	・学習したことを振り返り、小学校2年生として、どのような国際協力ができそうか考えさせる。	国際協力について自分の考えをもつ(2-4)

7 授業事例の紹介

小単元名【「国際協力」について考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月25日(金)第5限

(イ)実施会場 小谷小学校多目的教室

(ウ)本時の目標

「日本が海外の様々な国から資源を輸入したり、モンゴル国と日本のつながりを気づいた子どもたちが、モンゴル国で活躍する青年海外協力隊員や新ウランバートル国際空港の人材育成および技術協力を携わっている方々の活躍する姿を見たり、東日本大震災でのモンゴル国レスキュー隊の活動見たりすることを通して、国際協力について自分なりの考えを持ち、これからの生き方を考えるきっかけにすることができる。

(エ)指導のポイント

- ・本時までの学習の振り返りを取り、日本と世界がつながっていることを再度確認させる。
- ・子どもの情感につたわるよう、動画や写真をふんだんに採り入れるなどの視覚支援を行えるようなパワーポイント教材を用いる。

- ・文科省JSLカリキュラムを活かした授業展開(体験→探求→発信)を行い、児童同士での対話の時間をとりながら、受け身の学びにならないような時間をとるとともに、多様な考えを認めるよう授業を行う。

(オ)本時の展開(前ページ)

(2)授業の振り返り

本時を仕組むに当たり、文科省JSLカリキュラム(日本語指導)のトピック型と呼ばれる授業形態を活用し、体験→探求→発信をベースにした。このカリキュラムを活用することにより、外国にルーツのある子どもたちはもちろんのこと、特別に支援の必要な子どもたちにとっても授業に飽きることなく、だれにもわかりやすくなるからである。

本時に至るまでの振り返りの時間を確保することにより、日本が世界の国々につながっていることを再度確認することができ、興味を持って本時に入ることができた。【体験】

さらに、「世界中の人たちが仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが大切なのだろうか」という中心発問1を行うことにより、「相手の立場(相手軸)を大切にする」や「外国の言葉を理解する」、「話をしっかりと聞く」などの様々な考えが出された。その中でも協力する事の大切さについての発言が出され、国際協力について考えていくことの導入がスムーズに展開した。【探求1】

JICA についての概要を低学年には言葉で説明しても難しいため、プロフィール動画を見せながら補足説明しながら紹介した。

さらに国際協力の具体として、この研修会で撮影したモンゴルで活躍する青年海外協力隊員山崎さんの日本語指導教室の様子と新ウランバートル国際空港の人材育成および技術協力をされている飯島さんの活躍の様子を見せることで、子どもたちは興味を持って学ぶことができた。そして、東日本大震災時のモンゴルレスキュー隊員の活躍している姿を通じ、国際協力が双方向であることを伝えることができた。

終末場面で、児童一人一人が国際協力について2年生としてどんなことができそうか友だちと相談することで全員が考えを持つことができた。【探求2】

さらに、時間の関係上数名であったが、自分の考えをまとめ全員の前で発表することにより、多様な考え方に触れる機会となったり、自身の考えをメタ認知したりすることにつながった。【発信】

(3)使用教材

- ・絵本「せかいのひとびと」／ピーター・スピアー著・松川真弓訳 評論社

- ・パワーポイント プレゼンスライド(一部)



(4)参考資料等

- ・「交流からはじめる世界と友だちになろう」／金子美智雄監修 ほるぷ出版
- ・「暮らしがわかるアジア読本 モンゴル」／小長谷有紀 編 河出書房新社
- ・「小学生のための世界の国ぐにものしり学習ブック」／地球の歩き方編集室 (株)どりむ社
- ・「世界のともだち05 モンゴル 草原でくらすバタナー」／清水哲朗 偕成社
- ・「国際理解にやくだつ世界の遊び1 アジアの遊び1」／大貫美佐子 監修 (株)ポプラ社
- ・「わたしたちのみち2」(わたしは せいか・ガブリエラ)／「道徳・副読本」 信州教育出版社
- ・「国際理解教育実践事例集 小学校編」／文部科学省 教育出版
- ・モンゴルレスキュー隊東日本大震災インタビュー <https://www.youtube.com/watch?v=iULQZHA60fw>
- ・JICA イメージムービー2012 日本語 <https://www.youtube.com/watch?v=xd5Sqpy0okc>

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

世界に興味があった子はもちろんのこと、そうでなかった子も時間を追うごとに授業を大変楽しみにしている様子が見られた。

「明日は、世界の勉強がある、やった～」と呟く子が何人もいた。笑顔いっぱいの表情であった。

単元の最後の時間(7時間目)に、国際協力について考えるとところまで国際理解教育の学びを深められた。以下は、子どもたちの最終ワークシートからの抜粋である。

『Q1. 世界がよりよくなるために、あなたはどんなことができそうですか?』

- ・私は相手軸で考えて行動したいです。思いやりの気持ちを持って考えていきたいです。
- ・世界の人たちに、お手紙をおくと良いと思います。
- ・世界が良くなるために、節約ができそうです。あと、特にけんかとか暴力をなくしたいです。
- ・ジャイカに協力して世界の人となかよくなり、助け合って優しくあいます。
- ・いじめをやめて、ほめあいながら協力すれば世界がより良くなると思います。
- ・世界の人たちをほめ合ったりアドバイスをしたりすれば、戦争やあらそいを止められると思います。
- ・日本から水をおくれば良いと思います。また、ちがう国の言葉を覚えると世界がよくなります!!
- ・贅沢をしない、言わない。人の気持ちを考えて行動する。
- ・コミュニケーションをとり、たくさん友だちをつくって、いっぱい遊びたい。

『Q2. 今まで、世界の勉強をしてきて、思ったことや感じたことを書きましょう』

- ・モンゴルと長野といっぱい共通点があってすごいなあとと思いました。
- ・モンゴルは、人間よりも動物の方が多くてはじめて知りびっくりしました。世界には、知らないことが沢山あることがわかったし、日本につながるものがあるってすごいと思いました。
- ・外国の勉強ができて良かったです。英語やモンゴル語など、ちゃんと言えたので楽しかったです。
- ・大人になったら JICA に入って、いろいろな人を助けて世界の未来をより良くしたいです。そして、いろいろなちがう国の人とも仲良くなりたいです。他の国の言葉や国のことを知りたいです!!
- ・世界の勉強をしてきて思ったことは、日本に生まれて幸せということがわかりました。モンゴルの人たちが日本を助けてくれたように、ぼくもモンゴルの人たちみたいに(いろいろな人を)助けたいです。
- ・川尻先生が行ったモンゴルもいっぱい勉強できてよかったし、ボリビアという国もはじめて知ったので、国のことが楽しくなってきました。もっと勉強したいと思いました。
- ・世界の勉強で思ったことは、世界ではこういうことは全然知らなかったもので、このクラスに入って良かったなあとと思いました。ぼくも川尻先生に出会えて幸せです。大人になったら世界中に行きたいです。
- ・モンゴルとボリビアに行って、いっぱい遊んでいっぱい友だちをつくりたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

海外派遣前までは漠然としたプランであったが、派遣中に「今担任している子どもたちに向けて興味を持つ教材はどんなものか?」「どんな教材(写真や動画、現地素材)が国際理解教育にふさわしいのか?」考えながら取材した。

“国際協力”という小学校2年生には難しいテーマを教材化するにあたり、モンゴルより帰国してから写真や動画を整理していったり、モンゴルに関する文献や国際理解教育に関する文献を改めて読んでみる中で、単元構成をはっきりとさせていくことができた。

中でも写真や映像は低学年の子どもたちにとっては必須のアイテムであり、できる限り毎時間、視覚支援を行いながら誰もが興味や関心をもって授業に臨めるよう工夫した。特に単元序盤は、子どもたちの身近な話題(日本の食材や地元に関する事柄)を採り入れていくことで、海外の国々に興味・関心が持てるよう工夫した。

海外の国々に十分興味・関心を持てたところで、国際協力に関する授業を行うよう計画した。その国際協力に関する単元終末の授業に関しては、モンゴルで実際に得られた資料だけでなく、各種の映像資料を積極的に活用することで、子どもたちにとって、なるべく平易になるよう工夫することができた。

最後に、単元を通して子どもたちの大きな変容が見られた。特に2年生の子どもたちは、年齢による発達段階から自分中心に物事を考える子が多いが、何人もの子が自分だけ良ければいいという自分軸の考え方から、相手の立場に立って行動する相手軸に沿った行動が大切であるという“人として大切なこと”にまで気づけたことは大変素晴らしいことだと思った。

・PDCA サイクルおけるチェックとアクション

(P)単元終末場面、国際協力に関する授業を仕組むことを念頭に、逆算的に単元を設定していった。

また、本単元の1時間目がとても重要だと考え、子どもたちの興味・関心が喚起できる食についてのことや地元長野に関することを織り交ぜながら単元を設定した。

(D)低学年に向けて国際理解教育を実施するにあたり、なるべく難しい言葉を使わず、写真や動画をできる限り採り入れながら楽しく学べるよう教材を作成し授業に臨んだ。

また、一斉指導的な全体講義形式を減らし、クイズを採り入れながら児童同士が対話を通して考える場面を設定したり、文科省JSLカリキュラムトピック型の授業スタイルを活用し、授業の終末場面で発信したりするよう授業を工夫した。

(C)ほぼ構想通りの単元で授業を行っていくことができた。モンゴルで得られた教材を中心に据えながら授業を行っていったのはもちろんのこと、地元長野の道徳副読本「わたしたちのみち2」を活用したり、絵本「せかいのひとびと」の読み聞かせを行ったり、世界に関する教材を横断的に活用できたことが、子どもたちにとって飽きることなく学びを深めていくことにつながったものと思われる。

(A)子どもたちにとって、知識としての学び(国際理解教育)は十分できたように思う。しかし、「これから実際にどんな実践ができるのか?」行動としての学びまでには至らなかったため、単元終了後も児童自らが書いた国際協力の数々(8 単元をとおした児童生徒の反応/変化の項 参照)が行えるのか変容を見守りたい。児童の個の変容が見られたら、そのことをクラス全体にも紹介しながら、クラス全体の変容につなげて行ければ良いと考えている。

10 教師海外研修に参加して

この研修会に応募するにあたり「教師海外研修に参加する以前も、国際理解教育につながる学習会やセミナーに参加したり各種の文献を読んだりしながら学びを深め授業実践や発表も行ってきた。しかし、開発途上国の現状については自分自身がはっきりとわかっておらず、自分の目で外国の様子をじっくりと見たり体験したりしなければ、国際理解教育の本質(開発教育の推進)を子どもたちや先生方に伝えられないのではないか。だからこそ、この研修会を更なる国際理解教育推進の新たな一歩として進めたい。」と書いた。その願いの一端を、自分が担任する子どもたちとの学習を通じて達成できたと感じている。

研修前に、各種文献を読んだり JICA の方々から教えていただいたりして、モンゴルの国のおよそのイメージを持っていたが、実際に行ってみて大きな違いがあり大変驚いた。モンゴルと聞いて、遊牧民のイメージが強く、町中の景色や大渋滞などの想像はつかなかったが、ウランバートル市内の人々の生活は全く違ったものであった。

また、本年7月にバングラデシュ首都ダッカ市内のレストランで起きたテロ事件があり、心配事の1つとして治安問題があり、旅立つ前は非常に不安であった。荷物を常に前に持って行動をすることなど、海外へ出たときの基本的な防犯対策はもちろんのこと、捨て銭を用意するなど大変用心していたが、実際のモンゴルはとても治安の良い国であると感じた。モンゴル国会議事堂前のスフバートル広場で、夜遅くまで親子連れが乗り物に乗って遊んでいたり、憩いの一時を楽しんだりする姿があった。日本では考えられない光景に驚くとともに、素敵な市民生活の一端を見ることができ心温まった。

さらにモンゴルのイメージそのものである遊牧民のお宅にお邪魔させていただけたことは、モンゴルの人々の生活を肌で感じることに繋がった。特に、馬乳酒をいただいたときに、参加された先生方があまり飲めない場面があったが、もう一人の男性の先生と二人で飲み干したのはとても貴重な経験となった。馬乳酒が日本の「カルピス」の味に似ており、帰国してから実際にモンゴルの馬乳酒をヒントに作られたことがわかり日本とのつながりを感じ大変嬉しかった。

チベット・モンゴル仏教の総本山であるガンダン寺やウランバートル市内を走っているトロリーバス、岩塩は、私の住む長野県にある善光寺や立山黒部アルペンルートで日本唯一走っているトロリーバス、小谷村にある古道「塩の道」と共通点があることなど、日本とのつながりをいろいろな場面で感じ嬉しく思った。これらのことは、文献からは読み取れないことであり、大変貴重な経験をさせていただいた。また、ローカルからグローバルへとつながるグローバルな視点を学ばせていただいたことは、これからの国際理解教育推進のキーになる部分であるのでとても大きな収穫であった。「体験に勝る学習はなし」ということを肌で感じられた研修会であった。

この研修会を通じていろいろな方とのつながりは何ものにも代えがたいものであると感じている。このネットワークを大切に、国際理解教育の推進に今後も邁進して行けたら良いと思っている。さらに、教師海外研修会で学んだことを子どもたちや必要とされる場で還元できたら良いと思っている。

最後に、JICAの皆様はじめとする沢山の方々との出逢い、支援に感謝して私のまとめにさせていただきます。ありがとうございました。



MONGOLIA

学校名: 千葉市立更科小学校

氏名: 中畑 翼

[担当教科: 小学校 4年生担任]

- 実践教科等: 社会科
- 時間数 : 6時間
- 対象児童 : 4年生
- 対象人数 : 8人

1 単元名

ごみ削減プロジェクト 2016 IN 更科

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ① 日本のごみ問題からどのようにすれば、ごみを減らすことができるのかを考えることができる。
(批判的に考える力)
- ② 日本のごみ問題からごみを減らす為にできることを考え、行動することができる。
(未来像を予測して計画を立てる力)
- ③ ごみ問題から日本とモンゴルの関係性(つながり)を理解することができる。
(多面的・総合的に考える力)
- ④ 自分の考えたごみを減らす工夫を発表することができる。(コミュニケーションを行う力)
- ⑤ 自分の考えたごみを減らす工夫をお互いに発表し合い、共感し合うことができる。
(他者と協力する態度)
- ⑥ 日本とモンゴルのごみ捨てについての共通点・相違点について考えることができる。
(つながりを尊重する態度)
- ⑦ 自分たちはごみを減らす為に、何ができるのかを考えることができる。(進んで参加する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る

日本のごみ問題からリサイクルへの意識への高まり等からごみが減っていることから、モンゴルへのJICAの支援によって確立しつつあるごみ収集のシステムがあることから日本とのつながりを感じることができる。しかし、日本ではごみ収集は、システム化されており、導入時には減少傾向があったが、今は、横ばいになっているという事実と出会い、どのようにしたらごみを減らすことができるのかを考え、実際に行動するという体験的な活動を入れる授業展開を行う。

2 子供の多様な考えを引き出す

モンゴルの最終処分場(ナランゲル最終処分場)の写真を使い、フォトランゲージを行う。児童の気が付いたことを自由に書き込むことによって、児童の気付きを引き出すことができる。単元最終に行うごみを減らす為にできることを考え、お互いの考えを聞き合うことによって、多様な考えを受け入れることができるような授業展開を行う。

3 考えを深めるために対話のある活動を導入する

手立てとして、フォトランゲージや自分のごみ削減策を発表する機会を作る。社会科では、日本のごみ問題について学びを深めており、それぞれがごみを減らす為にできることを考えることができるのではないかと考える。しかし、それぞれが考えたものを共有することによって、児童の多様な見方・考え方の獲得につながるのではないかと考える。

4 考えるための教材を見極めて提供する

本実践を社会科で授業実践を行う。他の教科・単元でも言えることであるが、教材は授業の命であると考え。児童に自分がごみを減らす為にできることを考えるというゴールの為に、その前の授業展開でどのような資料が必要なのか、策を考えるだけであれば、社会科のごみ問題の単元の

みで授業実践を行えば良いが、今回は、研修先（モンゴル）の事例との比較を行うことによって、児童に新たな世界観・価値観等があることにも触れさせたいと願っている。その為には、フォトランゲージに使う写真等の教材の選択にこだわりを持って、授業実践をしていきたい。

5 すべ・手立ては活動に埋め込む等工夫する

授業の中で話し合いを取り入れるのはもちろんであるが、本研修で学んだフォトランゲージを授業実践に積極的に取り入れていこうと考える。日本とモンゴルの最終処分場から感じたことや考えたことを書き込むという活動を取り入れることによって、児童がお互いの考え方の違い等に触れることができ、多様なものの見方・考え方を獲得させたいと思う。他には、児童の興味・関心を高めることによって、主体的な学びへとつながるように活動を仕組んでいきたい。

6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

児童の学びを振り返る機会としては、1、自分の書いたワークシートを見返す。2、フォトランゲージに書き込みながら他の児童の考え方等を知り、書き終えた写真を見る。3、ごみを減らす為に、自分のできることを交流した後に、学習の感想や考えたこと等を振り返る場面である。活動をやりっ放しにしてはいけないと考えるので、意図的に振り返りの場면을授業の中に組み込んでいく。その中で、児童自身が自己変容を捉える機会となるであろう。しかし、「今日の授業で分かったことを書きましょう。」等と、曖昧な指示を出すと児童は何を書き手良いのかが分からない状態になってしまう。「今日は、初めて分かったことを書いてみましょう。」等と何を書くのか（視点）を与えるようにすることも学びを深める手立ての一つである。

7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

お互いの考えを認め合い学び合う文化（つながり）が大切であると考え。このつながりは、すぐにできるものではない。教師と児童のつながりは、本校は単学級のためクラス替えはないが、担任としては、四月から児童と関わっている。授業場面以外にもつながりを意識して授業実践に取り組んでいる。その例として、振り返りノートである。一週間頑張ったことや次の週のめあてや今の悩み等を書いている。普段の様子から児童の変化等を見取ることができるが、教師からのコメントを書くことによって、書いたことへの価値づけ等を行うことによって、「あなたのことを見ているよ。」というメッセージを送ることもつながる。児童同士のつながりも大切である。そのつながりができていないと、話し合い等で自分の意見を積極的に発表などができなくなる。そのようなつながりを大切にして、授業実践も行っていきたい。

4 単元の指導について

(1) 教材観

ごみ問題については、社会科での学習ですでに学習を行っており、清掃工場の見学やごみ分別スクール等を経験しており、ごみを減らさないといけないという意識をもっている。モンゴルについては、最初は、どこにある国なのか、どんな国なのか分からない様子であったが、夏休み明け等に教師海外研修の話をするとう興味を持つようになった。海外について遠いイメージを持っている児童が多く、日本との比較を通して、親しみをもちたいと願っている。そこで上述の社会科の学習に関連させて、授業を行うことにした。生活していく上で必ずごみは出てしまうことから、自分たちの生活をよりよくしようという願いを持たせ、教材と関わらせていきたい。

(2) 児童生徒観

本学級の児童は、何事にも意欲的に取り組める児童が多く、活発な話し合いを行うことができ、学習への意欲が高い。社会科の学習に対しても、興味・関心が高い。上述の実態から、児童の疑問や驚き、感動等の気持ちを持たせるような場を設定や適切な資料・教具を用いて、興味・関心をつなげていき、より深い学習につながっていくと考える。海外については、どこか遠いイメージを持っている。社会科の授業においては、地図帳等を活用しながら、様々な国に触れながら、学習を行っている。海外に行ってみたい等のあこがれを持っており、写真を見せて話をするとう興味を持ち、話を聞いている。自分たちの問題（ローカルな問題）と国際的な問題（グローバルな問題）をつなげて、グローバルな問題として捉えさせていきたい。

(3) 指導観

日本とモンゴルの比較を行う上で大切にしていきたいことは、どちらが良いという判断をしないように

指導を行っていきたいと考える。日本とモンゴルの双方に、社会背景や人々のこれまでの営みが存在することや、これから児童が生きていく社会は、様々な人々との共生が必要となっていくからである。社会科においては、多様な見方・考え方の育成が必要となってくるため、自分自身も意識をして実践を行っていきたい。児童が主体的に学習を進められるようにしなければ、受け身の学習になってしまい、ごみを減らす為に、自分たちは何をすれば良いのか等の行動目標につながっていかない。本単元でごみ問題について学び、具体的な行動目標につなげていきたい。

5 評価規準

観点	学習方法に関すること	自分自身に関すること	他者や社会に関すること
評価規準	・モンゴルや日本のごみ捨てに関して興味を持ち、共通点・相違点を考えることができる。 ・進んで気付いたことをワークシート等へ書き込むことができる。 ・分かったことを工夫して表現をすることができる。	・ごみ問題を自分たちの問題として捉え、自分たちには何ができるのかを考えることができる。 ・ごみ問題に対して、自分なりの思いを表現することができる。	・他の児童とともに、日本とモンゴルの共通点・相違点を考えることができる。 ・ごみを減らす為の工夫を他の児童に分かりやすく伝えることができる。
評価方法	・ワークシート ・発言	・ワークシート ・発言	・ワークシート ・発言

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルについて知ろう。	モンゴルについて興味・関心を持つ。	クイズやスライドを通して、モンゴルについて理解を深める。
2	モンゴルの生活について知ろう。	モンゴルの生活について興味・関心を持つ。	クイズやスライドを通して、モンゴルの生活について理解を深める。
3	モンゴルのごみ問題について知ろう。(本時)	モンゴルのごみ問題について興味・関心を持つ。	クイズやスライド、動画を通して、モンゴルのごみ問題について理解を深める。
4	日本のごみ問題について知ろう。	日本のごみの処分方法や最終処分の仕方について理解を深める。	清掃工場の復習や最終処分場の写真を見て、日本の処分の仕方について理解を深める。
5	モンゴルと日本のごみ問題について比較しよう。	モンゴルと日本のごみ問題についての比較を行う。	モンゴルと日本のごみ問題の学習を生かして、二国間で比較を行い、共通点・相違点を考える。
6	ごみをへらす為に自分たちのできることを考えよう。	自分たちがごみを減らす為にできることを考える。	今までの学習をふり振り返り、自分たちには何ができるのかを考える。

7 授業事例の紹介

単元名【 ごみ削減プロジェクト 2016 IN 更科 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月25日(金)5校時 (13:35~14:20)

(イ)実施会場 4年生教室

(ウ)本時の目標

・モンゴルのごみ問題に関心を持ち、資料などから意欲的に調べたり考えたりする。(関心・意欲・

態度)

・日本の支援技術協力やモンゴルの現状からモンゴルのごみ問題を考える。(思考・判断・表現)

(エ)指導のポイント

・モンゴルのごみ問題の現状をフォトランゲージで児童の考えたことや思ったことをたくさん書き出すことによって捉え、日本が行ったごみ収集の支援がモンゴル社会に生かされていることをおさえる。

・今までの学習と関連させて、モンゴルのごみ問題の特徴を捉えさせる。

(オ)本時の展開

過程・	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評
導入 5分	1 前時までの復習を行う	前時までのスライドをまとめたものを見て、モンゴルについて振り返る。	一斉	教室横にスライドをまとめたものを掲示	
展開 35分	2 学習問題の提示	モンゴルは、どのようにごみ収集や処分を行っているのだろうか。			
まとめ 5分	3 動画を見せる	・モンゴルのごみ収集についての動画を見て、分かったことや考えたことをワークシートに書き込む。	個別 一斉	動画をテレビに映す。 ワークシート	動画から分かったことをワークシートに書くことができる。
	4 児童の意見をまとめ、板書をする。	・ワークシートに書き込んだことを発表する。			
	5 フォトランゲージの説明を行い、児童に思ったことや考えたことを書き込ませ、発表させる。	・フォトランゲージを行う。 ・わかったことを発表(交流)する。		ナランゲル最終処分場の写真を拡大し、フォトランゲージを行えるようにする。 用紙:模造紙で作成	写真から分かったことを書き込むことができる。
	6 本時のまとめと感想を発表させる。次回の予告を行う。	・ワークシートにまとめと感想を書き込む。 ・感想やまとめを発表する。		ワークシート	

(2)授業の振り返り

【良かった点】

・同じアジアにあるモンゴルという国(日本との関係性等)を理解することができた。
・日本のモンゴルへの支援によって、ごみ収集の文化がモンゴルに根付き始めていることや日本とは異なるごみの最終処分の仕方があることを知ることができた。

- ・学習内容を生かし、発展させながら考えることで話し合いを深めることができた。
- ・全員が自分の意見を持ち、積極的に意見を言うことができた。
- ・自分たちの考えたごみ減らす為の方法を実践し、学んだことを自分たちの生活につなげることができた。

【改善点と具体的な改善策】

- ・動画の画質が悪く、モンゴルのごみ収集の様子が分かりにくかった為、次時に再度児童に見せ直しを行った。

(3) 使用教材



写真1 フォトランゲージ用いた写真



写真2 フォトランゲージ



写真3 モンゴル スライド

(4) 参考資料等

- ・ESD 環境省 学びをつなぐ未来をつくる

www.p-esd.go.jp/topics.html (閲覧日:2016.11.11)

- ・評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校 社会)

www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/.../02_sho_shakai.pdf (閲覧日:2016.11.11)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化 (児童の感想より 一部抜粋)

- ・モンゴルという国は、授業をやる前は知りませんでしたが、人よりも動物(家畜)が多い国ということが分かりました。日本で当たり前のように行われているごみ収集が当たり前ではないことや、日本の技術をモンゴルに伝えたことが分かりました。
- ・モンゴルに行ってみたいと思いました。相撲の力士さんにモンゴルの人がたくさんいることは、今まで知りませんでした。先生がモンゴルの写真を見せてくれた時の料理(ホウショール)がとても美味しそうだなと思いました。羊の肉が入っていると聞いて、どんな味なのかとても気になりました。日本以外の文化が知れて、良かったです。
- ・モンゴルの最終処分場に人や動物(家畜)がいて、とても驚きました。最初は、日本と同じように燃やして処分をしているのかなと思っていたけど、そのまま埋めていることが分かりました。ごみから出た汁とかでにおいや土が汚くなったりしないのかなと疑問に思いました。他の国では、どのようなごみの処分方法をしているのかを調べてみたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 本単元におけるPDCAサイクル

P 計画 ・単元の目標や授業のねらいを設定した。 ・学習指導計画を作成した。 ・授業の準備として、モンゴルの基本情報、日本とモンゴルのごみ問題の情報を収集した。
D 実施 ・ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材に授業を実施した。 ・フォトランゲージで写真から気が付いたことや考えたことを記入させた。 ・ワークシートに考えを記入させた。

C 検証 ・ワークシートや授業中の発言をもとに評価を行う。
【成果】 ・モンゴルの国について理解を深めることができた。 ・日本とモンゴルのごみ問題を比較し、ごみを減らす為に何ができるのかを、グローバルな視点からローカルな視点とをつなげて考えることができた。
【課題】 ・授業中に見せた動画の音が出ないなどの機会トラブルがあり、スムーズな授業実践が行えなかった。
A 改善 ・動画の確認などを徹底して行う。 ・児童の学びをまとめ、学び(単元全体)のフィードバックを行う。 ・指導案の改良を行う。

10 教師海外研修に参加して

自分自身が小学校時代に国語で学んだ「スーホの白い馬」の世界であるモンゴルに訪れることができ、貴重な体験・経験をすることができた。研修前のモンゴルのイメージは、草原にいる遊牧民族や元寇など日本と戦ったというイメージしかなかったが、研修後は、とても日本と深く関係している(つながり)を理解することができた。モンゴルには、日本からの支援によってできた学校(写真4)・橋・ごみ収集の仕組みなど様々なものやことがモンゴル文化になじんでいることも同時に理解することができた。モンゴルの青空(モンゴリアンブルー)がとても印象的であった。(写真5)心が洗われたように思った。日本から遠く離れた地で活躍している人々(青年海外協力隊員の皆様)が目を輝かしている姿を見て、あこがれを抱いた。

授業実践を通じて、つながりを意識していきたく。今まで国際理解教育・開発教育に取り組んでいたつもりであったが、それは、自分が海外旅行に行った先について話をするなど、児童にとっては、「そうなんだ。」と、あまり興味や関心が持てるような内容じゃなかったのではないかと考えている。今回は、国内やモンゴルでの研修を生かした授業内容になったのではないと思う。良かった部分だけではない。反省点も多々あると思う。国際理解教育・開発教育を今回だけで終わらせることなく、来年度以降も継続して行っていきたいと思っている。やはり現場で感じる空気を体感しないと、教材の鮮度が違ってくることも今回学ぶことができ、本当の意味での学びにつながらないなとも思った。同時に、今回の研修でつながった群馬県・埼玉県・東京都・千葉県・長野県・新潟県の先生方とのネットワークを大切にしながら、実践していきたい。

海外で働きたいという気持ちを今まで持っており、それまでは、日本人学校への派遣以外の選択肢があることを知らなかった。今回活動先にも伺ったが、自分も青年海外協力隊として海外に行きたいという気持ちが芽生えた。世界の現状を自分の目で見て、自分には何ができるのかを考え、行動することが求められる。しかし、日本に現場を持つ教師として青年海外協力隊に参加する以上は、日本と派遣国をつなぐ架け橋になれば良いと思う。



写真4 日本のODAで建設をした学校



写真5 モンゴルの青空



MONGOLIA

学校名：千葉市立幕張東小学校

氏名：窪田 尚美

[担当教科：小学校全科]

- 実践教科等：総合的な学習の時間、道徳
- 時間数：6時間
- 対象生徒：第5学年
- 対象人数：33人

1 単元名

世界の人々とともに生きる

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・世界の多様な文化・生活を知り、類似点・相違点に気付き、外国への興味を持つ。
(進んで参加する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気付き、互いに助け合う心を培う。
(つながりを尊重する態度)
- ・世界が抱える問題について知り、豊かな人間関係をつくるための行動目標を自己決定できる。
(自己の生き方の追究)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は、モンゴルの国々の習慣や文化を知ること、その違いに気付き異文化を認めると共に自国文化についても誇りを持ち、世界各国の人々と共生していこうとする態度を養うことをねらいとしている。

「総合的な学習の時間」では、モンゴルの人たちの生活や文化を紹介する。住居や遊びを体験することで、日本との文化の共通点と相違点について追及していく。そして、「道徳」では、外国の人々や文化を大切にする心をもつことに重点を置く。国際化への対応が必要となってきた社会の中で、目先の情報で外国を考えるのではなく、世界の人々が置かれている状況の違いに気付き、今の自分をみつめ、世界の人々と積極的に関わっていこうとする気持ちをもつことと捉える。外国の人々がそれぞれの国の伝統と文化を大切にしていることを捉え、尊重する気持ちをもてるようにしたい。

本単元を通して、児童がモンゴルという国の現状を知ること、違いを知り、理解し合うことや受け入れることのよさについて考えるのに適している。自分の周りにはさまざまな立場の人がいることに気付くようにし、お互いが理解し合うにはどんなことが必要か、学習をしながら考えるようにする。指導にあたっては、モンゴルの学習を進めていく中で、共通点や相違点について「聴き合い」をして考えさせていく。最終的に、世界とつながるために、何ができるのか、自分の思いを深めさせたい。

(2)児童生徒観

本学級の児童は、4月より外国語活動及び総合的な学習の時間の「神田外大学との交流」の学習が始まり、世界の国々に興味を持ち始めたところである。ALT や神田外語大学の留学生との交流をしている中で、日本と世界の遊びの違いや、考え方の違いに気付き、世界のことを意欲的に学ぼうとしている様子が見られる。一方で、昨今の多くの事件をテレビ等のメディアを通して知り、

外国は危ない国だから関わろうとしない児童もいる。

また、言葉や文化の違いを理解することが苦手であったり、自分の国の伝統と文化に対する理解も希薄であったりするようである。

9月に行ったアンケートでは、「外国の人と進んで交流しようとしている」の項目で約8割の児童が「あてはまる」と回答し、「あまりあてはまらない」と回答した児童は2割で、外国の人と交流したいと思っている児童が多いことがわかる。しかし、外国の人と積極的に話したり、交流したりしたいと思っているが、自分から進んで外国の人に関わろうと考える児童は少ない。

そこで本単元では、モンゴルの文化について関心を持ち、積極的に外国の人と接したり、交流したりすることのよさに気付かせたい。最終的に、児童が外国を知りたいな、行ってみたいなという前向きな気持ちが持てるようにしたい。

(3)指導観

- 資料の提示を工夫し、世界の現実に向きあうことができるようにする

導入段階でモンゴルの子どもの写真の提示し、何をしているところか、自分の生活と違うところはどこかを考えるようにする。写真を用いることで、モンゴルの状況や問題を身近に、分かりやすく捉えることができるようにする。そして、自分がどれほど恵まれた環境に暮らしているのかに気付かせる。

- 「聴き合い」を通し、世界の中の一人として考えられるようにする

「聴き合い」をすることによって、自分だけでは気付かなかったことや感じていなかったことに気づき、より相互理解が深まると考える。そのことで児童は、身近にできることがたくさんあることに気付くようにしていく。子ども同士が「聴き合い」をしていく中で、JICA の取り組みや活躍する人の願いによって、「援助を行うこと」が解決につながると考えるだろう。その場合は、「一回の援助で貧困や飢餓は解決するのだろうか」や「現実には、なぜ簡単に援助が起こらないのだろうか」と問い返しをすることで、援助だけが最適な解決策ではないことを知るようにしたい。そして、自分の考えを発表する場、友達の考えを聞く場を設け、より自分の考えを深めるようにしていきたい。

- 外国語活動や総合的な学習の時間の中で、世界の人と積極的に関わっていかうとする気持ちを育てる

事前の総合的な学習の時間の「We are the world」の単元では、世界の国々へ興味・関心を持たせたい。そして、外国の文化があることのよさに気付かせ、興味を持てるようにしたい。

事後の総合的な学習の時間「世界の人々とともに生きる」では、世界が抱える問題に着目し、それぞれの違いを知ることの大切さと相手の立場になって考えることの大切さに気づき、自分ができることを考え、行動できるような心を育てたい。

5 評価基準

観点	課題設定の力	課題解決の力	表現する力	生き方を見つめ直す力
評価規準	世界の多様な文化・生活について興味・関心を持って取り組む。	世界の現状を知り、自分にできることを考える。	モンゴルと日本の共通点・相違点を見つける。	モンゴルや国際社会における様々な課題について理解し、国際協力のよさに気づくことができる。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルはどんな国かな？	・ゲルを見学し、モンゴルの文化について触れ、興味・	・ゲルの外部と内部を見学して、造りを知る。

	＜総合的な学習の時間＞	関心を持つ。	・移動しやすいようなテントの造りだと知る。
2	モンゴルと日本は似ている？似ていない？ ＜総合的な学習の時間＞	・モンゴルの人々や生活について知り、モンゴルをより身近に感じる。	・モンゴルの国の概要を学ぶ。（ゲル・遊牧民） ・日本と共通点が多い写真を見て、モンゴルか日本か分ける。 ・日本と似ているところが多いことに気が付く。
3	モンゴルの子供の様子について知ろう ＜総合的な学習の時間＞	・モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。	・モンゴルのじゃんけんを知る。 ・モンゴルの学校や生活の様子を見て、フォトランゲージを行う。 ・「なぜ、日本語を勉強したい人が多いの？」「なぜ、日本人が好きな人が多いの？」という問いに対し、予想する。
4	わたしたちにできること ＜道徳＞	・モンゴルの学校について知る。日本が行っている支援活動について知る。	・子どもの写真を見る ・日本とモンゴルを比較し、子どもの願いをまとめる。 ・国際協力として『国際協力機構』の支援があることを知る。 ・『青年海外協力隊』の経験談を聞く。 ・自分にできることを考える。
5	世界で働く日本人の活動を知ろう ＜道徳＞	・JICAのボランティア活動について知り、日本が行っている国際協力について考える。	・モンゴルで働く日本人のインタビューを見て、話し合う。 ・千葉に住む協力隊の人のインタビューを聞き、支援に対する熱い思いを知る。 ・日本の支援によって親日的な国であることを知る。
6	モンゴル人の回答について疑問に思ふ点をトゥシーさんに尋ねてみよう。 ＜総合的な学習の時間＞	・日本で活躍するモンゴル人と出会い、モンゴルと日本はつながっていることに気付く。	・質問点を明確にし、トゥシーさんにインタビューする。 ・日本に対する思い、モンゴルに対する思いを知る。 ・日本でモンゴル人が努力することが、どのような成果を導いているのか考える。
7	モンゴルの小学生にお手紙を書こう ＜総合的な学習の時間＞	・世界の人々と積極的に関わっていこうとする心情を育てる。	・世界の人のために自分ができていることを考える。 ・モンゴルに住む小学生にお手紙を書いて、学習してきたことをまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【わたしたちにできること（国際理解・親善と人類愛）】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月2日(金)第3限

(イ)実施会場 5年2組教室

(ウ)本時の目標

○モンゴルの様子と自分の置かれている立場を知り、自分にできることを考える。

○多様な習慣や文化、価値観の違いに気付く、異文化を理解しようとしている。

(エ)指導のポイント

・モンゴルの写真をもとに、モンゴルの子どもの願いに目を向ける。国際協力の一つとして「JICA」で働く人がいることを知り、友達と「聴き合い」をしながら自分は何ができるのか考える。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	モンゴルの写真を見て、「欲しいことは何でしょう」と児童に問う。【1】	1 写真を見て、何をしているか考える。	一斉	・厳しい現状で苦しんでいる子供たちの写真を見て、自分達との違いを考え、本時のねらいとする価値への方向付けをする。	

展開 30分	資料を読み、モンゴルの学校の違いや気付いた所について話し合う。【4】 「モンゴルの小学生の願いは何だろう」「みんなとの違いは何だろう」と児童に問う。【1】 JICAのモンゴル支援について紹介する。【5】	2 資料『モンゴルの小学生の生活・学校の様子』を聞き、話し合う。	一斉	・写真を提示しながら読み聞かせをすることにより、モンゴルの小学生を身近に感じられるようにする。	
		3 モンゴルと日本を比べて、考える。	一斉	・ワークシートに自分の意見や考えを書くことで、モンゴルの小学生の思いを十分に考えさせたり、整理させたりするようにする。	
		4 国際協力の一つとしてJICAの取り組みを知る。JICAの方から話を聞く。	一斉	・「支援をする」ことに気付かせることで、国際協力をしている人や団体に目を向けるようにする。 ・JICAで働いている人の経験談を聞き、関心を持てるようにする。	
	「世界とともに生きる人としてどんなことをしたいと思いますか。」の問いに対して自分で考え、グループで聴き合いをする。【3】	5 小グループに分かれて、聴き合いをしながら話し合う。	班	・小グループで聴き合うことで、自分と異なる考えや思いにも触れることで、大切なことに気付くようにする。 ・明確な答えがあるわけではなくモンゴルの学校の実情を知った上で相手のことを理解しようとするのが大切だということに気付かせる。	・モンゴルの教育事情について関心を持ち自分のできることについて考えようとしている。 (学習の様子・ワークシート)
まとめ 10分	本時の学習をまとめ、次時の学習の予告をする。【6】	6 本時の学習の振り返りをする。	個人	・熊本大地震の時に、モンゴルから支援があったことに触れることで、お互いに知ろうとすることが大切だと考えるようにする。 ・次時では、モンゴルの支援をしている日本人を紹介することを知らせ、意欲を高める。	

(2) 授業の振り返り

【成果】

- ・児童と同じような年齢の子供のインタビューを資料にすることで、身近に考えることができた。
- ・国際協力の一つとして「JICA」の協力隊のお話を聞くことができたことにより、興味・関心を持って意欲的に学習に取り組むことができた。本単元の流れは、子供の学びに合っていた。
- ・友達の考えを「聴き合い」することにより、世界の一員として自分にできることを深めて考えることができた。

【課題とその具体策】

- ・子供たちがより深く考えるためには、今後、モンゴル等支援を必要としている国への仕方がいろいろ

ろあることを知らせていく必要がある。

- ・JICA の資金は、日本の税金から出資していることを伝え、子供たちも国際協力に参加していることをおさえるといふ。

(3) 使用教材

○モンゴルの子供たちの写真



○モンゴルの小学生の作文(インタビューをもとに作成)

わたしはモンゴル人のノミンダリ、10歳です。わたしの家族は、ウランバートル市の近くに住んでいます。学校の先生が言っていたけれど、地方からウランバートル市に移り住む人がとても多く、わたしの学校は、全校で1000人、26学級あります。教室の数が足りないので、午前と午後で13学級ずつ交換する2部制をとっています。机や椅子は、みんなで使うので誰のものでもありません。

わたしは、算数とモンゴル語(国語)、体育の授業が好きです。校外学習や雪まつりも大好きです。学校は、とても楽しくて帰りたくないくらいです。休みの日は、友達とチェス遊びや、プールに行くのを楽しみにしています。わたしのお母さんは今、日本に留学しています。わたしの将来の夢は、医者になることです。お母さんのように、たくさん勉強をして日本に留学して、モンゴルで医者として活躍したいと思っています。

学校が夏休みになると、遊牧民として生活しているおばあさんのところに遊びに行きます。おばあさんのゲルでは、わたしは、朝6時に起床して、牛の世話をしています。朝と晩に乳しぼりをして料理をしたり、牛糞をあつめてストーブの燃料にしたりしています。おばあさんのお手伝いをするのが大好きです。お手伝いは、将来何かの役に立つと思い、自分のために進んでやっています。

(4) 参考資料等

- ・『地球の歩き方2016～2017』ダイヤモンド社 2016年
- ・『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想』大津和子著、国土社、1992年
- ・『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』磯野昌子他著、開発教育協会、2003年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

(1) モンゴルの写真やゲルを見て

- ・モンゴルと日本は似ていないと思っていたけれど、日本と身近なところがあり驚いた。
- ・日本の物がモンゴルにあって、日本は世界に進出していると思った。
- ・モンゴルは親日国だなと思った。
- ・モンゴルのゲルは、移動式で持ち運べることに驚いた。
- ・ゲルは、持ち運びやすいように、できるだけ軽くて木を組み合わせていることを知った。
- ・ゲルは、モンゴルの気候に合っていると思った。

(2) モンゴルの小学生の話や JICA の取り組みを聞いて

- ・自分も何か協力や協同できるのならば、やってみたいと思った。日本だけでなく、他の国も豊かになるようにしたい。
- ・「国際協力」で募金活動などを進んで行うことで、世界の人々の為に役立ちたいと思った。

(3) 世界で働く人のインタビューを聞いて

- ・困っている人を助けたら、自分もうれしくなると思った。
- ・国際協力をしている人は、いろいろな思いを抱いて働いていると思った。他国と関わっているうちに、仲も良くなって良い関係が作れると思った。
- ・国際協力に参加することによって、その国の人々が喜び、新しい知識・技術を得られるだけでなく、自分自身も成長することができると思った。

(4) モンゴル人のトゥシーさんのお話を聞いて

- ・モンゴルの田舎と都市部の違いがあって、空気が汚染されているところもあることに気が付いた。
- ・トゥシーさんが、世界の勉強できない子供を助けたいという思いを持っているのがすごいと思った。
- ・モンゴルの田舎の子供の貧困が改善されればよいと思った。
- ・モンゴルと日本の関係を深めることで、モンゴルの発展につながると思った。

(5) 保護者の方の感想

- ・JICAの方のお話を聞いて、取り組みに関心した。海外でボランティアすることは、その場限りの助けではなく、その後にその国の人達が自分達の力でできるようにすることの素晴らしさを知った。
- ・国際協力で子どもたちに夢や希望を与え、素晴らしい活動をしていることを知った。
- ・身近なところに、国際協力ができきかけはたくさんあると気付いて欲しい。
- ・困っている人を助ける時、本当に必要なものを考え、その力になれるような大人になって欲しい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教師海外研修への参加前には、日本とモンゴルの関係性についての知識は浅く、どんな授業展開をすれば国際理解につながるのか分からなかった。研修中では、モンゴルの厳しい環境の中、働く人々の思いや願いに触れることができた。日本に住んでいるモンゴル人や協力隊の方にも話を聞くことができた。日本が一方向的に支援をしているのではなく、日本もモンゴルも互いに助け合うことが国際協力であることを児童に知って欲しいと考えるようになった。

○本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	○児童の事前調査から児童の実態をつかみ、どのような学習計画を立てればよいのか、他教科や行事（留学生との交流会や外国語活動）との関連を考えながら学年で取り組める国際理解の単元を年間計画に入れた。小学校学習指導要領をもとに、授業のねらいを設定した。
D 実施	○モンゴルに行く前に、総合的な学習の時間で世界の国についての調べ学習を行った。留学生との交流会では、日本の文化や遊びを紹介した。 ○授業の導入では、写真を使ったり、モンゴルで購入したモンゴル土産を触ったりした。グループ活動を増やし、友達と意見を言い合いながら考えられるようにした。
C 検証	○最初にモンゴルと日本の共通点について扱うことで、児童にモンゴルと日本は近い国であることに興味を持たせることができた。また、モンゴルでインタビューした資料や協力隊の経験をお話していただくことで、それぞれの人たちが支援している国の人、日本のために働いていることを知ることができた。最終的に、自分のためにも活動していることに気付き、今を生きる自分のキャリアについて考えることができた。
A 改善	○多くの情報を得たが、どの資料が児童に効果的に活用できるのか考えていきたい。 ○児童の実態に合わせて、モンゴルと日本の共通点を重点的に学習してきたが、相違点やモンゴルが抱える課題についてはより考えていかなければならない。 ○モンゴルに行ったことのない人でも、手軽に国際理解の授業を行えるように、資料作りをしていきたい。

10 教師海外研修に参加して

本研修を通して、日本やモンゴルで様々な人々と出会い、話を伺うことができた。世界に生きる一人として、それぞれの立場で考えを持ち、将来に生きるよう活躍している姿に感動した。海外に関心が低い日本の子供たちに紹介し、世界に目を向けるきっかけになればよいという思いを持った。

日本の子供たちが世界に目を向けられるよう、まず私が見てきたモンゴルの人たちの親日感情や日本への信頼感を紹介し、興味を持たせたいと考えた。児童は、日本と似ていることにとても驚き、モンゴルを身近に感じたようだった。そして、モンゴルで活躍する人達は、言葉や文化の壁がある中での苦労や困難を前向きに捉えて、自信を持って頑張っていることを紹介した。児童は、支援している国や人だけでなく、自国のため、自分自身の幸せにもつながることに気付き、驚いたようである。今後、子供たちが、どんな困難な物事でも前向きに捉えて、世界の人と進んでコミュニケーションをとって欲しいと願う。

また、「国際協力」とは何かを改めて考える貴重な機会になった。今後も児童が興味を持って世界に目を向けられるよう、先生方と協力しながら授業実践をしていきたいと思う。



MONGOLIA

学校名：川口市立戸塚東小学校

氏名：佐俣 絵美

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：社会科
- 時間数：時間
- 対象生徒：小学校6年生
- 対象人数：33人

1 単元名 世界の未来と日本の役割

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- モンゴルの学習を通して、世界には異なる文化や習慣をもった国があることを知り、他の国の文化や習慣を尊重する態度を養う。(多面的、総合的に考える力)
- 我が国の国際協力や国際交流の様子を知り、世界で働く日本人に関心をもつとともに、世界の未来について考える。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元の学習内容は社会科「世界の中の日本」という単元で、我が国とつながりの深い国々、国際交流や国際協力の様子及び、平和な国際社会の実現に向けての日本の役割を具体的にとらえることをねらいとしている。児童は国際連合の働きや国際紛争、環境問題への働きかけなど異なる文化や習慣を大切にしながら、我が国が世界に向けて重要な役割を果たしていることを理解する必要がある。社会的事象について調べるだけでなく、モンゴルで活躍する人々の活躍やJICA、NGOで活躍する人々の声を聞くことで、世界の問題を自分のこととしてとらえる意識をもたせたい。また、自分にできることについて考え、自己の生き方についても考えるきっかけとしていきたい。

(2)児童生徒観

本学級の児童は素直で人との関わりを大切に思う児童が多い。一方で、知らない世界に対しては消極的な面が見られ、自分の周りの社会から世界へと視野を広げられている児童は少ない。第2学期始めのアンケート調査によると、「将来は様々な国に行ってみたい」と答える児童がいる一方で、昨今の世界情勢を鑑みてか、他国への恐れを抱き世界に関して興味・関心が低い児童が多くいるという実情が伺えた。そこで第2学期は総合的な学習の時間や道徳などを通し、積極的に世界に目を向ける機会を設けてきた。特に道徳においてはゲストティーチャーを招いて話を伺うなど、新たな世界の人からの話を聞く機会を設けるよう努めてきたところ、少しずつ世界への関心が高まってきている。

(3)指導観

国際化・多様化が進むこれからの社会において、「生きる力」と共に地球的な視野をもつことが重要である。児童は総合的な学習の時間、外国語活動や道徳の時間などの学習により、世界に関心をもち始めている。そこで社会科の授業においては社会的事象から児童なりの考えをもち、より広い視野から考えることを大切にしたい。また小学校6年生の第2学期後半という時期を考え、様々な人の生き方や考え方に触れさせることで、自分の将来や生き方を考えはじめるきっかけとなるよう、キャリア教育の視点も含め授業を行っていきたい。

5 評価基準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
評価規準	我が国の国際協力や世界平和の大切さについて意欲的に考え、自分なりの考えをもとうとしている。	平和な国際社会の実現に努力し、向け努力する人々の願いや思いを考えたり、平和な世界にするために自分ができることについて考えたりしている。	地図や統計、写真などの様々な資料を活用し、必要な情報を集め、読み取り、調べたことを書いたりまとめたりすることができる。	我が国が平和な国際社会の実現に努力し、重要な役割を担っていること、平和な社会実現に向け努力する人々の活躍があることを理解している。
評価方法	ワークシート	ワークシート ノート	授業の様子、まとめのワークシート	ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本とつながりの深い国々～モンゴルを通して～	モンゴルを通して世界には様々な文化や習慣をもった国があることや異なる文化や習慣を尊重することが大切であることに気づき、次の学習への意欲をもつ。	写真を通して、モンゴルと日本を比較することで、日本とのつながりについて考え、世界には様々な文化や習慣があることに気づき、世界への興味・関心を広げる。 ※総合的な学習の時間(国際理解)の導入も兼ねて9月に行った。
2	環境問題の解決に向けて	モンゴルの環境問題を通して、世界の環境問題は深刻であることを理解する。	モンゴルのごみ問題、大気汚染の問題を知り、環境問題は世界で深刻な問題であることに気づくとともに、世界には様々な環境問題があることに気づく。
3	世界にある様々な問題と平和な社会実現に向けて	世界には様々な諸問題があることを知るとともに、平和な社会の実現に向けて諸問題を解決しようとする組織があることを理解する。	環境問題以外にも国際紛争など世界には様々な諸問題があることを知り、諸問題の解決に向け国際連合などの様々な組織が活動していることを理解する。
4	様々な支援、現地に根付いた支援	NGOやJICA、青年海外協力隊などの支援について知る。	調べ学習により、NGOやJICAなど世界平和に向け活躍する様々な組織があることを知る。また、それらの組織の活動や青年海外協力隊の活動について知り、世界で働く人々に関心をもつ。
5	世界で活躍する日本人	NGOやJICAの活動、青年海外協力隊で働く人の活動の様子や思いについて知り、自分の考えを深める。	青年海外協力隊やNGO、JICAの人の話を聞くことで、世界の諸問題解決に向け、努力する人々がいることを知り、生き方や思いについて考える。
6	まとめ	自分たちでできることについて考え、適切な方法で考えをまとめる。	振り返りを行うとともに、自分たちにできることを考えまとめ発信する。

7 授業事例の紹介 小単元名【世界で活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月13日(火)第3校時

(イ)実施会場 6年1組教室

(ウ)本時の目標

NGOやJICAの活動、青年海外協力隊で働く人の活動の様子や思いについて知り、自分の考えを深める。

(エ)指導のポイント

事前の授業ではODA、NGO、JICA、青年海外協力隊といった言葉の概要を捉えさせておく。本時では、「自分は世界で働きたいか」ということについて個人で考えた後グループで話し合わせ、「世界で働く」ということを自分の問題として考えさせた上、モンゴルで活躍する日本人の様子を紹介する。「海外への不安は、どの日本人もきつと同じだ」ということを想像させた後に海外で活躍する日本人の姿を見せることで、不安を上回るやりがいを感じ、懸命に働く日本人の姿に触れさせたい。また、まとめでは個で考える時間を十分確保し、考えを深めさせたい。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 2分	1 前の学習の想起	○以前の学習を想起し、環境問題をはじめモンゴルには様々な課題があることを思い出し、世界には様々な課題があることを思い出す。 ○ODA、JICA、NGO、青年海外協力隊の概要について想起させる。	一斉	・環境問題、紛争、ライフラインの整備など世界には様々な問題があることを想起する。 ・様々な問題の解決に向けて活動する組織や人がいることを想起させる。	・世界には様々な問題があることを理解しているか。 (発言)
学習課題 世界で活躍する日本人を知り、その思いについて考えよう。					
展開 15分	2 海外で働きたいかどうかで話し合う。 ※授業づくりの視点【1】【2】【3】	○海外で働くということを自分のこととして考えさせ、他国のために働きたいなどのポジティブな面と、不安などのネガティブな面、両方の思いがあることに気づかせる。	個 ↓ 交流 ↓ 一斉	・「海外で働きたいということがよいこと」と捉えさせるのではなく、言語の問題や文化の違いなど海外で働くことへの不安要素があることも考えさせる。その上で、世界で活躍する日本人にも両方の思いがあることを想像させる。	・海外で働くことの決意や思いを想像できたか。 (発言) (ノート)
15分	3 VTRとスライドで、海外で活躍する日本人の思いを知る。 ※授業づくりの視点【4】	○NGOと協力する松本直子さん (青年海外協力隊) 【写真】 ○新国際空港で働く木原正智さん (JICA専門家) 【写真】 ○save the children(NGO)の岡本啓史さん 【VTR】 ○日本人学校で働く	一斉	・「障害児について関心があった」という動機、半年で言語を習得し他の国の人と協力しながら活動している様子を知る。 ・モンゴル人との考え方の違いから「めげそうになる」という木原さんの本音から苦労がありながらも仕事をする思いに触れさせる。 ・「世界についてまず考えることが世界をよくすること」という思いを知る。 ・日本のことを思いな	・海外で活躍する日本人の思いを知ることができたか。 (表情) (発言)

		山崎香葉子さん (青年海外協力隊) 【写真】 【手紙】		がらも懸命に働く思いを知る。	
まとめ 10分	4 まとめ ※授業づくり の視点【6】 【7】	○授業の感想をノートにまとめる。 ○数名の感想を発表し、互いの考えを理解しあう。		・海外で行くことがよいとするのではなく、児童応じた振り返りをし、授業の前と後の自分の考え方の変化や今の自分にできることについて考えられるようにする。 ・JICAで仕事するということへの思いや子供たちが様々なことを考えた様子を見ての感想など、教員とは違う視点での感想をいただく。	・世界で活躍する日本人の思いを考えられたか。(ワークシート)
3分		○参観されたJICAの方から授業の感想をいただく。			

(2) 授業の振り返り

- ・自分が会った方の生のメッセージを伝えることができたことで、児童にとっては世界で働く人が身近に感じられたようだった。
- ・児童の感想には様々な観点からの感想があり、その子に応じた振り返りができていた。

〔課題〕

- ・時間配分に課題がある。展開部分「自分が世界で働きたいか」というところより、まとめ部分に時間に十分時間を確保し、それぞれの変容を子供たち自身が相互に感じあえるような時間配分が重要である。
- ・参観のJICAの方から「世界で働くことがよいのではなく、自分にできることが大切」というメッセージを授業の最後にいただいたことによって、児童が「今すべきこと」を考えるきっかけになった。教師の方でもあらかじめ、この視点を抑えての指導が必要である。
- ・開発途上国の支援を「こちらが援助してあげている」という認識の児童がいた。授業の後に児童に話はしたが、相互援助という視点をきちんと押さえて指導にあたる必要がある。

(3) 使用教材

- ・現地の人や海外の人と協力しながら働く青年海外協力隊松本直子さんの写真
- ・新国際空港建設に携わる木原正智さんの(JICA専門家)の写真
- ・save the children(NGO)の岡本啓史さんのVTR
- ・日本人学校で働く青年海外協力隊山崎香葉子さんの写真と手紙



(4) 参考資料等

- ・『国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！～』 JICA教材作成実行委員会
- ・『新編 新しい社会6下』 東京書籍
- ・『新編 新しい社会6下 指導編』 東京書籍

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

モンゴルの紹介の授業(9月)

本校では第2学期の総合的な学習の時間で国際理解を扱うこととなっている。その導入も兼ねて授業を行ったのでこの授業ではモンゴルを通して、世界に目を向けることをねらいとした。教師がモンゴルの服を着たり、ゲルの模型や馬頭琴などを見せたりしたことで、モンゴルに興味をもった児童が多く、様々な文化を知ることの楽しさを知ったようだった。

【児童の感想】

- ・これからぼくはいろんな国の文化や伝統行事などその国の素晴らしいことを学びたい。また他の国ともっと仲良くなるためには、相手の国の良さを知り、さらに日本のよさを知ってもらい、それぞれの国のことを知れば仲良くなると思いました。
- ・日本とモンゴルは助けあっていたというところが心に残りました。東日本大震災の時に寄付してくれたことを知り、やっぱり助け合いは人と人だけじゃなくて国と国とでも必要なんだと思いました。朝とったアンケートを1回書き直したいです。私はあまり「外国に行きたくない」という考えでしたが、すごく考え方が変わりました。モンゴルにすごく行きたいなと思います。でも、正直な理由はチーズと馬です。どちらも私の好きなもので好きなものがある国に行ったら私も幸せだろうなと思うからです。

環境問題の解決に向けて(モンゴルを通して)

【児童の感想】

- ・前の勉強でモンゴルの豊かさを知ったのに、ごみ処理をする場所や捨てられているごみを見て、がっかりしました。だけど、モンゴルの素晴らしいところもたくさんあり、日本も加わり協力し合っているのは素晴らしいことだと思いました。



【ごみ処理場の様子】

児童には、「何の場所か」と質問を投げかけ考えさせた。

世界で活躍する日本人(本時)

【児童の感想】

- ・「私は今回の授業を受けて、世界で多くの日本人が様々な場面で活躍していることを知りました。私の将来の夢は「世界中の子供たちを笑顔にすること」です。その夢のために、私は「国境なき医師団」というグループに入ろうと思っています。今日ビデオで見た皆さんのようにいつか私も世界で活躍できるようになれたらいいなと思います。そして世界中の子供たちを笑顔にしたいです。その今から出来ることを探してみようと思います。
- ・ぼくは日本で生きたい。でも「言語が違う、他の国のことはわからないから行きたくない」というのは他の国に行くことをあきらめる理由にはならない。
- ・ぼくはさらに世界で働きたいと思いました。自分の国のことは知っているけど、開発途上国の環境は全然知りません。今ぼくたちは当たり前のように学習しています。日本では当たり前かもしれないけど、違う国では当たり前ではないかもしれません。また、日本の技術よりもっとすごい技術がたくさんあるかもしれません。日本の技術をその国に行って伝え、教えてもらい、さらに日本がよくなったらいいなと思います。ぼくは世界や日本、どちらでもいいので活躍できたらいいと思いました。
- ・他国の援助をしたいと軽く言っていたが「援助」というのはとても大変なことなのだった。特に木原さんの受け答えの中の「めげそうになることもある」という言葉が印象に残りました。考え方の違いなどを乗り越えて援助ができているのを感じ、それだけ「この国の発展を手伝いたい」という気持ちがあるのだなあ」と感心しました。JICAの方の「フィールドが違うだけで、外国で働くことがえらいわけではない」という言葉を聞き、外国ばかりで日本をおろそかにしてはいけないし、外国を無視することもできないということが伝わってきました。
- ・私の意見は変わりませんでしたが、今日の4人みたいに外国で働く人がいるからこそ、日本でも働きたいと思うのだと思います。(略)日本人でもニュートリノなどの発見をして世界に貢献している人もいます。だから私も海外には行かなくても日本国内で何かを成して海外に貢献できるような仕事がしたいです。日本や海外ということにはこだわらず、地球上に存在する陸地が海で分かれているだけという考え方をしてもよいかと思いました。

【その他の変容】

- ・自主学习ノートで自主的にJICAについて調べてくる児童がいた。
- ・廊下にJICAの雑誌 mundi を置いてみたところ、真剣に読んでいる児童がいた。
- ・学年掲示板に開発途上国の記事を掲示したところ、立ち止まって読み意見を交換し合う児童がいた。
- ・普段なかなか自分の思いを話さない児童が「青年海外協力隊として活躍したい」と話した。
- ・自分の将来の夢と世界との関連について考え始めた児童がいた。
- ・授業の後に参観に来たJICAのスタッフに質問をする児童が多くいた。

⇒一番の変容は、自分の周りのことしか考えられなかった児童が、世界を意識するようになったことである。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣前の事前の準備・研修

事前研修で「社会科」のどの単元でどのような授業を行うかについて考えたことで、目的意識をもって研修に参加することができた。研修中には他の参加者やJICAの方がインタビュー撮影等に協力してくれた。たくさんの方の協力で今回の授業になったと言っても過言ではない。残念だったことはたよい資料がたくさんあるにも関わらず、授業で扱う教材を精選しなくてはいけなかった点である。他の機会をとらえ児童に還元できたらと思う。

他教科との関連 教科や指導事項を意識した授業の位置づけ

社会科「世界の未来と日本の役割」の単元は、本来であれば第 3 学期の最後に行う単元である。しかし今回の授業を行うにあたり、管理職や保護者への理解を得て第 2 学期に移行することができた。移行により歴史の学習からのすぐにこの単元に移ることになったが、結果としてはよかった。理由として、歴史学習で戦争について学んだ直後の今回の学習となったことで、児童の思考の流れが「歴史学習で戦争や平和について学ぶ」→「現代において世界平和のために活躍する人について学ぶ」となり、思考の流れがスムーズになったことが挙げられる。また、卒業文集を制作し将来について考える時期であったため、自分の将来の夢を実現したときに、世界とどんな風につながれるか、また今の自分にできることは何かということを考えることができた児童が多くいた。モンゴルの研修をどのように授業の中で位置づけていくかということは、課題であり、今後も研修参加者が考えていかななくてはいけないことだと思う。

10 教師海外研修に参加して

今回研修での成果は自分自身の意識の変化である。他国のよさや課題を目の当たりにすることで、今まで世界に目を向けることが少なかった自分が、研修中は「自分にできることはないか。日本の国にできることはないか。」とずっと考えていた。そんな中出会ったモンゴルで活躍する日本人は、仕事に誇りを持ち、日本やモンゴルのために必死で働いていた。その姿を目の当たりにし、「今、私自身ができることはこの国にいて、子供たちを育てることだ。世界に目を向けて自分の生き方を考えるような子供たちを育てたい。」と心から思った。そして帰国後も途上国の様子に関心を持ち、子供たちに伝え続けようと考えようになったことが自分自身の大きな変化である。

授業では児童の大きな変容を感じ取ることができた。特に本校は一部教科担任制を導入していることにより、3 学級つまり約 100 名の児童に授業をすることになった。学級や児童の実態によって児童の考えは様々であったが、子供達なりにそれぞれが懸命に考えていたことが表情や感想から伝わってきた。世界について、未来について、また自分自身の生き方について考えようとする姿を感じることができたのは大きな成果であった。

研修に参加させていただいたからには、この経験を 1 年で終わらせてはならないと思う。自分自身が現地で感じた「自分にも微力ながらも世界に貢献できるのではないか」という思いを継続してもち続けることが大切であると思う。また国際理解教育を行うためには様々な人の協力を得ることも大切である。今回は学年・学校の協力もあり、他教科との関連を図ることができ、児童の意識の変容を大きく感じることができた。研修で感じた思いを伝えていくために、自分自身が変容し、理解を求めていくことも大切であると感じた。



学校名：群馬県大泉町立南小学校

氏名：長田 久恵

- 実践教科等：算数
- 時間数：3時間
- 対象生徒：小学校6年生
- 対象人数：100人(3クラス)

MONGOLIA

〔担当教科：〕算数

1 単元名

算数卒業旅行 国際コース

2 単元の目標

算数に関する国内外の話題や、算数史・中学校の内容に触れ、算数への関心を高めていく。
(3多面的、総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

⑦互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

算数卒業旅行という小学校6年間の最後の学習単元で、算数の面白さ、不思議さ、日本で独自に発達した算数、国や地域による算数の違いや共通点、楽しむものとしての算数などにふれることや中学校数学への関心を引き出すことをねらいとしている。そして、「中学校体験入学コース」、「ミステリーコース」、「和算コース」、「クイズコース」、「国際コース」の5つが設定されている。

その中で、様々な国の算数に触れて算数についての外国の文化を知る「国際コース」を中心に単元の構成を考える。数力国の言語で数字の並びに規則性を感じ取ったり、加減乗除の四則について筆算方法の共通性や異なる部分を見つけたりするのに適した教材である。

算数の新しい公式を身につけさせる単元ではなく、これからの中学で学ぶ数学に向けて、算数のもつおもしろさや不思議さ、世界での共通性を感じて、興味関心を高めていくことができる教材が扱われている。算数は本来生活に根ざして発展してきたものなので、外国の算数に触れるということは、多様な文化を知るきっかけとなるであろう。

(2)児童生徒観

本校のある大泉町は、南米系の外国籍が多く住んでおり、本校にも外国籍児童が多数在籍している。本学年の児童は、100名中14名が外国籍(ブラジル、ペルー、トルコ、バングラデシュ)、さらに両親のどちらかが外国籍家庭の児童が7名いる。児童の中には、日本語の読み書きを完全に理解していない子もあり、算数の問題文を完全に理解して算数の学習に取り組める外国籍児童は少ない。そのため、計算問題はどうか習熟できても、文章題で求められていることが理解できずに、算数の学習への意欲をなくしてしまったり、宿題をやってこなくなったりしてしまいがちである。また、日本の学校では日本人児童が外国の多様な考え方に触れる機会は少なく、外国籍児童も自国の学習や文化に触れる機会は少ない。

(3)指導観(国際コース)

- ・数が表す普遍性と、数字や記号・単位が表す世界共通の算数の特性のよさに気づかせる。
- ・日本の数字の読み方は、完全な十進法であるので、大変覚えやすく、九九にしても言いやすい。ロシア語のように10が先に来ている場合や、英語やドイツ語などのように11や12の特別な読み方がある場合を紹介し、読み方の構成の相違点について関心をもたせたい。

- ・各クラスの外国籍児童に自分の母語で数えてもらい、活躍の場をつくる。
- ・モンゴルの幼児・小学生向けの問題集から、計算問題のワークシートを作成する。そして、何を問われているか言葉がわからなくても、数字を見て問題を解くことにチャレンジさせたい。
- ・クラスにいる多くの外国籍児童の多くが、日本語を完全に理解せずに問題を解いているという現状を日本人児童に認識させて、そのがんばっている姿に気づかせたい。そして、算数の学習がわからずに困っている外国籍児童に対して、進んで教えていく態度を育てていきたい。

5 評価基準

観点	興味・関心・態度
評価規準	・中学校の数学の内容や和算、錯覚図形に関心をもち、取り組もうとしている。 ・クイズやパズルに積極的に取り組もうとしている。 ・外国の数字の読み方や筆算の仕方に興味をもち、体験しようとしている。
評価方法	ワークシート・発言・学習の様子

6 単元の構成(国際コース)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の国の数の読み方	世界の国で使われている数の読み方を知る。  <ガーナの読み方のVTR>	・教科書に紹介されている日本語も含めた8つの言語で、1から12までの数字の読み方をみんなで唱える。 ・自分の国の言語で数の唱え方を言える外国籍児童にミニ先生役になってもらう。(ブラジル・ペルー・トルコ・バングラデシュ・韓国・中国等) ・教科書にはないモンゴルやガーナの数字の読み方のVTRを見せる。 ・それぞれの国の数の唱え方、使われている読み方の共通性を話し合わせる。 ・九九を唱え、数の組成を確認する。
2 本時	世界の国の筆算	世界で使われている筆算の方法を知る。 ★引き算：タイ・スウェーデン・モンゴル・ドイツ ★わり算：韓国・ブラジル・アルゼンチン・フランス・モンゴル・インド	・引き算の筆算について、計算のきまりを話し合う。 ・わり算の筆算について、それぞれの国のやり方を話し合う。 ・使われている数字をもとに、計算の手順の共通性を探す。 ・モンゴルの問題集を解いてみる。
3	おつりの数え方	おつりの数え方に触れて、算数とその国の文化に触れる。	・実際に、外国の考え方で疑似買い物をしてみる。

7 授業事例の紹介

小単元名【 算数卒業旅行 国際コース 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月2日(金)第5限

(イ)実施会場 6年2組教室

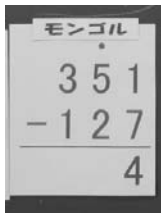
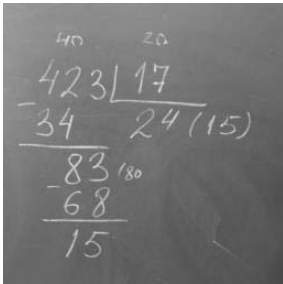
(ウ)本時の目標

外国の筆算のやり方を知り、算数の学習への興味・関心を高める。

(エ)指導のポイント

- ・外国の筆算に視点を与えて比べさせることは、算数をもつ共通点に気づかせるのに有効であったか。
- ・実際の外国の問題に触れさせたり、モンゴルの先生のVTRを見せたりしたことは、算数の学習への興味・関心を高めることに有効であったか。

(才) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
10	1. 既習事項の確認と本時のめあての作成。	・予習の日本の引き算の筆算を確認する。 ・本時のめあての確認をする。	一斉	・日本では、一の位から引けないときは隣の位から繰り下げてくることを確認し、他国の考え方と比べるときの視点にする。	
		世界の国の筆算の仕方を考えよう。			
15	2. いくつかの国の引き算の仕方にふれる。 「各国で発達した算数の計算の考え方に触れることで、それぞれの国の考え方や日本の考え方のよさがあることを知る。：授業づくりの視点【7】」	・351－127の筆算を比べる。 ・モンゴルの十の位にある「・」について考える。  ＜モンゴルの引き算のVTR＞  ＜ドイツの筆算のVTR＞ ・ドイツの筆算は、どのような計算のきまりを用いているかについて考える。	個別 ペア 一斉	・日本の筆算の仕方と似ている国から考えさせる。(タイ・スウェーデン・モンゴル) ・モンゴルの先生のVTRを見せる。 ・教科書の図を見てもわからない児童には、数字カードで補助説明をする。 ・引き算の性質「引かれる数と引く数に同じ数を足しても引いてもかわらない」を用いていることを確認する。	
15	3. いくつかの国のわり算の筆算の仕方にふれる。 「授業づくりの視点【7】」	・31÷4の筆算を比べる。 ・南米(ブラジル・アルゼンチン)の筆算は、どのような順番で書くかについて考える。 ・モンゴルの筆算について考える。  ＜モンゴルのわり算のVTR＞	個別 一斉 ペア 一斉	・日本の筆算に似ている国や、似ている考え方の国を探させる。 ・算数への興味・関心を高めるために、外国籍児童に自分の国の計算の仕方を紹介してもらう。 ・割られる数や商など使われている数字は同じであることに気付かせるために、色別の紙に数字を書く。 ・どこの国の考え方が似ているかを考えさせるために、モンゴルの先生のVTRを見せる。	関：外国の筆算に関することに興味をもち、体験したり、考えたりしようとしている。 (ノート、発言、態度)

				・予習の問題がモンゴルのわり算であったことを知らせ、問題文を読めなくても数字や絵で解けることに気付かせる。	
		まとめ：引き算には算数の性質がつかわれている。 わり算には、日本と同じ考え方でも書き方が違う国もある。			
5	4. 学習のまとめをする。	・学習の感想を書く。		・外国籍児童が日本語を読めなくても、算数の学習をがんばっていることに触れて、算数が世界の共通言語であることを意識させる。	

(2) 授業の振り返り

・第1時が終わった段階で、予習問題としてモンゴル語で書かれた問題を6年生に渡した。聞かれている問いがわからずに手を止めていたが、「これは、2年生の問題だよ」ということを伝えると、「えー」と反応しつつも、解いてみようとする気をだしていた。

・外国籍児童は、積極的に問題に取り組んでいた。普段から、すべての日本語の文章がわかるわけではなく、数字をみて何とか解いてみようという意欲が日本人児童より感じられた。もう一つ、ブラジルやペルーの割り算の記号がモンゴルと似ていて、解きやすかったことも考えられる。

・ブラジル国籍の児童のK君が、ブラジルの筆算のやり方を堂々と説明してくれた。普段、算数でそんなに活躍する児童ではなかったので、クラスの子たちも驚くとともに称賛の声をあげていた。説明した本人も大変うれしそうであった。

・「たてる」「わる」「引く」「おろす」といういつもの筆算の手順を思い出させると、どの児童にも共通点がわかりやすくなったのではないかと課題が残った。

・言葉がわからなくても頑張っている児童がいること、そして、「算数は世界の共通語」であるという自分の想いを、児童に伝えることができた。



＜グループで自分の考えを説明＞



＜ブラジルの計算を説明するK君＞

(3) 使用教材

・算数の教科書(東京書籍「新編新しい算数」6年)

・モンゴルで購入した小学校2年生用のワーク

教科書のページ①	教科書のページ②	モンゴルのワーク

(4) 参考資料等

- ・モンゴルで撮影した筆算のやり方のビデオ
- ・JICA の職員や本研修に参加した方々に協力していただいた海外の数字のビデオ（フランス語、モンゴル語、ガーナ語）

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

- ・今までの算数の授業では、ほとんど発言もなく、声さえ上げない児童が、第1時の「外国の数字を知ろう」のところで、積極的に自分の国の言葉で、1から12の読み方をミニ先生役として発表してくれた。担任の先生も驚いていた。
- ・ブラジル国籍の S さんと K 君はポルトガル語だけでなく、スペイン語の数字もミニ先生役として活躍してくれ、称賛された。
- ・本学年の児童は、ブラジル、ペルー、トルコ、バングラデシュ国籍の児童のほかに、片方の親が外国籍という児童も多い。その国は、中国、韓国、フィリピン、パラグアイなど多岐に渡る。授業の後も、「私もその国の言語で言えるよ。」などと話しかけてきてくれた。自分の国の言葉で知っていることを話したり、考えたりすることは誰でも誇らしいことである。そのことが児童の笑顔や活躍から伝わってきた。



＜ポルトガル語で数字を読むブラジル国籍児童（第1時）＞

＜先生方より＞

- ・本町の特色を生かした授業で、外国籍児童がこんなにも輝かしく見えたのは、大泉に来て初めてだった。外国籍児童にとって、活躍もできる授業だったと思うし、日本人にとっても外国の算数文化に触れ興味を広げることにつながったと思う。
- ・外国籍児童の多い本校では、いろいろな国の筆算に触れることは大変意義のあるものと思う。どの子どもたちも関心をもって授業に参加していたと感じた。また、モンゴルの筆算の仕方を実際に映像で見せたり、K君を活躍させながらブラジルのわり算の仕方を確認したりと素晴らしいと思った。



＜本時の授業のまとめの様子＞

＜児童の感想＞

第1時 数字の読み方についての感想	
1. 授業コース：数字の読み方についての感想 世界にはいろいろな国があるのに、書き方は一緒だとか、おどろきました。数字の読み方は、それぞれ違うんだって思いました。 2. 授業コース：数字の読み方についての感想 世界の数字の読み方、勉強して、おどろきました。数字の読み方は、それぞれ違うんだって思いました。 3. 授業コース：数字の読み方についての感想 ポルトガル語とスペイン語の数字の読み方が、おどろきました。数字の読み方は、それぞれ違うんだって思いました。	・世界にはいろいろな数字の読み方があったことが分かった。いろいろな国の読み方を知ることができてよかった。（多数） ・国の近いところどうしは、同じような読み方をすることもわかった。 ・数字は共通なのに、読み方が国によって違うのは不思議だなと思った。 ・みんなの前で、ポルトガル語とスペイン語をできた。（ブラジル国籍児童） ・どの国もいろいろな言語を使っていて大変だから、世界共通で同じ言語を使えばいいのにと思った。
第2時 世界の筆算についての感想	
・世界にはたくさんの筆算方法があったけど、書き方は違っていても考え方は一緒だと知って、びっくりした。もっと調べたいと思った。（多数） ・外国から転入してきた子の大変さと慣れるまでの難しさがわかった。 ・世界にはいろいろな筆算があることがわかった。まだまだ知らない筆算のやり方があると思うので後で調べたいと思った。 ・アジアとヨーロッパで筆算の仕方の違いがあるんだなあとと思った。 ・ブラジルの筆算が簡単だとおもった。（ブラジル国籍児童）	

- ・初めて見たとき、どうやって計算するのかわからなかったけど、勉強してみているいろいろな国の問題の解き方がわかってきた。わかってからは、筆算するのが楽しくなってきた。
- ・世界の筆算をやって難しいと思った。特にインド。(ブラジル国籍児童)
- ・たし算、かけ算をやっていないから知りたい。
- ・世界の計算をみてすごくむずかしいと思う。これからもっとがんばりたいです。(ブラジル国籍児童)
- ・日本にいる外国人は日本語がわからないけど、どうやって計算するかいっぱい勉強してがんばっているんだなあと思った。
- ・M 君や S さんは日本語を覚えるのが大変だろうなと思った。大泉町にはいろいろな国の人がいるので、いっぱい勉強したい。
- ・外国の筆算のやり方にとっても驚いた。家でお父さんたちに外国のやり方を教えたい。
- ・日本と同じやり方があった。改めて「算数は世界の共通語」という言葉に納得した。
- ・インドが難しい。幼稚園の時にインドの友達がいたので、スカイプで聞いてみようと思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣事前研修では、教科書の指導書を参考にして、本時の流れの案を作成。また、モンゴルでインタビューしたいことや動画に撮りたいことなどの案を考える。

派遣中には、新モンゴル学校での先生たちとの話し合いでインタビューできたほかに、新モンゴル学校の高校生にも同じ筆算を解いてもらった。高校生は、繰り上がりりの「 $\cdot$ 」を使っていなかったのもう少し詳しく調べたいと思った。そこで、118番学校での先生たちとの話し合いには時間的に出せなかったが、移動の合間に黒板に解いていただくことができ VTR に収めた。

さらに、現地で購入した算数の問題集を授業に取り入れたことは非常に効果的であったと考える。言葉がわからない中で、計算をする、問題を解くことの難しさを多くの日本人児童が感じてくれた。

課題としては、モンゴルの先生方に問題を解いてもらった紙の数字が小さくて、動画が少し見づかったのも、日本から教科書と同じ数字の問題を拡大印刷していき、もっといろいろな人々に解いてもらえばよかったと考える。また、タイチームの先生方にできればタイの計算方法をインタビューしていただけるとよかったが、その準備ができなかったことが悔やまれる。

PDCA サイクルにおけるチェックとしては、算数の宿題などの提出物の変化、また今後の授業内及び休み時間等に児童の学び合う姿が見られるかなどを継続して見守っていききたい。第3時に当たる授業を3月に予定しているので、そのときにも児童の学習態度の変化等を見ていく予定である。

アクションとして、国際理解教育の授業は、教師の個人的な思いで実施されることが多い。今回の授業は算数の年間指導計画に元々入っているものなので、今後も毎年この授業が実施されるように使用した VTR や写真などを整理して、他の先生が実践しやすいような教材を残していきたい。

10 教師海外研修に参加して

以前から6年生にこの国際コースを教えるたびに、「外国では、本当にこのような教え方をしているのだろうか。」という関心があった。教科書にモンゴルが紹介されていたので、今回のモンゴルへの海外研修は確認するのにまたとないチャンスであった。普通の旅行ではありえない、現地の先生方や児童・生徒との交流。実際にモンゴルの先生方に引き算と割り算の筆算について説明していただき、その時の動画と写真をこの授業で活用できたことがよかった。「先生、本当にモンゴルに行ってきたのですか？」と VTR に食い入る様に見ていた子どもたち。本物の素晴らしさにかなうものはないのかもしれない。

外国籍児童が多く、日々国際交流をしている状態の本校では、共生の良さと困難さが併存している。日頃の学習の場面で必ずしも外国籍児童が活躍しているとは言い難い。しかし、今回の授業で、この一年間日常会話も少ない外国籍児童が、クラスの子の前で堂々と発言してくれたり、学習に消極的と思われがちな児童が、みんなの前で自分の国の筆算の仕方を教えてくれたりと活躍をしてくれたことが何よりもうれしい。そして、それを称賛してくれた日本の児童達。自分たちもモンゴル語の問題を解こうとして、普段の外国籍児童の立場になることで、その大変さを想像することができた。

算数が楽しいという気持ちや自分に自信をもつことができた児童がいたことは、この研修に参加して授業を実践してきた成果であろう。そして、教師側の工夫次第で、外国籍児童に限らず、一人一人が輝けるような場を与えることが、それぞれの自信につながるのではないだろうか。今までの経験に胡坐をかかずに、今後も、教師として小さなことから工夫を積み重ねて、児童が自信をもてるような授業の研鑽を積んでいきたい。



MONGOLIA

学校名：新潟市立丸山小学校

氏名：脇坂 聡美

[担当教科：全教科]

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数：8時間
- 対象生徒：6年生
- 対象人数：45人

1 単元名

「丸山発世界の旅 ～私たちにできること～」

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・世界の多様な文化・生活を知り、共通点・相違点に気づき、世界への興味をもつ。
(進んで参加する態度)
- ・相手意識を持ち、相手のニーズに基づいて自分にできることを考え、実践することができる。
(未来像を予測して計画を立てる力)
- ・世界で国際協力をして活躍する日本人の仕事内容や思いを知り、その活動が人々に与える影響力を多面的に捉えることができる。(多面的・総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、世界の国々の文化や生活習慣について、日本との共通点や相違点、日本が世界に対して行う国際協力について考える学習活動を通して、相手の立場を尊重しつつ主体的に行動する態度を養うことをねらいとした。

本校では、画家 熊倉雄二氏を介してモンゴルにあるグルワントミル校と絵画交流を行っている。今年で15年目を迎えるこの活動を軸として、単元を展開していく。そこで、第1時では、絵画交流で送られてきたモンゴルの子供たちの絵を鑑賞し、モンゴルに興味・関心を持てるようにする。そして、子供たちから質問事項等を集め、現地で確かめてくることを伝える。その後、子供たちは、モンゴルの文化や生活習慣、モンゴルと日本とのつながりについて考える活動、国際協力について学習していく。また、実際に自分たちにできることとして、モンゴルへ送る絵画の作成を計画し、実施する。

単元を通して、他国の習慣や文化の中に「共通点を見つけること」、「相手意識を持つこと」、「行動を起こすこと」、「多面的に捉えること」の大切さに気付かせたい。

(2)児童生徒観

本校の6年生児童は、これまでの総合的な学習の時間において、キャリア教育として様々な職業の方から話を聞いて学ぶ学習を積み重ねてきた。新たな知識を取り入れたり、体験したりすることから、意欲的に知識を学び取ってきた。また、友達と関わり合って学ぶ場面では、互いの考えを認め合い、よりよいものをつくり上げようとする姿が見られる。

モンゴルのグルワントミル校との絵画交流には、6年生児童全員が参加した経験がある。しかし、子供たちのほとんどが、明確な相手意識を持たないまま、絵画作成にあたっていた。また、世界の文化や習慣について、興味を抱く子供たちは少なくないが、日本と他国との関わりや国際協力等については、知っている子供と知らない子供で偏りがある。

(3) 指導観

子供たちが地球市民の一員として生きていくで、国際理解という視点は必要不可欠である。自分とは異なる文化や考え方を受容し、相手の立場を踏まえた上で、主体的に考えを発信していく力を身に付けてほしい。

これまで、世界の国々について、その国の位置を地図で確かめたり、写真やグラフ等のデータで国の特徴を読み取ったりする学習に取り組んできた。しかし、子供たちにとって「世界」は漠然としたものであり、世界と自分たちとのつながりを実感できる学習には至っていない。

今回の単元では、子供たちが「見たい」「知りたい」と思ったものを中心に撮った写真や映像、実物を資料として使うことで、世界に興味を持ち、具体的に思い描くことができるようにする。さらに、子供たちの疑問や考えを中核として、授業を展開していくことで、主体的に思考する姿をねらう。

また、実際にモンゴルを訪れて感じた、「世界は人と人とでつながっている」ということを子供たちに実感させたい。そこで、研修を通して出会った人々の写真や映像を活用することで、相手意識を持てるように工夫していく。人々の想いや温度を感じ取れる教材を提示していきたい。

単元を通して、子供たちが新しい知識を意欲的に取り入れ、相手意識を持って行動を起こし、自身の考え方の変容や成長に気付くことができるようにしていきたい。

5 評価規準

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的、創造的、協同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	相手が必要としていることや欲していることを根拠として、相手意識を持った活動を計画し、実践している。	世界の習慣や文化、国際協力について、多面的に考えている。	他国の文化や生活の様子に関心を持ち、疑問に思ったことや気づいたことについて考えている。	相手意識を持ち、行動することの大切さを知り、世界と自分とのつながりについて考えたことをまとめている。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート 絵画	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国？	絵画交流でモンゴルから送られてきた絵から、分かったことや疑問に思ったことについて考える活動を通して、モンゴルに興味・関心をもつことができる。	・モンゴルの基本情報(位置、国旗、国土の広さ)を知る。 ・モンゴルの子供たちが描いた絵を見て、分かったことや疑問に思ったことを付箋に書き込み、グループで話し合う。 ・モンゴルについて、もっと知りたいことをワークシートに記入する。
2	モンゴルってどんな国	モンゴルで撮影された写真を多面的に読み取る活動を通して、日本との共通点を見つけることができる。	・(事前に子供たちから集めた質問事項を軸に、撮影した)モンゴルの写真を見て、日本との共通点を見つける。 ・日本との共通点を「似ている%」として、線グラフに表す。 ・学習の最後に、モンゴルの中学生在が日本語を流暢に話す映像を見る。
3	モンゴルと日本	モンゴルと日本のつながりについて、歴史的背景・モンゴルの子供たちの夢・日本人が日本語を教えているということを知る。	・子供達から出た「なぜ、あのモンゴル人の女の子は、日本語が上手なのか。」という疑問をもとに、日本とモンゴルのつながりを探っていく。 ・歴史的背景・モンゴルの子供たちの夢・日本人が日本語を教えているということを知る。

4	どんな絵を送ろう	相手意識を持ち、モンゴルに送る絵画作成の計画を立てることができる。	・グルワンタミル校のウヌルー先生達から子供たちへ向けたメッセージ映像を見る。 ・広島土砂災害の支援物資に関する写真（全国から届いた支援物資で体育館が溢れ返っているもの）から、「相手が必要としている支援を行う」という「要請支援」の考え方を知る。 ・モンゴルの子供たちを対象に行ったインタビュー資料をもとに、どのような絵画を作成するか計画を立てる。
5・6	絵画を作成しよう	計画に基づいて、絵画作成をすることができる。	・相手意識を持ち、絵画作成に取り組む。
			
7	国際協力とは	日本人がモンゴルで取り組む国際協力について、資料から国際協力の方法を読み取り、その支援が誰により影響を与えるかを考える学習活動を通して、日本の技術協力や支援の方法・必要性を捉えることができる。	・「国際協力」「JICA」などの用語を知る。 ・JICAの取組を知る。 ・国際協力を行う人の写真とその人のインタビュー資料から、モンゴルで国際協力に取り組む人々の「氏名」「仕事内容」を読み取り、さらに「その活動によって喜び、笑顔になる人々は誰か」ということについてグループで考える。 ・読み取った情報と考えたことを発表し、全体で共有する。
8	世界と私たち	単元の学習を振り返り、世界の人々と共生していくために大切なことについて考え、まとめている。	・以前、子供たちが画家 熊倉氏に対して、送った質問の回答を読み取り、熊倉氏の思いに触れる。 ・単元の学習を振り返り、世界の人々と共生していくために大切なことについて自分の考えをまとめる。

7 授業事例の紹介

小单元名【 国際協力とは 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 平成28年10月28日(金)第5限

(イ)実施会場 6年1組教室

(ウ)本時の目標

日本人がモンゴルで取り組む国際協力について、資料から国際協力の方法を読み取り、その支援が誰により影響を与えるかを考える学習活動を通して、日本の技術協力や支援の方法・必要性を捉えることができる。

(エ)指導のポイント

①国際協力の方法を積極的に探究させるために、グループごとに異なるインタビュー資料を読み取り、分かったことを全体で紹介するという学習活動を設定した。

②国際協力の取組によって、喜び、笑顔になる人々を複数の立場から考える活動を設定し、一つの事柄を多面的に考える姿をねらう。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	前時までの復習	①モンゴルで日本語を教えている日本人がいるということを確認する。	一斉	・前時までの学習内容を想起させる。	
展開 30分	学習課題をつかむ【1】	②国際協力という言葉を知る。		・「平和・安定・発展」という言葉に着目させる。	
	学習課題 国際協力には、どのような支援の方法があるか。				
	JICAの取り組みを学ぶ	③JICAの取組を知る。活動を大きく4つ(A～D)に分けて紹介する。	グループ	・③で紹介した人が行っているのはA～Dのどの活動にあたるかを考えさせる。 ・既習事項である「要請支援」という考え方をおさえる。	■資料から、国際協力の方法とその仕事の影響が誰により影響を与えるか考えることができる。(ワークシート)
	国際協力の具体を知り、その活動が人々に与える影響について考える【2】【3】【4】【7】	④資料(インタビュー資料と写真)から、国際協力をしている人とその仕事内容を読み取りまとめる。 また、その活動によって喜び、笑顔になる人は誰かということについて考える。 (具体的に2人以上挙げる。)		・活動が誰に影響を与えているのかということについて、多面的に考えさせるようにする。	
					
まとめ 10分	学習をまとめる	⑤各グループで読み取った国際協力をしている人の「氏名」と「仕事内容」、そして「その仕事は誰により影響を与えるか」について考えたことを全体で共有する。	一斉	・「その仕事は誰により影響を与えるか」については、そう考えた理由も説明するように助言する。	
		⑥学習をまとめる。 まとめ ・A～D などの方法がある。 ・国際協力は、世界の人々の笑顔につながっている。	個人		
	本時を振り返る【6】	⑦本時の学習を振り返り、ワークシートに記入する。			

(2) 授業の振り返り

【成果】

・インタビュー映像をそのまま使うのではなく、文章に起こしたことで、子供たちは情報を捉えやすかった

ようだ。各グループで、インタビュー資料に線を引きながら、何度も読み返している姿が見られた。

・活動している人の顔が分かる写真や、インタビューでの話を書き起こした文章という、具体的な資料を用いたことで、人のストーリーが感じられる学習となった。

・発表の場面において、子供たちから「(インタビュー資料で見つけた)活動をしている人の想いも発表していいですか。」という声があがった。写真とインタビュー資料によって相手意識が高まったことが、「国際協力を行う人の想いを伝える」という、子供たちの行動につながった。

・国際協力によって喜び、笑顔になる人を考えさせたことは、子供たちに多面的な思考を促す活動として効果的だった。

・グループでの話し合い、考えたことの発表などの言語活動が、活発に行われていた。

【課題】

・提示する写真をもう一枚増やすことで、さらにリアル感を増す。

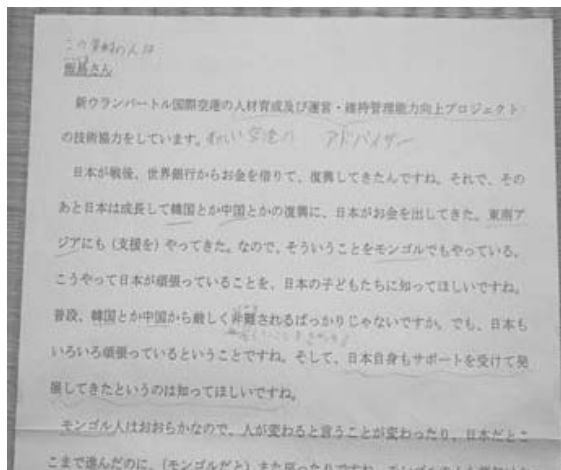
(例:「国際協力活動をしている写真」と「本人の写真」)

・それぞれの活動が、資料1のA～Dのどれに当たるかを考えさせる場面では、単に「この活動は、Aに当たる」という場合だけでなく、「この活動は、AでありBである」という場合もあるため、より深く考えさせるとよい。

(3) 使用教材

① ワークシート

② モンゴルで国際協力をしている方のインタビュー原稿 ③ モンゴルで国際協力をしている方の写真 (一部を抜粋したもの)



④ 「国際協力」、「JICA」という用語を説明する掲示物

⑤ 国際協力の主な4つの活動説明する掲示物

JICA の取り組み

- A 専門家がその国の人を教育したり、必要な道具を持っていき、さまざまな技術を伝えたりする。
- B 安心して生活できる国にするために、病院、学校、井戸、道路などを無償でつくったり、よりよい生活が送れるように道路や橋などを作るためにお金を貸したりする。
- C 大きな災害が起きたときに、被災地に助けに行ったり、物資を送ったりする。
- D NGO、自治体、大学などと一緒に国際協力活動をする。

(4) 参考資料等

・ JICA PROFILE (独立行政法人 国際協力機構)

・ 「持続可能な開発のための教育(ESD)」は これからの世界の合い言葉(国立教育政策研究所 教育課程研究センター)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

【単元全体について】

- ・国際協力ということを知ったけど、一人がしたこと何人もの笑顔がつかれると思いました。もっとたくさんの笑顔をつくれるように、ぼくたちもそういう活動をしたいです。
- ・国際協力は、困っている人にとっては、とても大切で笑顔になる取り組みだと思った
- ・初めて JICA という組織を知った。ぼくも、そういうこと(国際協力活動)をしている人がいたら、手伝おうと思った。
- ・日本自身もサポートを受けて発展してきたということがいいと思いました。理由は、日本だけではなく、世界の人々からの支援で今があるということだからです。これからは、他国の支援をしたいです。
- ・「大人になったら」ではなくて、今からできることはないかと考えて、したいです。

単元の始めには、「モンゴルに行ってみたいと思いました。」という感想に留まる子供たちも多くいたが、学習が進むに連れて、「なぜ、モンゴルの子供たちは日本に関するインタビュー結果をもとに、絵画を作成したところ、これまでとは違う作品が仕上がった。以下にその一例を紹介する。

【絵画交流について】

これまで、子供たちは「富士山、寿司、花火、朱鷺」などの日本を象徴するものをテーマに絵を描いてきた。しかし、本単元で「モンゴルの子供たちによる日本に関するインタビュー結果」をもとに、絵画を作成したところ、これまでとは違う作品が仕上がった。以下にその一例を紹介する。

(○作品のテーマ ・その絵にした理由)

- プール授業 ・モンゴルには海がなく、プール授業もない学校もあるから。
- 習字 ・モンゴルの人が「漢字は美しい」と言っていたから。
- クリスマス ・日本とモンゴルではプレゼントの内容が違うと思ったから。

また、「ウヌルーさんは、交流の絵を楽しみにしているそうなので、すごくいい絵をかきたいと思いました。」という記述や絵画作成の様子から、絵画作成における相手意識がより高まったことを実感した。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【Plan(計画)】 単元の学習計画を作成した。現地研修前に第1時を行い、事前に子供たちから質問を集めた。また、事前準備として、画家 熊倉雄二氏から絵画交流についての話を伺い、グルワンタミル校 ウヌルー先生と電話で連絡をとった。

【Do(実行)】 ねらいの達成に向かって、子供たちの興味・関心、疑問に思ったことを大切に授業を行った。子供たちが、主体的に考える姿を目指し、写真、映像、実物などの五感を使って感じられる資料を提示した。

【Check(評価)】 活動の様子や発言内容、ワークシートでの記述をもとに、思考の状況を確認した。提示する資料は、より具体的に場面を想像できるものが必要であった。また、子供たちの中に、「支援をしてあげる」という意識がある。「支え合う関係」であることを、より重視した授業づくりをする必要がある。

【Action(改善)】 単元の振り返り(第8時)では、場面がよくわかる写真、画家の直筆のアンケート用紙、現地の雑誌を提示することで資料にリアル感を持たせる工夫をした。世界は「支え合う関係」で成り立っていることについて理解を深めるために、今後も国際理解教育をあらゆる場面で継続的に実施していく。

10 教師海外研修に参加して

私が、国際理解教育の可能性を感じたエピソードを紹介したい。12月のある日、子供たちが係活動としてクリスマスツリーの作成に取り掛かっていた。そこで、係の子供に、どんな飾りにするかを尋ねると意外な答えが返ってきた。

「『世界への願いとそのためになさること』をみんなに書いてもらって貼ります。」

続けて、このテーマにした理由を「モンゴルのことやったから」と語った。私は、心から嬉しかった。国際理解教育が、子供たちの心にじんわりと効いていることを実感した瞬間であった。私は、国際理解教育が、大きな可能性をもつものであることを確信した。

私は、教師海外研修に参加して、「世界は人と人とつながっている」ということを強く実感した。そして、世界をつなぐ第一線で活躍している方々と出会い、私自身の目標がはっきりと見えてきたように思う。それは、「世界をつなぐ子供たちを育てる」ということである。近未来の国際社会を創造する子供たちを育てているという責任感と誇りをもち、国際理解教育に取り組んでいく。そして、自分自身が地球市民性を高められるよう研鑽を積んでいきたい。



MONGOLIA

学校名： 東京都立町田の丘学園

氏名： 大和田 章

[担当教科：生活単元]

- 実践教科等：美術、家庭科、生活単元
- 時間数： 約 40 時間
- 対象生徒： 中学部 2 年生
- 対象人数： 24 人

1 単元名 世界を知ろう

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界の多様性を学ぶ。(多面的、総合的に考える力)
- ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界と自分とはつながっていることを学ぶ。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

『特別支援学校学習指導要領解説』の社会には、「(6) 外国の様子や世界の出来事などに興味や関心をもつ。」とある。そして、「②「外国の様子」とは、外国の自然、気候、風土、人々の生活などを指す。例えば、熱帯、温帯、寒帯地方の人々の衣服、料理の種類、食事の習慣、住居の様子、あいさつの言葉など、そこに住む人々が暮らす生活の様子のことである。これらについて調べることは、外国の文化や習慣を理解し、ものの考え方の違いを考える基礎となる。ここでは、外国の人々の生活の様子を知ることを通して、国内だけでなく国外にまで視野を広げることができるようにすることが大切である。」とあるように、自分の生活圏のことのみにならず、外国の人々の生活を知ることによって視野を広げることの大切さが記述されている。同じく②には「最近では国際的な規模の催事も多くみられ、その際に、我が国をはじめ諸外国の国旗に触れることがあるので、地図などでその国名と位置を確認するなどして、我が国や外国の国旗に対する親しみがもてるようにすることが大切である。また、内容(5)の「地域の様子や社会の変化」とも関連させながら、多様な文化を尊重できる資質や態度を育成していくことが大切である。」と国名や国旗に親しむことの大切さ、多様な文化を尊重する資質や態度の育成についての記述もある。以上のことを鑑み、本単元では外国の文化を学ぶことで生徒たちが視野を広げ、多様な文化を尊重する資質や態度が育成されることを期待する。

(2)児童生徒観

本学年は男子 19 名、女子 5 名(うち重度重複学級の生徒男子 3 名)の計 24 名からなる。全生徒が特別支援学校小学部からの進級ではなく、町田市の特別支援学級からの生徒がいる。障害の種別は主障害は知的障害であるが、自閉症スペクトラム、情緒障害、ダウン症候群などがある生徒がいる。東京都の療育手帳は 2 度(重度)から 4 度(軽度)を取得している。

学習前に本学年にモンゴルのことを質問してみた。モンゴルという国の名前を知っている生徒が 1 名だけで、国旗、地図上の位置を知っている生徒は一人もいなかった。また、朝青龍や白鵬について知っているかどうか質問してみたところ、知っている生徒は一人もいなかった。このように本学年の生徒

にとってモンゴルは全く未知の国になる。全く未知の国のモンゴルを学ぶことで、視野を広げ、異文化を受け入れる素地ができることを期待する。

(3) 指導観

本学年は、国語・数学は学習能力別に授業をするが、生活単元、美術、家庭科は一つのグループとして授業をする。児童生徒観で記述したが、療育手帳は2度から4度という認識の幅が広いグループで授業をすることになる。開発教育・国際理解教育の指導形式は大きく二つに分けることができる。体験型と認識型である。体験型とは、五感で感じる(見る、聞く、匂う、味わう、触れる)、やってみる、参加する、交流するなどである。認識型とは、気づく、発見する、分かる、納得する、実感する、共感するなどである。本学年は軽度から重度と発達段階の幅が広いグループであるので、体験型を中心に授業をすることになる。

5 評価基準

観点	文化的多様性についての知識・理解	相互依存についての知識・理解	寛容・共感についての関心・意欲態度
評価規準	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、文化の多様性を知る。	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、外国と自分とのつながりを知る。	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、異なる文化を受け入れる。
評価方法	授業への参加態度・発言	授業への参加態度・発言	授業への参加態度・発言

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	(生活単元)モンゴルの紹介	日本とモンゴルの地図上の位置を知る。日本の相撲、モンゴルの相撲、モンゴルのお茶を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。日本の相撲の紹介とモンゴル相撲の体験。モンゴルのお菓子とお茶を飲食する体験。
2	(美術)モンゴリアンブルーをつくる	日本の空とモンゴルの空をとおして文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。授業で喫茶店を開くときの内装を製作する。
3	(美術)ゲルをつくる	モンゴルの住居のゲルを通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。授業で喫茶店を開くときの内装を製作する。
4	(生活単元)モンゴル茶の提供	喫茶店にいらしたお客さんにモンゴルのお茶を提供することで、モンゴルの食文化について理解してもらう。	授業で喫茶店をしたときに、お客さんにモンゴル茶を提供する。 お店屋さんの本番までに、準備の授業でモンゴル茶の提供は7回ほどしている。
5	(生活単元)モンゴル劇	モンゴル劇を創る過程でモンゴルの生活を知る。文化祭にいらしたお客さんにモンゴルの様子を伝えることで、モンゴルの生活を理解してもらう。	モンゴル劇を創る。文化祭でモンゴル劇をする。 文化祭本番までに20回余り練習している。 この授業だけは一斉授業ではなく、モンゴル劇を演じる7人のグループの授業である。
6	(音楽)モンゴルの音楽	モンゴルと日本の音楽の演奏を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。馬頭琴と三味線の生演奏を聴く。
7	(家庭)ホーショーローの調理	モンゴルと日本の料理を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。ホーショーローを作って食べる。餃子を作って食べる。

8	(生活単元)まとめの授業	モンゴルと日本について学ぶことで文化の多様性を知る。	これまでの授業で勉強してきたことを振り返る。
---	--------------	----------------------------	------------------------

7 授業事例の紹介

小単元名【 モンゴルのまとめ 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 1月13日(金)第4限

(イ)実施会場 2年5組教室

(ウ)本時の目標

・日本と異なる国があることを知る。

(エ)指導のポイント

・授業に使用した教材、写真などで、今までの授業を振り返る。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
13:10	・日本とモンゴルの国旗【4】【6】 ・地図上の位置【4】【6】 ・日本とモンゴルの相撲【4】【6】 ・日本とモンゴルのお茶【4】【6】 ・日本とモンゴルの空【2】【6】 ・日本とモンゴルの住居【4】【6】 ・騎馬民族とゲルとモンゴル相撲(文化祭)【4】【6】 ・馬頭琴と三味線【4】【6】 ・餃子とホーショーロー【4】【6】	・日本とモンゴルの国旗を確認する。 ・地図で日本とモンゴルの位置を確認する。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの相撲の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルのお茶の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの空の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの住居の判別をする。 ・写真を見ながら文化祭を振り返り、モンゴル文化を判別する。 ・写真、映像を見ながら馬頭琴と三味線を判別する。 ・写真を見ながら餃子とホーショーローを判別する。	学年全体	・今までの授業が思い起こされるように、授業の様子を写した写真を使用する。 ・授業で使用した同じ教材を使用して、勉強したことを思いお越しやすくする。 ・生徒の積極性を引き出すために、間違えてもよい雰囲気をつくる。	(評価規準) モンゴルの生活・習慣を体験することをおして、異なる文化を受け入れる。 モンゴルの生活・習慣を体験することをおして、外国と自分とのつながりを知る。 モンゴルの生活・習慣を体験することをおして、異なる文化を受け入れる。 (評価方法) 授業への参加態度・発言
14:00					

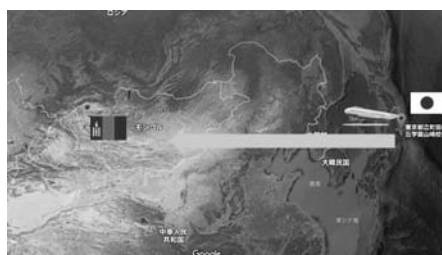
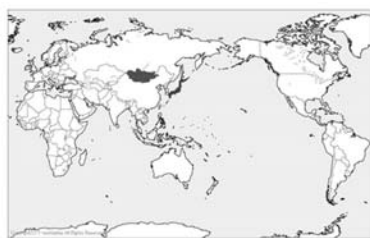
(2) 授業の振り返り

今回の授業は、今までしてきたモンゴルの授業の総復習をした。授業は体験型授業をしてきたので、今回が初めての座学となった。特別支援学校の生徒は映像や音楽を理解することは得意であるが、文字のみ、話し言葉のみの説明を理解することは得意ではない生徒が多い。そこで、できる限り、過去の授業に使用した映像、音楽、そして記録写真などを使いながら授業をした。

改善点としてはもっと細かく発達段階別に発問を用意できたらよかったと考える。

(3) 使用教材

もんごる



すもう(相撲)



左から モンゴルの地図上の確認。グーグルマップで学校からモンゴルに行く。日本とモンゴルの相撲。

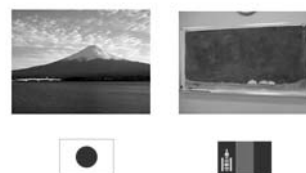
いえ(家) げる(ゲル)



しゃみせん(三味線) ばとうきん(馬頭琴)



そら(空) もんごりあんぶるー



左から 日本とモンゴルの家、三味線と馬頭琴、日本とモンゴルの空

(4) 参考資料等

- ・日本国際理解教育学会(2010)『グローバル時代の国際理解教育』明石書店。
- ・国立教育政策研究所(2014)「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7」,
<https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h25/2_1_allb.pdf>(2017年1月9日アクセス)
- ・文部科学省(2008)「特別支援学校学習指導要領解説」,
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1278527.htm>(2017年1月9日アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒たちがどのぐらいモンゴルという国を日本とは異なる国という理解をしたかを測ることは難しい。しかし、日常生活とは異なる体験をしたことで、異文化を受け入れる素地はできたのではないかと考える。また、日本とモンゴルをはっきり異なる国であると理解した生徒もいる。その生徒たちが、今後はモンゴルだけではなく、他の国にも関心を広げてくれことを期待している。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

「計画」発達段階の幅が広い生徒たちが対象となるので、体験型の授業を中心に計画した。
「実行」座学は可能な限り少なくして、体験型の授業を実行した。
「評価」計画通り実行できた。ただし、もっと準備期間があれば、より発達段階に応じた授業もできただろうし、体験型と認識型を合わせた授業ができたかもしれない。
「改善」私は、知的障害中学部においては、今回初めて開発教育・国際理解教育の授業をした。この経験を生かし、より発達段階に応じた授業、そして体験型だけではなく、認識型の授業ができるようにしたい。

10 教師海外研修に参加して

開発教育がめざすものは何であろうか。開発教育協会は「共に生きることのできる公正な地球社会の

実現」(下線部は筆者)と述べている。そして、国際理解教育については小学館の「教育基本用語」に「世界の諸国民が国を越えて理解しあい、お互いに人間として尊厳と信頼をもって協力することによって、世界の平和を実現することを理念とする教育」(下線部は筆者)と記述されている。

私は開発課題とされている、人権、環境、平和、開発について考えることも大切であるが、それと同様に多文化共生についても考えることも大切であるとする。

もし相手国の開発課題だけ考えていたら、それは相手国の立場を考えない一方的な支援になりかねない。多文化共生の立場から、どうしたら相手国の立場になることができるかを考えながら、相手国の開発課題を考えることが大切である。もし、相手国の立場を考えず、日本の立場から、日本の価値観から援助を考えたら、それは相手国にとって大きなお世話になりかねないだろう。

私は、多文化共生のことを考えつつ、開発課題を考えることができる児童・生徒になって欲しいという願いをもちながら授業をしていきたい。

学校名:新島村立式根島中学校

氏名: 高田 裕行

● 実践教科等:社会科

● 時間数 :7時間

● 対象生徒:小学6年から中学3年

● 対象人数: 16人

THAILAND [担当教科: 社会科]

1 単元名

「水」から考える国際協力！

2 単元の目標

- (1) 日本と世界各国が相互依存の関係にあることを理解すると共に、国際社会の中で日本が果たす役割について自覚することができる。【つながりを尊重する態度】
- (2) 国際社会の課題や問題について参加型・体験型の学習を通し、当事者意識を高めると共にJICA研修員や青年海外協力隊経験者の体験談や生き方に触れる中で自らの行動に活かすことができる。【進んで参加する態度】
- (3) 世界の諸問題と式根島における課題を分析・検討し、共通点や相違点を把握することで持続可能な社会の形成に向けて政策を立案することができる。【未来像を予測して計画を立てる力】
- (4) 国際協力の意義や国際理解を深めると共にコミュニティの問題を解決するに当たっての住民の意思や現地の文化、風習等を理解することの大切さを理解することができる。【他者と協力する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1. 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る

- ① 社会科の授業では、論理的かつ科学的に考察できるよう「なぜ」の問いに基づいて授業を展開してきた。本単元においては特に「当事者」として「世界」の問題にアプローチできるように身近な事例(ワーク)や「なぜ」の問いを追求したくなるような教材を用意した。

2. 子供の多様な考えを引き出す

- ① 実社会においては、同年齢集団のみで話し合いを行うということは少ない。異文化や異年齢集団の中で「多様な考え」に触れ、問題を解決していくスキルを身につけるため、本単元では小学校6年生から中学校3年生での合同開催とした。さらに JICA 出前講座を実施することで外国の方に意見や質問をする機会を設けた。

3. 考えを深めるために対話のある活動を導入する

- ① 既習事項を活用しながら、仮説を考えたり、検証したりし、問いを解決させる。
- ② グループ活動を通し、生徒が協力して主体的に学べる場を設定する。

4. 考えるための教材を見極めて提供する

- ① 授業のねらいを達成するためのワークや教材を使用する。本単元では主にフォトランゲージを活用し、写真から読み解くという状況を多く設定することで生徒の内発的動機付けを喚起したい。
- ② 体験型・参加型の教材を使う。例えば1時限目では相互依存度神経衰弱ゲームを通して日本と世界の関わりを実感させたり、2時限目では「水」「スポーツドリンク」「OS1」を飲み比べる活動を通して問いに迫っていくことで日本と世界のつながりを実感させたい。

5. すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する

- ① 基本的には教師は発問や活動のヒントを与えるだけで、生徒が自主的に「授業を作っていく」という状況にしている。自分で考え、自分で学ぶため、説明は短くしていく。

6. 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

- ① 本単元では、MQ に対する仮説と授業後の感想や意見を比較することで、生徒の認識がどのように変化しているのか読み取っていく。また次の授業でそれぞれの生徒の意見や考えに触れる機会を意図的に作ることで振り返りを自覚させたい。

7. 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

- ① 生徒が発言しやすい雰囲気や意見を尊重される場にするために本単元ではワールドカフェの手法を用いながら授業を展開していく。また、多様性を尊重しながら授業をしていく。

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は、「水」を切り口に国際協力の在り方や世界の現状を生徒と考えていく構成になっている。例えば、本単元の2時限にあたる「コップの水から考える」では、発熱や脱水症状を防ぐ役割があり商品化されているOS1を教材として用いる。OS1といえば所ジョージのCMで良く放送されていることから生徒の認知も高い。そんなOS1が1杯5円と安価に作れるにもかかわらず、途上国ではなかなか普及せず脱水症状により亡くなる人数も少なくない。この「5円なのに普及しない」それが「なぜ」なのか思考させる過程を通して国際協力が簡単ではないということや地球市民としてどう向き合っていくか「当事者意識」に重点を置いて授業を進めていきたい。また日本と世界各国が相互依存関係にあることを神経衰弱ゲームから実感したり、4、5時限目で実施するJICA出前講座でのJICA研修員や青年海外協力隊員の話から地球市民としての生き方や国際協力の意義を理解させたい。

(2)児童生徒観

社会科授業では、生徒がこれから生きる社会生活の中で直面するだろう様々な問題を取り上げ、それらを論理的かつ科学的に考察できるよう「なぜ」の問いに基づいて授業を展開してきた。普段は明るく元気な生徒であるが、大人数の大人に囲まれると消極的になってしまう時があるので、指名やグループ活動を通し、参加型・体験型の授業を構成し主体的に学ぶ事ができるようにしたい。また、思考を伴う問題に差し掛かった時、班での意見交換や教師からのヒントをもとに、生徒が多様な考え方や意見に触れられるようにする。

(3)指導観

第5章「地球社会と私たち」は国際社会における我が国の役割について考えさせると共に、人類の一員としてよりよい社会を築いていくために解決しなければならない様々な課題について探求させ、自分の考えをまとめさせることを主なねらいとしている。この単元は学習指導要領(4)私たちと国際社会の諸課題の(イ)「より良い社会」に当たる部分であり、持続可能な社会の形成という観点から課題を設けて探究し、生徒が様々な社会的問題を多面的・多角的に考察し、地球市民の一員として日常生活や身近な事例を通し、対立と合意・効率と公正など多様な側面から世界の課題と現状、論点を把握し、自己の問題として主体的に考え、判断し、実践できる力を育成したいと考えている。

5 評価基準

観点	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
評価規準	よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を意欲的に探求している。また、持続可能な社会の形成に対する関心が高まっている。	身近な地域の生活や我が国の取り組みとの関係性に着目し、持続可能な社会を形成するために解決すべき課題を見いだしている。	持続可能な社会を形成するために解決すべき課題に関する資料を様々な情報手段を活用して収集している。また課題の探求に役立つ情報を適切に選択して、読み取りたり図表などにまとめたりしている。	①世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会などが持続可能な社会の形成の基礎となることを理解し、その知識を身に付けている。 ②
評価方法	ワークシートの記述、レポート、プレゼン発表			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界とつながる日本	○日本と世界の国々の相互依存関係について理解する。	●相互依存度神経衰弱カードを活用し、身近な生活で使用しているものが世界の様々な国と関連していることを体験的に学ばせる。また新興国の台頭と南北問題などにも触れながら国際協力の意義や世界と日本との関わりを身近に考えさせたい。
2	コップの水から考える	○国際協力の難しさを実感すると共にODAの使用方法について自分の意見を発表することができる。	●[水]「ポカリスエット」「OS1」を実際に試飲させる。その中でOS1が発熱や脱水症状を防ぐ役割があり商品化されていることも理解する。このOS1は一杯5円で作ることができるが、世界では普及せず多くの人間が脱水症状等で亡くなっている。なぜ1杯5円で作れ

			る物が普及しないのかその原因を追及する過程で国際協力の難しさを実感させたい。またODAについても理解し、日本の国際協力活動を経済面から考えさせていきたい。
3	トイレの水、あなたは飲めますか？ (本時)	○国際協力が資金協力だけでなく技術援助による役割があることを JICA の活動から理解する。	●途上国では多くの水問題を抱えている。その中でも技術的な要因で飲食用の水と排出用の水(トイレ)の水が分水できず、感染症などの問題を引き起こしていることを、フォトランゲージを活用し、追求していく。その中で「国際協力が資金援助だけでいいのか？」という疑問を投げかけ、JICA の活動を紹介する。日本人が途上国で懸命に活動する姿に国際協力の意義を理解させたい。
4・5	JICA 出前講座	○世界の同世代の子供たちの姿を理解する。 ○国際協力の意義を理解する。	●JICA 研修員による出前講座を実施する。JICA の活動について現場での経験を研修員(カンボジア・ベナン)の二人が講義する。 ●教育や生活、観光、産業など多方面の分野に触れながら実施する。
6	国際連合の仕組みと役割	○国際連合の仕組みと役割について理解する。	●国際連合の役割について理解すると共に地球規模の課題に対してどこの国際機関が主に何を担当しているのか、さらには問題解決に向けた事案決定方法はどのように定められているのか理解させる。
7	ケーキを分けよう	○国際的な課題に対し、地球市民としてどのように解決にむかっていくのかを考える過程を通して、その問題が「自己の問題」として考え意見を発表することができる。	●ホールケーキを分けるという活動を通して形式的平等と実質的平等について学ぶ。食料や教育、エネルギー資源を事例としてそれらが平等に配分されない理由を考え、自分が「国連職員」になったらという設定で、ダイヤモンドランキングを作成する。当事者意識を持って取り組ませることで国際協力の意義と難しさを再度実感させたい。

7 授業事例の紹介

小单元名【 トイレの水、あなたは飲めますか？ 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月2日(金) 第3限

(イ)実施会場 式根島中学校 教室

(ウ)本時の目標

- ・「地球市民(当事者)」として世界が抱える「水」の問題の深刻さを理解するとともに、その問題の解決に向けて自分の意見や考えを発表することができる。 【進んで参加する態度】

(エ)指導のポイント

本時では、「水」を切り口として、その原因と開発途上国の現状を理解する過程を通して、「国際協力の意義」について迫っていきたい。生徒が「当事者意識」をもって主体的に授業に参加していけるよう本授業では、課題探求型の問いを設定した。課題を探究する過程で特にフォトランゲージの手法を活用し、課題解決に関係するであろう写真を自分で選ばせることでより深く考えられるように工夫した。また、JICA の国際協力活動を紹介し、国際社会の中での日本の役割や意義を同時に考えさせ、次回の JICA 出前講座での研修員の講座がより生徒にとって当事者意識を育ませる布石になるように生徒の多様な考えを引き出していききたい。

(オ)本時の展開【 】は「3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点」

過程時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入		○課題「トイレの事件簿」		●課題探求型の問いを設定し、仮説を考えさせる。 ●ホワイトボードに20枚近くの水に関する写真を貼る。生徒は自席からホワイトボードに写真を選びに行く。選べる写真は1枚のみとする。 ●普段のトイレでの自分の行動を振り返ってもらう。 ●ワークが困難な班に対してはiPadを使って自分で「トイレ・水・感染症」で調べさせる。 ●国の経済レベルが上がっているという点に着目させたい。人口の増加と技術整備が追いつかず、飲料などに使う生活用水の水源を汚染と切り離すことができずにいることを理解させたい。	
	トイレの事件簿	T:なぜA国でこのような事件が起こっているのだろう？ S:水が汚いから。手が洗えないから。便座が汚い。 T:手が洗えない、水が汚いだけで簡単に感染症になるだろうか？ S:そんな簡単にはならない。 T:では、どのような状態なら感染症になる？ S:汚染された水が体内に取り込まれた時、健康被害を起こす。	班活動		
		MQ:なぜ世界では、安全な水が普及しないのだろうか？			
展開	世界の水事情	○「安全な水」 T:世界には安全な水を得られない人がどれくらいいるのだろうか？ S:たくさんいる。健康被害や生産活動に影響を及ぼしていると考えられる。 T:どのような国に多いかな？ S:アフリカに多い。 T:地図ではアフリカに集中しているが、ブラジルやインドなど近年経済発展をしている国も安全な水を得られていない。ところで、日本はどのような支援をしていたか覚えている？ S:ODA、政府開発援助。 T:そうですね。でもトイレの事件のような問題を解決する場合はお金の援助だけで十分だろうか？	一斉	●衛生的なトイレが使えない人は世界に26億人いることや安全な水とトイレがあれば予防できる下痢のために全世界で毎年180万人が死亡し、子供の死因の第二位であることを理解させたい。 ●世界地図を提示する。 ●アフリカだけでなく近年経済成長を遂げている国々も「安全な水」が十分に得られていないことを理解させる。 ●日本はなぜ安全な水を手に入れられているか、世界ではなぜ安全な水を手に入れられない国があるのか理解させる。 ●上下水道の技術力に気づかせる。	
		SQ1:国際協力は資金援助だけでいいのだろうか？			

		S:よくない。 S:技術援助も必要だ。	一斉		
	JICAの 水支援	T:この記事から読み取れることは何だろう？ S:多くの日本人が日本の上下水道を世界に普及させていること、131カ国もの国に支援している。 T:支援している組織はどこ？ S:JICA。 T:では、最後に日本の技術力を確認して終わしましょう。今から日本の水とタイの水を見せます。どちらが日本の水か答えは明白ですね。	一斉	● JICAのmundiの記事を配布する。 ● JICAの概要を説明する。 ● 日本とタイの水を提示する。	
まとめ	本時の まとめ	○水に対する認識の変化とJICAの取り組みについて感想を書く。	一斉	● MAを書く。また本時の学び・感想をワークシートに記入する。 ● MQの仮説とまとめの記述を比較することで生徒の認識の変容を読み取る。【進んで参加する態度】	【評価】 「当事者」として水問題の解決に向けて自分の意見を発表することができる。

(2) 授業の振り返り

①よかった点

海外研修で得た「現地での水」を実物教材として使用したり、トイレを切り口に授業を構成したことで身近な問題から当事者意識を高める授業を実施できた。

②改善すべき点

世界の問題を考え、理解を実感に変えるためにJICAや日本人学校、インターナショナルスクールとも連携を図り、「多様性」を肌で感じれる授業を展開することでさらに現実社会に近づけたい。

(3) 使用教材(パワーポイントのスライドを一部 抜粋)



課題「トイレの事件簿」

A国は近年、人口が増加し経済的にも発展してきました。そんなA国ですが、最近、原因不明の感染症で多くの方が亡くなっているそうです。A国に住む住民は皆「トイレ」を指差し「あれが原因だ」と言います。さて何が原因なのでしょう。後ろにある写真を手掛かりとし、事件を解明しなさい。

MQ:なぜ世界では、安全な水[トイレ]が普及しないのだろう？



(4) 参考資料等

- ・『水から広がる学び』開発教育教会 (2014)
- ・『mundi-特集水道日本、世界へ』 JICA (2016)
- ・『国際理解教育実践ハンドブック』 埼玉県総合教育センター 監、廣済堂 (2013)
- ・『JICAの仕事』 独立行政法人 国際協力機構 広報室(2014)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

授業前に本校生徒の国際理解についての知識や認識がどの程度のものなのか把握するためにアンケートを実施した。アンケートの最後に「国際協力について知っていることを書きなさい」という項目を設けた。そして全授業が終了した後に再び「国際協力について今あなたが思う事を述べなさい」という問いを設け意見を述べさせた。ここでは、2名の生徒の授業前と授業後の認識の変容を紹介したい。【Aさんの場合】

授業前	授業後
問:国際協力について知っていることを書きなさい	問:国際協力についてあなたが思う事を書きなさい
ユニセフ募金 青年海外協力隊	私たちが当たり前に飲んでいる水は途上国では安全ではないということJICAの方のお話を聞いて驚きました。これからは私たちができることを考え将来なにか困っている人のために役立てたいと思います。(中略)

【Bくんの場合】

授業前	授業後
問:国際協力について知っていることを書きなさい	問:国際協力についてあなたが思う事を書きなさい
ユニセフ 青年海外協力隊 物資支援をしたり、教育をしている	国際協力は募金などの支援だけでなく物資支援や教育のための支援が大事だと思いました。戦後、日本が外国に様々な支援をもらったことに対して次は日本がその恩を返していく番だと思いました。世界に目を向けることが大切だと思いました。(中略)

二人の生徒の授業前と授業後の国際協力に対する認識の変容は明らかである。本校の生徒数は13人であるが、ほとんどの生徒が上記2名の生徒と同じように授業前は国際協力に対し「青年海外協力隊」や「ユニセフ」といった単語だけの知識しかもっていなかったものが、授業後は世界の現状を自分で分析し自己の問題として捉えることができています。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 授業プランと(PLAN)

- ・国際協力の意義や必要性について自覚する。また日本と世界が相互依存の関係にあることを通して自己の問題として世界の問題を自覚する。
- ・教室の中に様々な「多様性」を作り出し、相手の価値観や生き方を受容しながら国際協力を行う上で重要な観点、支援の在り方を学ぶ。

(2) 成果と課題(DO～CHECK)

- ・上記に示した生徒の変容からも読み取れるよう国際協力に対する理解は深まった。また一方的な支援だけでなく、パートナーとしての関係づくりに言及する生徒も多く国際協力への見方も広まった。
- ・当事者の立場に立って考えることができた生徒もいる一方で、理解が実感に発展しない生徒もいた。

(3) 課題の改善策(ACTION)

- ・今後は「理解」が「実感」に確実に変容し、少しでも現実社会の状況に近づけるために日本人学校やJICA等の関係機関と連携し、例えば外国人と生徒を同じグループにするなど共同授業の実施を提案し、新たな「多様性」を取り入れることができる授業にしていきたい。

10 教師海外研修に参加して

「百聞は一見に如かず」ということは、このことであると痛感した。今回の研修を通して自分の目で確かめた現実を、教科書では語れない真実を伝えていくことが必要だということを実感できた。また、変化が激しく多様な価値観や考え方が混在している今の時代だからこそ、教師は常に世界に目を開いて学び続けなければいけないことも再認識することができた。事前研修から事後研修に至るまでここまで満たされる研修ははじめてであった。この経験は「誰もがすることではない」ことを自覚し、またここからが「教師」としての新たなスタートとして学びを続けていきたい。

(3)指導観

国際理解についての学習を集中的に行うことに対して初めての生徒が多いので、クイズやフォトランゲージを多く活用し、身近に感じられるように工夫して指導していく。また、本校では3年次に国際理解教育を総合的学習の時間に行っている。今後も継続して学ぶことができるよう、国際理解と国際協力についての基礎知識や考え方を身につけさせるようにしていく。

授業では、班活動を多く取り入れ、自分自身の考えを表現するだけでなく、他の生徒の意見を聞き交換するなかで、考えを深められるようにしていく。また、感想用紙やワークシートを使用し、記入することで次の内容に興味・関心をつなげられるようにする。

5 評価基準

【総合的な学習の時間】

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学びやものの考え方	主体的・創造的・協同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	・タイを通して国際社会が抱えている問題を知り、どのような手段で解決することができるのか考えることができる。	・世界には様々な文化があり、お互いを認め合い、尊重しながら暮らしていることを理解することができる。	・タイでのボランティア活動の様子を通して、協力して取り組む態度を身に付けることができる。	・タイ生活する人や活躍する人たちの様子を通して、現在や将来の自分自身の生き方の参考にすることができる。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容			

【学級活動】

観点	集団活動や生活への関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての思考・判断・実践	集団活動や生活についての知識・理解
評価規準	・学校で勉強できなくなる例を通して、普段の生活への関心を持つことができる。	・地域に住む一員として、生活向上にはどのような方法があるのか考えることができる。	・スラムの生活を例に挙げ、世界には様々な環境の中で生活している人々がいることを理解する。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容		

【道徳】

観点	道徳的実践意欲・態度	道徳的心情	道徳的判断力
評価規準	・タイを通し、世界の多様な文化や習慣について興味・関心を持つことができる。 ・相互依存関係の強さを認識し、国際協力の第一歩を実践するために必要な態度を身につけることができる。	・世界で活躍するさまざまな立場の人たちの気持ちを資料から読み取ることができる。 ・問題解決のための方策を考え、自分の言葉でまとめ、他者に伝えるように発表することができる。	・国際協力をする上で、必要な支援や協力内容を正しく判断することができる。
評価方法	学習時の取り組みの様子・発表・発言・ワークシートの記述、感想の内容		

6 単元の構成

【総合的な学習の時間】(学年全体)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	タイってどんな国？	・タイに関する写真や動画を通して、タイという国を知る。	・タイに関するクイズ(あいさつ・習慣・文化)に答え、話を聞く中で日本との違いや共通点を知る。 ・写真やインタビューを見聞きし、タイから見た日本の様子について知る。
2	JICAが行っている国際協力について	・国際協力の必要性やJICAが行っている国際協	・開発途上国の現状についてクイズを通して知る。

	て知ろう	力の例を知る。	・食事のメニューを用いて、日本と外国の相互依存関係について理解する。 ・写真やインタビューを通して、タイでのJICAの活動の内容について知り、国際協力について興味を持てるようにする。
--	------	---------	--

【学活】(1クラスのみ)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	スラムについて知ろう	・バンコクにある、クロントーイスラムの写真を通し、スラムが抱える課題や現状を理解する。	・写真を用いてスラムの様子やスラムが抱えている課題を知る。 ・スラムが抱えている課題や問題を解決する方法や手立てはどのようなものがあるか考える。
2	学校に行けないとどうなるの？	・スラムの子どもたちの中には中退者が多いという厳しい教育事情を知る ・子どもたちが学校に行けない原因を考える	・スラムの課題の1つに中退者が多いことが挙げられていたことを振り返る。 ・学校に行けないことによってどのような問題や課題が生まれるかを班でのカードの並び変えによって読み取る。 ・負の連鎖を断ち切ることができるか、できるのであれば、どのような方法があるのか考える。
3	文字が読めないってどうということ？	・学校に通えないことで生じる、読み書きができない感覚を体験する。	・読み書きができないことで生じる不便さや気持ちはどんなものか、ゲームを通して感じ考える。

【道徳】(1クラスのみ)

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	プラティーブさんの生き方から学ぼう	・クロントーイスラム出身のプラティーブさんの生き方を通し、私たちにできることを考える。	・スラムの課題を受け止め、改善させようとするプラティーブさんの取り組みの内容から、更なるスラムでの生活の向上につなげるためにはどのようなことがあるか考える。 ・私たちはさまざまな社会集団に属している一員であることを自覚させ、お互いに協力することの大切さを理解する。

7 授業事例の紹介

小単元名【プラティーブさんの生き方から学ぼう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月8日(火)第6限 道徳

(イ)実施会場 1年4組教室

(ウ)本時の目標 C 主として集団や社会との関わりに関すること (社会参画・公共の精神)

①よりよい社会の実現のために活動したプラティーブさんの生き方を知り、社会と関わることの大切さを理解する。(道徳的心情)

②スラムでの生活を向上させるための方法を考える中で、自他ともに協力して社会と関わろうとする態度を養う。(道徳的实践意欲と態度)

(エ)指導のポイント ①スラムの課題解決の案については2つとし、前回の授業で学んだ内容を生かしながら考えられるようにする。

②身の回りの社会に対して積極的に関わることの大切さを伝えられるようにしていく。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	1 スラムの生活について振り返らせる。	・スラムの様子について復習する。 [発問]「スラムはどのような場所だったか」 →ゴミがたくさんある →道路がせまい →線路の近くに家がある	一斉	・スラムの写真を提示し、前回の内容と結び付けられるようにする。	・前時に学習したスラムの内容を振り返り、学習をさらに深めようとしているか。 (関心)
展開 ① 10分	2 ブラティーブさんの生き方を読み、社会とかわるごとの大切さについて関心を高めさせる	・ブラティーブさんの生き方をまとめた話を読む。 [発問]「ブラティーブさんはどこで生まれましたか」 →タイ →バンコクのクロントーイ →スラム	一斉	・初めて読んでもわかりやすい内容にする。 ・ブラティーブさんの顔や活動のようすがわかる写真を見せる。	・ブラティーブさんの生き方の話を読む中で、彼女の考えを理解することができる。 (理解)
展開 ② 30分	3 スラムの生活の向上について考える	・スラムの生活を向上させるためにどちらの方法がいいか考える。【4・5】 [発問]「スラムの生活をよくするためには、どちらの方法がよいと思いますか？」 ①スラムをなくすために、スラムから出て別のところで暮らす ②スラムに残り、スラムのために働き、スラムを豊かにする	一斉	・プリントに理由を先に記入させてから、挙手をさせ、人数を確認する。 ・同じ意見同士の班をつくり、それぞれの考えの良いところを班で出し、紙に書き込む。 	・仲間と協力し、関心を持って話し合いに参加しているか。 (関心)
	4 私たちにできることは何か考える	・それぞれの考えの良さを班ごとに発表する。【3・7】 [発問]「2つの方法の良さをそれぞれ発表しましょう」 ・質問をし合い、お互いの考えを深め、内容を知る。 [発問]「お互いの考えを詳しく知るために、質問を出し合いましょう」  	班	・時間があるときは、意見をまとめた紙を机の上に置き、お互いの意見を見合う。 ・疑問に思った点や考えをお互いの立場から質問し答えさせる。その際、言い合いにならないように注意する。	・自分自身の考えを言葉で表現することができるか。(表現) ・他の班の意見を真剣に見聞きしているか。(態度)
まとめ 5分	5 教師の話聞き、感想を記入する	・本時の感想をプリントに記入する [教師のまとめ]「自分も他人もよりよく生きるためには、進んで社会とかかわり積極的に行動することが大切である」	一斉	・ブラティーブさんのように、この社会の全ての人々が自他ともによりよく生きようとしていることを自覚させる。 ・現在のパタナー共同体小学校の写真や幼稚園の写真を見せ、ブラティーブ財団が行っている例を紹介する。	・私たちがよりよく生きるためには自他ともに協力して社会とかかわることが大切であることを理解する。 (理解)

【備考 1年4組 男子21名 女子17名 合計38名】

(2) 授業の振り返り

①ねらいを明確にし、授業を行うことが重要である。

授業を行う中で、教師自身がねらいをとらえきれておらず、生徒たちの感想の中には「むずかしかった」「よくわからなかった」という内容もあった。教師が1時間の授業の中で何を伝えたいのかを明確に

することが子どもたちの理解にもつながるということを改めて実感した。開発教育や ESD に対する意識や考え方を整理させ、教えられるようにさらに努力していきたい。

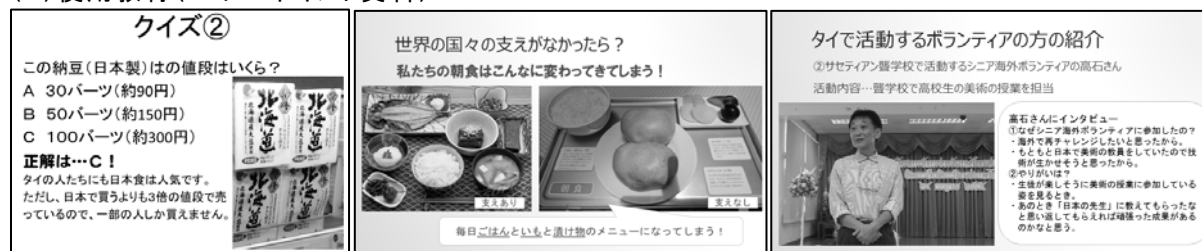
②五感を生かす授業ほど生徒の興味・関心をひく

ゲームやクイズ、実物、写真、動画を取り入れて行う内容ほど興味・関心を持つ生徒が多かった。実際にその場に行ったような気持ちになった生徒も多かった。しかし、内容によっては用いる量が少なくなってしまうものもあったので、偏りがないように工夫していきたい。

③話し合いの取り入れ方を工夫することで意味のあるものになる

スラムでの生活向上の方法について話し合う場で意見はたくさん出たのだが、感想では、「相手の意見が聞けてよかった」「いろいろな考えをもっていることがわかった」という内容が多かった。意見を言うことに慣れてきた生徒が増えたが、出てきた意見をまとめ、学んだ内容や事柄と結びつけ考えを深める点では課題が残った。どのような視点で話し合うのかなど、指示をわかりやすく提示し進めるなどの工夫をさらに行う必要があることを改めて学んだ。

(3)使用教材(パワーポイント資料)



【タイと日本の物価の違い】 【相互依存関係を朝食で紹介】 【シニアボランティアの方の話】

(4)参考資料等

- ・JICA 国際理解教育実践資料集
- ・JICA PROFILE
- ・「アジアにかかる虹」スミット・ヘーマサトン著 アキン・ラピーパット著 野中耕一編訳 大同生命国際文化基金 1987 年
- ・「体験するアジア」秦辰也著 プラティーブ・ウンソンタム・秦著 明石書店 1997 年
- ・ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら 開発教育協会

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

① 外国に対して興味を持つ生徒が増えた

外国に行ってみたいと答えた生徒の数(188 人中 167 人)

理由 ・もっといろいろな国のことを知りたいから。

- ・自分の国と似ているところや違うところを探してみたいから。
- ・外国に行けばいろいろな人と交流ができ、仲良くできるから。

② ボランティアを行いたいと考える生徒が増えた

ボランティア活動を行ってみたいと答えた生徒の数(188 人中 143 人)

理由 ・誰かのためになることをやりたいと思ったから。

- ・ボランティアは人の役に立つとてもいいことだなと思ったから。
- ・困っている人の多さに驚いたから。

③ 国際協力のために普段の生活から見直そうという生徒が増えた

感想 ・まずは、給食を残さないようにしたいと思います。

- ・食べ物を残さずにきちんと食べようと思いました。
- ・スリーデーマーチのボランティアなどから始めてみたいと思います。

④ 文字が読めることを実感することで、生活が便利になることを知ることができた

感想 ・世界で文字が読めない人が 20%もいることに驚きました。

- ・世界にいる文字の読めない人たちは、文字を勉強したくないわけではなく、勉強をしたくてもできない人なのだとわかりました。
- ・日本の人は文字が読めて幸せだなと思いました。安全な生活を支えているのは文字も関係しているのだなと思いました。



・これからは頑張って勉強したいです。

⑤ スラムの例を通し、世界には様々な環境の中で暮らしている人々がいることを学べた

感想 ・日本と真逆の環境でびっくりしました。

・スラムの町がきれいになるように、ルールを作ったりしてみたらどうかと思いました。

・世界からスラムが減ってほしいと思いました。

・私たちにできることがあったら何でもしたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P【計画】

- ・あらかじめ授業案の概要を作成してから海外研修に参加することができたので、必要な資料を多く得ることができた。
- ・得てきた資料の中から生徒の興味をひく教材を選び、準備することができた。
- ・他の研修参加者と情報交換を行いながら計画を立てることができた。
- ・管理職や他教員に使用する教材や指導案を見てもらい、何度も見直しをした上で授業に臨むことができた。

D【実践】

- ・クイズやゲーム、話し合い活動を取り入れ、生徒主体の授業を毎時間展開した。
- ・写真や動画を使い、実際にタイに行ったような感覚が持てるように工夫した。
- ・週1日の授業を6回行うため間隔が開いてしまうことから、各授業の内容を結びつけて行うことを心がけた。

C【検証】

- ・管理職や他教員に授業を参観してもらい、改善点や助言を次の授業につなげた。
- ・生徒たちに本時のねらいが伝わっておらず、「難しい」という感想の内容になってしまう授業もあった。
- ・スラムを扱った授業では、写真だけでは実感がわからない生徒が多く、自分自身の生活と結び付けて考えることがほとんどできなかった。生徒にどうやって当事者意識を持たせるかが課題であることがわかった。
- ・生徒の意識定着のためには、進級しても継続して行うことが大切であることを再認識することができた。
- ・外国の現状を見たことがない、行ったことがないという点を踏まえて教えることの大変さを改めて知ることができた。

A【改善策】

- ・ねらいをわかりやすく提示し、どんなことを学ぶのかを生徒に最初に知らせる。また、授業の途中やまとめの際にもねらいを伝え、生徒の意識がそれないように注意する。
- ・開発教育や国際協力に関しては、継続的に授業を行うことが大切である。社会の授業でも関係している単元や内容を扱い、さらに意識を高められるようにする。
- ・身近な話やものに例えたり、使ったりした内容ほど印象に残りやすいことが生徒の態度や感想から読み取れたので、さらに注目してもらえるよう、工夫した資料作りを継続して行っていく。

10 教師海外研修に参加して

研修中に「相手に対して一方的にならない支援が重要である」ということを改めて知った。この、相手のことを考えるという点は、日頃の生活にもつながるものである。日頃から相手の気持ちや思いを考えて行動することが大切ということを生徒たちに伝えていきたい。

また、様々な物事を広い視野で見つめて考え、課題解決のために身近なところから活動することが必要である点も今回の研修で新しく学んだことである。この点を授業で伝えようとしたところ、外国に行ったことのない、外国の様子を知らない生徒を対象に行うことの難しさを痛感した。身近な物事として国際課題を捉えていくには普段の授業や会話の中から国際理解につながる内容を取り入れることが必要である点を再認識することができた。

今後も、さまざまな角度や視点から国際理解や開発教育の授業ができるよう、情報収集などを行い自分自身の指導力向上にも努めていきたい。

THAILAND 〔担当教科：英語〕	学校名：聖徳学園中学校・高等学校 氏名：山田英人 ● 実践教科等：英語 ● 時間数：4時間 ● 対象生徒：中学1年生 ● 対象人数：18人
--	---

1 単元名 国際理解を通じて、自他肯定感を高め、グローバルに協働する可能性を模索する。

2 単元の目標

- ・主体的・能動的・対話的に自らの国際協力・貢献について考える力の育成。（進んで参加する態度）
- ・日本人としてのアイデンティティーを軸に、自国のことをもっと誇れるようになり、自己肯定観を高める。
（つながりを尊重する態度）
- ・多様な価値観やバックグラウンドを持った人々のことを知り、他者を敬い慮る環境の醸成
（他者と協力する態度）

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

・現行の学習指導要領の外国語における目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」と記されている。これは国際理解教育と通ずるところが大いにある。グローバル社会という文脈の中での異文化への理解を促進することは極めて肝要である。

・世界はますます多様化が進んでおり、自身の力で考え、決断していくことがより大切になっている。オックスフォード英語辞書が2016年世界の言葉として選んだ「post-truth(ポスト真実)」が象徴しているように、SNSなどの様々なメディアが台頭し、権威的なものに揺らぎが生じている。そのため、様々な考えに満ち溢れ、ますます情報の取捨選択が難しくなっていく。この単元では多様な世界で、核となる自分自身を見つめなおし、自己肯定観を身につけていく。

(2)生徒観

本校は聖徳太子の「和」の精神を教えに、「個性(Individuality)」「国際性(Globalism)」「創造性(Creativity)」を教育の方針としている。この教育理念の三本の柱のうち、国際性(国際的な視野)を養う活動として今回の授業実践を位置付ける。

英語の授業では、発展クラスと標準クラスといった2つの習熟度に分けて展開している。今回の授業は標準クラスでの実践である。中学1年生ということで、中学校での英語学習が始まり、半年ほど経つ時期、小学生までとは異なる環境で、英語の書き取りに苦手意識を持つ生徒は少なくない。しかし、show and tell や iPad を用いた発表活動に対して物怖じしない生徒が多い。

(3) 指導観

担当のクラスの中には、タイのバンコク日本人学校に通学していた生徒も交じっている。その生徒の現地でのことなどを引き出し、その話を交えながら授業を進める。指導形態としては、グループ活動を多くして、学校として全面的に取り組んでいるアクティブラーニングのスタイルで対話的な授業を心がける。

5 評価基準

観点	国際理解への 関心・意欲・態度	多面的な 思考・判断・表現	自己表現・発表活 動を行うための技 能・表現	発表活動に関する 知識・理解
評価規準	JICA の取り組みやタイと日本の関係を踏まえて、積極的に新しい情報を手に入れようとする。	一つの考えだけにとらわれず、グループの意見や他者の考えも取り入れることができる。	聴き手を意識し、誠意を持って発言ができる。	授業の中で取り上げられたことに留まらず、自ら調べ学習などを通して、理解の幅を広げることができる。
評価方法	グループ学習 話し合いの様子 ワークシート 発表 振り返りシート	グループ学習 話し合いの様子 ワークシート 発表 振り返りシート	グループ学習 話し合いの様子 ワークシート	ワークシート 発表 振り返りシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の中の日本。 I am proud of Japan!	日本人というアイデンティティを通して、自己肯定感を高める。日本人としての pride を学ぶ。(つながりを尊重する態度)	タイと日本の関係から、タイにおける日本のプレゼンスを学ぶ。例えば、タイで有名な日本のアニメや日本食などの日本文化は特に有名である。また、JICA や日系企業がタイで果たしてきた役割を APCD やレムチャバン港などから知る。
2	タイについての理解を促す、多様性を受け入れる。	タイの生活や文化を学び、他者理解・他者肯定の態度を養う。(異文化理解に対する能力)	違いを認める、Diversity 多様性への理解を促す。共通点(common)なことを理解、受用する。共通点、相違点を学ぶ。クロントーイスラムの現状やタイにおける障害者についても考える。
3	可能性の模索。 What can we do?	オラタイさんや日本人がタイで果たしてきた役割を知り様々な可能性やできることを学ぶ。例などを通し、自らのできることを考え話し合う。(他者と協力する態度)	What can we do?をグループで考える。例を示す。例：国際的・交流イベントへの参加、ネットで調べる、学校の勉強をする、語学、話しかける、インタビューする等。発表準備を行う。
4	可能性の模索、表現する。	「自分・自分たちが人のために何ができるか？直接的でも間接的でも可。」(多面的、総合的に考え行動する能力)	3回の授業の総括として、要点のまとめを行う。What can I do? What can we do?という問いから多面的に考える。使い慣れたiPad やロイロノートというアプリの利用が生徒の発表を促すと考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【 世界の中の日本・タイ I am proud of Japan! 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月1日(火)第4限

(イ)実施会場 中学1年3組教室

(ウ)本時の目標

- 海外で認知・評価されている日本の文化や技術を通して、日本人としてのアイデンティティの理解を深める。
- タイの文化や背景、知識を通じて、日本とタイとの関係を考え、英語と日本語で多角的に物事を見ていく。

(エ)指導のポイント

単元のテーマとして、『国際理解を通じて、自己肯定感を高め、グローバルに協働する可能性を模索する』に設定した。本時は、最初の時間にあたり、ここでは日本人としてのアイデンティティを考え、自己肯定感を高める活動を展開する。日本人としてのアイデンティティの確立は国際社会を考える上で、最も基礎に置くべきことである。理由は「幸せとは何か」といった質問に対して、日本人がこの質問に胸を張って、躊躇なく答えるためにも、今の日本や今の自分を肯定することが大切である、と考えるからである。第2時限以降、現在の日本の繁栄も世界の様々な国とのつながりによって成り立っていることを学習するが、日本の「今ここ(Here and Now)」にあるものを肯定することから始めたい。

また、グローバル社会で生きていく為にも英語を始めとした力を身につけることも肝要である。インターネット上の情報の50～80%が英語だと言われており、対して日本語は3～5%だと言われている。日本人として日本語の重要性も伝える一方で、世界共通語が英語であるという認識も高めていく。

日本を相対化・客体化して、タイという文脈の中で文化や背景知識を題材に、生徒の日本についての理解を深化させる。振り返りにて多様な考えを引き出し、電子黒板・iPadなどのICTを駆使し生徒間でも共有し、考え方の多様性を促す。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価
導入 5分	挨拶・出欠確認 今週のテーマ、 今日のテーマ 【1】	英語での出欠確認、 本時の目標及び学習内容について説明を聞く。	一斉	本時の目標をしっかり傾聴させる。授業の見通しを持たせ、各授業の最後には理由とともに、本時の学びの振り返りができるようにする。	教室や机上のレディネスが整っている。
5分	タイのイメージを喚起 【2】	「タイってどんな国?」「What do you think about Thailand?」をグループで話し合う。	一斉 グループ	率直な意見を引き出すために、リラックスした雰囲気を心がける	グループで協働・話し合いが出来ているかを評価 (参加態度)
5分	タイクイズ (プミポン国王に関する質問も含む) 【2】	10問のタイに関するクイズ (地理、国旗、首都、言語、挨拶、食べ物、気温など)	一斉 グループ	二択問題を行い、ゲーム感覚で授業に引き込む。テンポを大切に。ここでは限定的な答えのある問題を提示する。	既習事項である疑問詞を用いた文の理解度、それに対しての答えを評価する。
展開 5分	タイで有名な日本のものについての調べ学習【3】	タイで有名な日本のものを調べる。 (食べ物、お菓子、アニメ、音楽、日本の観光地)	グループ	日本が誇る文化に焦点を当て、世界での日本の立ち位置を考えさせる。	積極的に情報を獲得しようとしているか。 (参加態度)
5分	タイで有名な日本のものについての発表 【3】	各グループで調べたことを発表する。	グループ 一斉	タイと日本とのつながりがあり、国際社会における日本のプレゼンスは強いという一つの結論を示す。	グループでまとめたことをクラス全員に伝えられているか(内容態度)

10 分	日本の文化や技術を誇りに思えるような題材を紹介する【4】	日本人としての pride (プライド) を持つ。誇りを持つ。自信を持つ。長所を伸ばす。それが日本人にとっての幸福感を増進させる。	一斉	タイで視察した APCD やレムチャバン港の役割を通じて、タイと日本双方の発展に大きく貢献していることを学ぶ。	傾聴できているか。(参加態度)
5分	英語を勉強する意義を考える。【1】	日本の文化や日本語を大切にする一方で、世界の共通言語としての英語の重要性を伝える。	一斉	英語学習についての意義にも触れ、映像を通して、英語の必要性を伝える。	積極的に情報を獲得しようとしているか。(参加態度)
まとめ 5分	総括・振り返りと振り返りの共有【6】	まとめとして日本の世界に果たしている役割を認識し、自国を誇りに思い、英語で I'm proud of Japan. と言えるようになるように伝える。	グループ 一斉	日本を誇りに思うことと、英語で世界を理解していくこと双方の重要性を意識させる。	他の生徒と意見に耳を傾けようとする姿勢(参加態度)

(2) 授業の振り返り

・英語の授業内での、タイについての授業の第一時限目ということもあり、普段の授業とは大きく異なったが、生徒は積極的で前向きな姿勢で取り組んでいたのが印象的であった。

・授業実践のテーマとして、「タイと日本の関係から私たちにもできることを考えよう！ What can we do?」を設定した。全4回の授業を通じ、自己理解、他者理解を深めながら、国際社会という枠組みで生徒たち自身ができることを模索できた。最後に行った生徒たちにもできることは何か、という発表の際、生徒なりにいろいろな側面から考え、話し合い、発表を行うことができた。反面、「Stationary 子供に勉強してもらおう」、「sketchbook お絵かきの楽しさを知ってもらおう」などのように「～してもらおう」という意識が拭えなかった。授業内では win-win の関係で両者にとって良くなることになるように伝えてはいたが、ハードルは高かったようである。

(3) 使用教材

プミポン国王の悲報の認知度は高い 熱っぽく語る Mr.Akiie Ninomiya スラムについてのスライド





The Klong Toey Slum today

- Approximate population is 80,000 people. 20% of Bangkok's population are considered slum dwellers
- Majority of the slum dwellers today make a living as food vendors (working in the Klong Toey market), motorcycle taxi drivers, and even mechanics
- The Duang Prateep Foundation recently helped enable the Klong Toey Slum to have power and water available for its dwellers
- The slum is in much better condition today than in the past, according to several people we interviewed



日本とタイの友好を示す看板



(4) 参考資料等

- ・『グローバル時代の国際理解教育 ―実践と理論をつなぐ―』 日本国際理解教育学会編著、明石書店、2010 年
- ・『生徒の生き方が変わる グローバル教育の実践』 石森広美著、メディア総合研究所、2015 年
- ・『持続可能な開発のための教育(ESD)の理論と実践』 西井麻美・藤倉まなみ・大江ひろ子・西井寿里編著、ミネルヴァ書房、2012 年
- ・『わたしと小鳥とすずと—金子みすゞ童謡集』 金子みすゞ著、JULA 出版局、1984 年
- ・Ishimori, Hiromi, “Global Awareness of Japanese High School Students,” *International Journal of Learner Diversity* 1, no.1 (December 2009):45-58
- ・Web Technology Surveys “Usage of content language for websites”
(https://w3techs.com/technologies/overview/content_language/all)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

授業1(世界の中の日本 I'm proud of Japan!)

- ・国(言語)によって文化も違う。その国はその国でいいところがある。
- ・タイでも日本の企業が友情を結んでいるのがすごいと思った。自分にできることは今後タイに行って協力したいです。(技術面で)
- ・タイと日本が色々協力し、助け合いながら過ごしていると思った。

以下タイに興味を持ったという回答

もっとタイが知りたくなった。／タイに行ってみたくなった。／タイ料理が一番気になる。／日本のアニメがタイで流行っていることを知った。／いろんな国のことについても知りたくなった。／タイにも豚骨ラーメンがあっとうれしかった。／タイには王様がいることを学んだ。／改めて英語は大切なんだと思った。／

授業2(タイについての理解を促す、多様性を受け入れる)

- ・それぞれ diversity があるからいい。みんなの個性を大切にしなければならない。
- ・自分の考えだけじゃダメだということがわかった。見方を大きく変えて全体を見られるようにしていきたい。
- ・どうしても自分の「ものさし」ではかかってしまいます。いいところとわるいところが無い人もいないと思います。
- ・障害を持って産まれてきても諦めないことが大切だと思った。
- ・障害者や手・足が不自由な人でもこれからの世界に貢献するかもしれないことが分かった。
- ・世界には生まれつき体の不自由がある人もいるので、そういう人でも安心して暮らせる世界にしたい。また、スラムに住んでいる人も都会に住んでいる人も同じ立場にいることを大切にしたい。
- ・障害を持っている人も、受け入れないといけないということが分かった。色々な人を大切にしないといけないことがわかった。

授業3・4(可能性を模索する)

- ・衛生面の問題についての関心が増した。飲み水の問題を解決すると、女性の社会進出が進み、子供の就学率が向上する。そのためには下水の問題の解決が重要。
- ・食べ物を大切にする。
- ・モノを支援するだけでは、問題は解決しない。段階的な支援のステップが大切。チャイルド・スポンサーシップの活動も大事。

- ・ユニセフなどの募金活動で、目など不自由な人や支援のない子供や貧困な人に募金。ゴミ拾いなどのボランティアをする。
- ・本やノートやペンなどの文具を送って使ってもらい、小さくなった服などを送り着てもらい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】

普段の授業から、いかに授業が内向きで国内的な視点であったかということに気が付けた。

【課題及び改善策】

- ・平常の英語の授業内で国際理解の視点を散りばめ、内容を発展させていくアプローチをとっていくこと。
- ・グローバルイシュー、特に環境問題などは内容が、中学生にはもちろん、高校生にとっても難しくなるため、日本語使用と英語使用とのバランス、いかに生徒に英語を使わせるか。

10 教師海外研修に参加して

これからも教員として常に意識しなければいけないことは、井の中の蛙のままではいけないということである。この度教師海外研修への参加する機会を頂き、国際理解教育に足を踏み入れることができた。同時に、同じくこの研修に参加したメンバーの中には、遥かに進んだ取り組みをしている者もいる。事前研修や事後研修などを含め、如実に現れる能力の差に、自身の小ささを感じてならない。そのような不甲斐なさを感じつつも、今後はもちろん「切磋琢磨」し、情報交換などを行いながら、生徒の生き方が変わるようなグローバル教育に挑戦していきたいと考える。

宮城県公立高校教諭の石森広美先生が全国の高校生を対象に行った調査によれば、総じて、欧米志向、特にポップカルチャーへの強い興味とは対照的なグローバルイシューへの関心の希薄さなど、バランスを欠く国際認識の現状が明らかになり、知識の不足や偏りをなくすことと同時に、偏見のない広い視野と互いを分かり合おうとする心や平等感を育てていく必要がある。非英語圏の文化、環境や平和、国際協力に関する話題などに対する理解も「グローバル」の視点では見過ごすことは決してできない。

日本とタイの関係は深い。バンコクには、世界で2番目に大きな規模の日本人学校(小中一貫。生徒数 2500 人以上)がある。JETRO バンコクの調査によれば、2014 年の時点でタイに進出している企業数は 4567 社。親日的なタイ人の中には日本に留学する人も多く、バンコクやプーケットへの日本人観光客も多い。しかし、EF(English First)の調査によると、世界の英語能力ランキングで日本は、72 か国中 35 位、タイは 56 位となっている。双方に課題はあるが、世界共通語としての英語学習の意義も考えていきたい。

THAILAND	学校名：渋谷区立松濤中学校 氏名：石井 誠 [担当教科：英語]	● 実践教科等：英語 ● 時間数：7時間 ● 対象生徒：中学2年生 ● 対象人数：32人×2クラス
--	---	--

1 単元名

Lesson6 My Dream

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ① 世界の中学生の夢から、その国が抱える問題について理解しようとする態度を育てる。(未来像を予測して計画を立てる力)
- ② 国際的な支援のあり方についてその意義を理解し、相互依存の関係を理解する。(つながりを尊重する態度)
- ③ タイにおける支援の現状を理解し様々な選択肢の中から最適な支援を考える。(多面的、総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

多肢選択型の問題から自由意見へと発問を広げることで子供の多様な考えを引き出す。【2】
 ペアワークやグループワークを用いて他者の意見と自分の意見を比較し考えを深める。【3】【7】
 自己評価カードを記入することにより学びを振り返る機会を提供する。【6】

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は職業観を大きく育成するために効果的な教材である。また本単元と並行して行われた職業体験についても授業内で関連して扱うことで生徒自身の経験と教科指導を密接に結びつけることもできる。近年は国内に向けて職業選択を考える傾向にあるが、今後の国際的な社会発展も視野に入れ、青年海外協力隊と支援のあり方について考えを深める教材を取り入れた。海外で活躍する日本人のエピソードを教材に含めることで多文化に対する理解を深め、支援の方法について自分の考えを持つことでコミュニケーション能力を育みたい。教科指導を通じて、地球市民としての職業観を育成し、世界における様々な課題を生徒に考えさせ、自分だったらどうするかという課題解決能力も身に付けさせるように指導を進める。

(2)生徒観

国際理解に対する学習意欲は概ね高い傾向にあるが、積極的に発言する生徒と、おとなしい生徒の差が見られる。そのため自由に発言し自分の意見を述べる形の授業では一定の生徒に発言が偏りがちである。そのため、帯活動でのペアワークや、全員が授業に参加できるようグループワークの場面を用いて生徒の言語活動の場を増やすよう工夫した。また、授業においては小集団内での発言から全体での発言へ段階を踏んで意見を発表する場を設定した。クイズなどの活動ではタイマーを使って時間を制限するなどし、生徒の意識を授業に集中させるようにしている。英語が苦手な生徒については、

Yes/No で答えられるようなシンプルな英語の質問に答えさせるという配慮をする。グループ活動においては積極的な生徒を中心的に活動させ、全体的に活気のある教室環境を形成したい。

(3) 指導観

指導にあたっては、道路や学校といったハード面でのインフラだけでなく、コミュニティの開発や地域に根差した適切な支援といったソフト面での理解も進めていく。また、英語を基本として授業を行うことから内容に関しては平易な語を使用するように意識し、単元のまとめの際に生徒が英語でコミュニケーションを取れることをねらいとする。また様々な働き方を理解することから、自らの職業選択に結びつけることができるよう理解を促す。教科指導を通じて様々な場面を生徒に考えさせ、状況に応じた支援について多角的に考えることのできる視点を持たせたい。

5 評価基準

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語の理解の能力	言語・文化についての知識・理解
評価規準	①授業中の問いかけに反応しようとしている。 ②ペアワークなどの言語活動において、積極的に取り組もうとしている。	① I give.. I think.. といった表現を正確に使用し、自分の考えを表現することができる。	①国際協力に関する説明を聞いたリ読んだりして、その内容を理解することができる。	①英文で書かれた表示や案内をみて理解することができる。 ②国際協力に関する用語や支援の意図について理解することができる。
評価方法	授業中の発言・学習の様子・プリントへの取り組み状況			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	・ What are their dreams?	・職場体験と本単元の関連を高める。 ・学校の先生や有名人が昔なりたかった職業は何か予想することで職業選択の理由について考える。 ・様々な職業があることを理解し、成長するにつれ職業観も変わっていくことに気付かせる。	・職場体験で行った職種について英語で述べさせる。 ・クイズを出して、学校の先生や有名人が何になりたかったか考える。 ・学校の先生へインタビューしたビデオを見せ、その人がこれまでに経験してきたことや変化について気付かせる。
2	・ What is your dream?	・経済環境によって生活が制限されたり、自由に勉強ができなかったりすることについて理解する。 ・スラムでの生活について理解する。 ・オラタイさんの経験から自ら夢を実現することができることを知る。	・カードゲームを行い、自分の興味が将来の職業に結びつくことを理解するとともに、生活環境によって職業選択が制限されることに気付かせる。 ・スラム地域の生活ではどのような生活が営まれているか、ビデオを見て理解する。スラムはどのように形成されるか。 ・オラタイさんの経験から自分の行動と、必要な支援を行うことで、興味のある職業に就くことができることを知る。
3	・ What are good supports?	・様々な支援の形について知る。	・青年海外協力隊の活動を理解して、どのような職業の人が働き、協力しているのか理解する。

		・状況によって最適な支援の方法が変わることに気づく。 ・ケースによる自分の考える最適な支援について考えを述べるができる。	・国際機関や NPO の行っている支援のケーススタディを行い、なぜ最適な支援だったか考える。 ・アジアやアフリカにおける家庭を想定して、その人に対する最適な支援や、関わりについて意見を述べるができる。
4-6	What do you want to be?	・これまでの学習を統合し、自分の興味や環境の強みを生かした職業について考えを書くことができる。	・ワークシートを配布し、自分の興味があること、好きな教科などをマインドマップとして視覚化し、自分の夢について考えを深める。
7	Speech -My Dream	・自分の夢をクラスの前で発表することで、自らも社会の一員であることを理解し、責任をもって	自分の夢について 150～250 語程度でスピーチを行う。

7 授業事例の紹介

小单元名【 What is good support? 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月8日(木)第2限

(イ)実施会場 2年B組教室

(ウ)本時の目標

- ① タイにおける日本からの支援を理解する。
- ② 様々な支援の方法の中から最適なものを選択し、考えを深める。
- ③ I give... I think (that) ... などの表現を使い、支援の方法について自分の意見を述べる。

(エ)指導のポイント

指導にあたっては支援の方法について、道路や学校といったハード面でのインフラだけでなく、コミュニティの開発や地域に根差した適切な支援といったソフト面での理解も進めていく。また、英語を基本として授業を行うことから内容に関しては平易な語を使用するように意識し、単元のまとめの際に生徒が英語でコミュニケーションを取れることをねらいとする。また様々な働き方を理解することから、自らの将来の職業選択に結びつけることができるよう理解を促す。教科指導を通じて、様々な場面を生徒に考えさせ、自分だったらどうするかといった課題解決能力も身に付けさせるように指導を進める。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 3分	Warm up 3min.	単語バトルシートで重要表現や頻出単語について確認する。	ペアワーク	積極的に問題を出し合うよう促す。	ペアワークなどの言語活動において、積極的に取り組もうとしている。 [コミュニケーションへの関心・意欲・態度②]
展開 32分	Review 7min.	前時で学習したオラタイさんの職業や経歴について確認する。 興味のあることが将来の職業選択に結びつき、結果として貧困から抜け出せたこ	一斉指導	生徒が理解できる英語で話す。 ヒントをもとに、単語レベルでもいいので答える。	国際協力に関する説明を聞いて、その内容を理解することができる。

		とを理解する。 What is her job? What was she interested in? Where did she study?			[外国語理解の能力①]
	Case study1 15min.	タイにおける支援について選択肢を示しながら、必要とされる支援は何か理解を深める。【Case1～4】【2】 【Case1】 Imagine we want to change their life. We will... a. give money b. build new houses c. do clean campaign d. teach how to get money If you give money, they don't work.	グループワーク	話を集中して聞く。 質問に答える。 内容に関する質問に対して答える。 参加しない生徒がでないように、グループ内で順番に発言する。	I give.. I think.. といった表現を正確に使用し、自分の考えを表現することができる。 [外国語表現の能力①]
	Case study2 10min.	途上国における貧困層を想定し、それぞれどのような支援を行うことができるかグループで考え発表する。 【3】【7】		答えが出やすいようにこれまでに使用した表現を使うよう促す。	
まとめ 10分	Wrap up 10min.	本時の振り返りを行い、国際協力についての支援のあり方について自分の意見を英文で表現することができる。 自己評価カードに振り返りを記入する。【6】			

(2) 授業の振り返り

(よかった点)

- ・「日ごろの授業の中に国際理解教育を」というねらいを達成することができた。
- ・実際に授業者が現地に行ってみてきたことを話すことができた点が生徒の興味を高めるきっかけとなった。
- ・単語バトルカードやワークシートなどを使い、国際協力に関する単語を段階的に学習できたことで、グループ活動の活性化を図ることができた。
- ・グループワークの際に全員が参加できるように4択カードを使用したことで意見交換が活発化した。
- ・授業の前半に食べ物やキャラクターなどといった身近なことから話題を広げたことで国際開発を自分のこととして生徒に考えさせることができた。

(改善点)

- ・「被支援国＝かわいそう」という図式から抜けきれなかった。今後は対等な立場で相互依存の価値を高めることについての発問や課題を考える必要がある。

(3) 使用教材

授業内で使用した写真(一部)



(4) 参考資料等

外務省「キッズ外務省ホームページ」＜<http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/>> (2016 年 11 月 20 日)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

(授業後の生徒アンケートより)

- ・人を助ける方法は一つではなくいろいろな選択肢があるのだと分かった。
- ・日頃テレビなどで世界の状況を見ますが、実際に行動にでている人は少ないと思います。その中で、人のため、国のためと一生懸命に働く人、勉強する人がいて、その人を支えている人もいて、とてもすごいと思いました。
- ・世の中には私が当たり前に行っている生活ができずにいる貧しい人々がたくさんいることも今回の授業でより詳しく知ることができました。私は将来人のためになれることをしてみたいと思っているのでボランティア活動に目を向ける良い機会でした。
- ・ボランティアの活動は知っていたが、様々な仕事があって日本人もがんばっていることは知らなかった。先生などになって教えるには資格がいるのかを知りたい。
- ・国際的なことを知り私たちが幸せであり、幸せな人が手を差し伸べなければ、貧しい人々は何も変わらないんじゃないかと思った。もう少し大人になったら私もボランティア活動に参加してみたいと感じました。
- ・勉強をするためにはお金がいる、お金を手に入れるためには仕事をする、仕事をするには勉強が必要だと思う。1つでも抜けていたら、貧しい人々は貧しいままだと思う。私はそんな貧しい人々に何か手伝えることはないか考えて、国際ボランティアの人のように活動したい。
- ・かわいそうな人たちがいるから助けてあげよう、だけではなく、何が原因でそうなったのかを知りたいと思った。またお金についても、もっと違う考え方があると思った。英語の授業としては自分の意見の伝え方の勉強になるから良いと思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

（計画）

今回の授業実践においては、日本と海外のつながりや国際協力関係をいかに日頃の授業において指導を行い、国際的な市民感覚を育てていくかに焦点をおいた。教師海外研修として訪れたタイにおいては地理的にも歴史的にも日本と関係の近い国であり、国際理解の授業としては比較的取扱いやすい国であると感じていた。しかしながら実際に授業計画をする際には、なぜタイなのかという理由づけをする点で工夫する必要があった。

例えば現在使用している教科書においては基本的には英語圏であるアメリカ・イギリス・オーストラリアが中心となり、非ネイティブ国としてはインドが取り上げられている。インドにおいても英語を公用語としているため、第二言語として英語を使用する国の文化が取り上げられるケースは稀である。反面メディアから入る情報から食文化や大衆文化については一部ではあるが手に入れる機会も多く、こうした傾向が各国のイメージを作り上げている現実もある。授業においてはこうした一般的な外国に対するイメージと現実のギャップを埋めることが、生徒の興味関心を高め導入として有効であるのではないかと考え、海外研修において自ら得た情報をこのギャップの修正に使用することとした。

（実践）

「日頃の授業で国際理解教育を行う」ことを目的としたため、国際理解教育として単発で行うのではなく、教科指導の一部として実践を行った。また職場体験も同時期に行われる関係で、自分たちの夢とタイに住む人の夢をテーマとして扱い、その中でタイの生活や日本との関係について理解を深めていった。（詳しくは4～7を参照）

（検証）

授業の振り返りとして「自己評価カード」を使用している。タイについての導入は青年海外協力隊として働く人々と、クロンタイ地区から通訳として職業を得ることのできた女性のエピソードを使用した。初回は共通して知っている知識も少なかったため反応は小さいものであったが、授業を進めるにつれ、知識や理解が深まるにつれ生徒一人一人が考えをもつことができているのが印象的であった。「支援の方法について考える」についても英語で考え発表することができ、今後の教科指導の大きな収穫となった。しかしながら当初の目的であった「相互依存の関係について考える」については支援されている国、貧しい国であるといった考えから抜け出すことができなかった。

（改善）

今後の方策としては「世界がもし100人の村だったら」や「貿易ゲーム」といった開発教育の教材を使用し、基本的な国際開発の考え方について理解を進める必要がある。その中で生徒からの反応をよく観察し、一方的な支援で終わらずに将来的な国際関係を見通して関係をつくることの大切さや、多角的に物事をみるものの大切さについて理解を進めていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回研修に参加して改めて実感したことは、現地に赴くことでしか得られない情報の多さである。クロンタイ地区を始めとする各訪問先で出会った人々の温かさや、支援に携わる多くの人たちの熱意、子供たちの成長しようとするエネルギーや興味など、その場でしか理解できないことがとても多かった。こうしたことをメディアのフィルターなしで体感することができたこと、そして志を共に仲間と考える時間を共有することが何より得難い体験であったように感じる。特に人との出会いについては自らの教科である外国語を指導し、学ぶことの価値がより一層明確となった。どんな時も人と人との関係が大切であり、言葉を理解することはその人を理解することであると、学生時代の恩師の言葉を思い出した。今あるタイとの友好な関係もこれまでに技術的な支援・金銭的な支援だけでなく、人としてよい関係を築いてきてくれた先人たちのおかげである。今後はこの研修をきっかけとして、自らが生きた教材として生徒たちと共に考え、これからの時代をより充実したものに、これからの世代をよりたくましく育てていくことが何よりの使命であると考えている。

学校名：江戸川区立小岩第四中学校

氏名：奥村直之

● 実践教科等：道徳・特別活動

● 時間数：5時間

● 対象生徒：2学年

● 対象人数：110人

THAILAND

〔担当教科：国語〕

1 単元名

世界平和の実現に向けて、発展途上国に対し私たちができることを考えよう

世界平和と人類発展の視野に立って、自分の生き方について考えよう

2 単元の目標

発展途上国の抱える問題を知り、支援の必要性を知る。(道徳)

国際協力機構の支援を知り、持続可能な社会の実現する支援について理解する(道徳)

持続可能な社会を実現するためには、どのような取り組みが重要か考える(道徳)

発展途上国に対し、今の自分が何をすべきかについて考える(特別活動)

国際的視野に立って、今後どのように生きていくかについて考える(特別活動)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(ESDの視点に基づいて)

(1) 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る・子供の多様な考えを引き出す

課題について多様な意見が出る複数の課題設定を行い、意見交流を行う前に必ず自分なりの意見を持つ時間を設ける。課題についての知識は、生徒に考えさせる前に入念に習得させる。

(2) 考えを深めるために対話のある活動を導入する

自らの考えを深めるため、複数の課題についてグループで意見を交流する場を複数設ける。

(3) 考えるための教材を見極めて提供する

独立行政法人国際協力機構(以下JICA)の国際理解教育実践資料集および自作教材より、生徒の思考を広げ、深める課題を設定する。

(4) すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する

生徒の課題について考える力を養うため、複数の課題について、①自分なりの考えを持つ、なぜそう思うのか理由もまとめる→②グループで自己の考えとその理由を交流し、考えを広げる→③振り返り学習(作文)を行い、自己の考えの深化と変容を確認させる。

(5) 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

意見交流を終え、考えを広げた後、文章を書かせ、課題について振り返らせる。また作文を通して自己の変容を自覚させる。

4 単元の指導について

(1) 教材観

本単元においては、世界の格差や世界規模で考えたときの日本の立場、途上国の貧困の状況、日本と諸外国との相互関係、日本の国際援の在り方等について理解し考えさせる必要がある。そこで、以下のような教材を活用したい。

世界の格差・日本の豊かさを理解させるもの・途上国の貧困の状況を理解させるもの

日本と諸外国との相互関係がわかるもの・国際支援の在り方について考えさせられるもの

(2) 生徒観

生徒は貧困や経済格差等の世界の現状を踏まえた国際支援の重要性については、あまり理解できていない。本単元において、生徒には持続可能な社会を実現するための支援の在り方について考えさせる必要がある。また、中学生にとっては、「自分が諸外国に何ができるか」という問いは難解であり、かつ実際にできることも少ない。JICAの活動(青年海外協力隊派遣、円借款によるインフラ整備支援など)を多く理解させ、将来の自分にできることを具体的にイメージできるようにしたい。

(3) 指導観

本単元においては、はじめに途上国の現状や、JICAの支援について理解する。これらについての基礎的な知識を定着させた上で、以下の内容について考え、自分の意見をまとめたり、他人と意見を交流したりし、自己の考えを深める機会を設ける。JICAは自国と途上国の相互利益を目的とした

機関であることについても言及する。相互利益をもたらす支援を実現させることが、戦争やテロリズムの抑制につながり、世界平和の可能性となることを強調したい。

また、JICAの活動を紹介し、日本が高い水準の教育や技術を提供する支援を行っていることについて、学びの意義についても意識させる。また、生徒は途上国の「学校に行けないために働くための技術が身に付かない」ことを学ぶ。学ぶことで豊かな生き方ができるようになることを理解し、国際的な視野から自分が今後どのように生きていくについても考えさせる。つまり、国際理解・人類愛といった道徳的な視点だけでなく、人間の生き方についての自覚等の視点を含めた横断的な指導をしていくことができるのである。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
評価規準	● 途上国の現状についてより深く理解し、支援の重要性を理解しようとしている。 ● 途上国に対し、自分にできることを考えている。 ● 国際的な視野に立って、将来自分が何をすべきで、将来に向けていま何をすべきかについて考えている。	● 途上国の貧困の状況について考え、自分なりの意見を持ち、文章にまとめている。 ● 日本をはじめとする先進国の特徴をとらえ、途上国に対する適切な支援について考え、発表している。	● 途上国の現状について理解している。 ● 先進国と途上国の格差について理解している。 ● JICAおよびJICAの支援内容について理解している。
評価方法	ワークシート・話し合い活動の観察、発表内容・作文の作成、発表		

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容【予想される返答】 全：全体学習、グ：グループ学習、個：個別学習
1	発展途上国の現状を知ろう	途上国では、日本では想像ができないような貧困が発生しており、支援が必要だということを知る。	● 後発展途上国の現状を知る。(全) 「写真から見て取れる『この国に足りないもの』を挙げよう。」 【浄水場・家・道路・家族・親・仕事・お金・食料・幸せ・平和など】 ● 先進国を知っている限り挙げる。(全) 【アメリカ・イギリス・日本・フランス・ドイツ・イタリア・カナダなど】 ● 日本や欧米諸国がどれだけ恵まれているかを知る。(全) ※もし世界が100人の村だったら 「日本を含む先進国が大部分の富と資源を有していること」、「先進国に住む人の割合は思いのほか少ないこと」を理解させる。 ● 平等とは何かについて考える。(個→グ) ※ワークシート①「状況に応じ、ケーキをどのように切り分けることが平等か考える。」 【ケーキは同じ量に切り分ける・ケーキは各々の状況に応じ量を変えて切り分ける】→答えはない。皆が納得する切り方ができていればそれが平等である。しかし、世界規模では平等な分配ができない。なぜだろう。 ● 授業の感想を書く。(個)
2	JICAの存在を知ろう	貧困の連鎖をしり、先進国の支援の必要性を知る。 JICAの支援について知り、日本が諸外国にできることについて考える。	● 貧困の連鎖について考える。(グ) ※国際理解教育実践資料集 貧困の連鎖カードを並べる 学校に行けない→読み書きができない→働くための技術や能力が身に付かない→収入の安定した仕事に就けない→収入が少ない→十分な栄養が摂れない→病気になりやすい→仕事ができない→子どもが親の手伝いをしなければならない→学校に行く時間がない→自分の子どもも学校に行けない ● 貧困の連鎖を断ち切る活動の存在(JICAの存在)と活動内容を知る。(全)※JICA配信動画“Starting Line” ● 貧困の連鎖を断ち切る方法を考える。(個→グ) ※ワークシート②どの支援を優先するか 教師の派遣・浄水場の建設・食糧の供給・農地の開拓・働く

			技術の伝授・医薬品の支給・医師の派遣・学校の建設・お金の支給 →答えはない国によって何が必要かを考える姿勢が大切 ● 諸外国の支援を行うには、先進国の力(教育力、医療・工業技術力、経済力など)が必要だということを理解する。(全) ● 授業の感想を書く。(個)
3	持続可能な社会を実現する支援を知り、私たちにできることを考えよう	持続可能な社会を実現する支援を考えられるようになるとともに、その活動の意義を理解する。	● 持続可能な社会を実現する支援について理解を深める。(全) 募金・食料や衣類の支給→急を要する一時的な支援 教育やインフラの整備→時間がかかる持続可能な支援 ● 持続可能な社会を実現する支援の必要性を知る。(全) ● 我々が途上国のためにやらなければならないことについて考える。(個→グ) 【テーマ】 あなたは貧困の連鎖を断ち切るために選ばれた、使命感に燃えるJICAの所長です。あなたはまず、どの分野の問題を解決しようJICAの職員や青年海外協力隊員に指示を出しますか？ 【教師や医師の派遣・学校や病院の建設・浄水場や発電所の設置など】 ● JICAの活動を改めて紹介し、持続可能な支援が主であることを理解する。(全) ※タイの研修で視察をした活動の画像
4	持続可能な社会を実現する支援をまとめよう	自分が将来できる持続可能な社会を実現する支援について考えをまとめる。	● 「日本にできる持続可能な支援」「国際的視野にたって、いま自分がやらなければならないこと」というテーマで作文する。(個)
5	持続可能な社会を実現する支援について考えを広げよう	自分がいまやらねばならないこと、自分が将来できることについて、他者の意見を聞く。	● 作文の発表を各グループで行う。(グ) ● よく書けている文章を聞く。(全) (教師が選定した文章を、本人が朗読する)

7 授業事例の紹介

小単元名【我々が途上国のためにやらなければならないこと】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月12日(月)第2時 9:45～10:35 (イ)実施会場 二年一組教室

(ウ)本時の目標

- ・途上国のために、日本に何ができるかを考える。
- ・国際的視野に立って、将来に向けて今自分がすべきことについて考える。

(エ)指導のポイント

- ① 途上国が貧困に苦しんでいる現状を背景に、自分たちに何ができるかを考えさせるとともに、他者の意見を知り、思考を広げる。
- ② 貧困の連鎖を打ち壊すために、優れた教育や医療、技術、経済力等が必要という知識に基づき先進国である日本だからこそできることについて考えさせる。
- ③ 日本人が社会基盤や教育の整備、技術力によって豊かな暮らしができていることを強調し、学びの意義について考える。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入・五分	第二時の学習活動を確認させる。	● 貧困の連鎖について、復習する。 ● JICA(青年海外協力隊)の活動について復習する。	一斉	● 貧困の連鎖は自力で抜け出すことが困難であり先進国の支援が必要であることを理解させる。 ● 支援には経済力・教育力・技術力が必要だということを理解させる。	

展開・三十五分	緊急の支援、持続可能な支援の特徴と、その必要性について理解させる。	<table><tr><td>募金 衣類の寄付 物資の支給 食糧の支給</td><td>即効性あり 持続しない</td></tr><tr><td>医師の派遣 病院の設立 教師の派遣 学校の設立 発電所の建設 貿易港の建設 農地の開拓 ごみ処理施設の建設</td><td>即効性なし 持続可能 ↓ 持続可能な社会へ</td></tr></table>	募金 衣類の寄付 物資の支給 食糧の支給	即効性あり 持続しない	医師の派遣 病院の設立 教師の派遣 学校の設立 発電所の建設 貿易港の建設 農地の開拓 ごみ処理施設の建設	即効性なし 持続可能 ↓ 持続可能な社会へ	一斉	● 緊急の目的は発展途上国が独り立ちできるようにすることであり、持続可能な支援を行っていることを理解させる。	貧困の連鎖を断ち切るべく持続可能な支援について自分なりの意見を考え、適切に文章にまとめることができる。 (グループ学習用ワークシート)
	募金 衣類の寄付 物資の支給 食糧の支給	即効性あり 持続しない							
医師の派遣 病院の設立 教師の派遣 学校の設立 発電所の建設 貿易港の建設 農地の開拓 ごみ処理施設の建設	即効性なし 持続可能 ↓ 持続可能な社会へ								
日本人ができる、発展途上国の支援について考えさせる。 発展途上国の支援について考えを広げさせる。	● 「あなたは貧困の連鎖を断ち切るために選ばれた、使命感に燃えるJICAの所長です。あなたはまず、どの分野の問題を解決するよう青年海外協力隊員に指示を出しますか？」というテーマで案を考案する。 ● グループ内で他者と意見を交流する。 ● 全体に紹介したい意見を選ぶ。 ● 全体に意見を発表する。	一斉 グループ 一斉	● これまでの学習内容に基づいて考えさせる。 ① 貧困の連鎖を断ち切る支援であること ② 持続可能な支援であること ③ 日本の特徴(経済力・教育力・技術力など)を生かした支援であること						
終末・十分	JICAタイが行っていた主な支援を紹介する。 本時の学習を振り返る。	● 以下の支援とその効果について理解する。 <table><tr><td>● クロントーイスラムにおける図書館建設・書籍の配架 ● レムチャバン港の建設 ● サセティアンろう学校への教師の派遣 ● APCDにおける山崎製パンの製造工場建設 ● サイエンスハイスクールチョンブリ校の設立 ● バンケン浄水場の設立</td></tr></table>	● クロントーイスラムにおける図書館建設・書籍の配架 ● レムチャバン港の建設 ● サセティアンろう学校への教師の派遣 ● APCDにおける山崎製パンの製造工場建設 ● サイエンスハイスクールチョンブリ校の設立 ● バンケン浄水場の設立	一斉	● 各支援が、タイにどのような恩恵をもたらしているかを理解させる。 ● 途上国に対する支援の視点だけでなく、途上国と日本相互発展の視点こそ大切であることを理解させる。				
● クロントーイスラムにおける図書館建設・書籍の配架 ● レムチャバン港の建設 ● サセティアンろう学校への教師の派遣 ● APCDにおける山崎製パンの製造工場建設 ● サイエンスハイスクールチョンブリ校の設立 ● バンケン浄水場の設立									

(2)授業の振り返り

これまでの段階的な指導により、本時において具体的な支援内容とその理由について適切に述べることができた。当初、「持続可能な社会を実現する支援」の必要性の指導をしたものの、その意味を正確に理解できている生徒は限られていた。そのため各自で意見を出させている時は、「募金や衣類の寄付」などといった持続可能でない支援を挙げる生徒も少なからずいた。しかしグループで意見交流を行うにつれ、次第に一人一人の考え方が深まり「浄水場の建設」、「教師の派遣」、「農地の開拓」、「働くための技術の伝授」などの意見にまとまっていった。

貧困や経済格差、内戦の勃発やテロリズムなどについて、中学生に十分な知識があるわけではない。それゆえ持続可能な支援を具体的に想像させるためには、世界の現状を分かりやすく視覚的に捉えさせる必要があった。緊急の支援と持続可能な支援、双方が国の状況によって必要になってくることや、その国その国に、今求められている支援が何かを考えること重要であることを理解させるためには、教師が途上国の現状、貧困の連鎖の問題、JICAの存在とその支援の在り方など、多くの情報を提示し、知識を与えること、そして何よりも生徒同士に意見を交換させる時間が必要不可欠であった。生徒は他人から意見を聞くことにより、思考を広げることができるようになった。

また、生徒はJICAの職員および青年海外協力隊員が、日本の経済力や自らの知識や技能を生かした支援を行っていることを知る。これは、学びの意義を再確認させるよい好機ともなった。「国が発展し、豊かな生活を送るために、そして身近な人たちから海外諸国の力になるために、今自分たちは学び続けなければならない。」などといった意見を持つ生徒も多くみられた。

(3)使用教材

- 埼玉県立総合教育センター監修・JICA教材作成実行委員会編『国際理解教育実践資料集「教育が受けられないことで起こる“負の連鎖”を考える」
「学校に行けない」のカードを一番目に置き、そこからどのようにつながっていくか考えてみよう。
→貧困の連鎖についての指導に使用

- 自作教材『ワークシート①平等っていったいどういうこと?』

A君とB君は、学校が終わった後クラスメイトのCさんの家に遊びに行きました。Cさんのお母さんはケーキ作りが趣味で、「ホールケーキを作ったからみんなで平等に食べなさい」と言いました。ケーキをどのように分けることが平等かグループで話し合い下の円に線を入れてみよう。また、A君、B君、Cさんの情報を参考にしてもよい。→平等について考えさせる指導に使用

- 自作教材『ワークシート②ダイヤモンドランキング』

あなたはJICAの職員になりました。JICAの職員として世界の様々な問題を解決するために、どの問題を優先して解決することが望ましいか、ランキングを作りなさい。その際、理由も明確にしなさい。その後、各自がなぜこのようなランキングにしたか討論しなさい。

A 教師の派遣 B 浄水場の建設 C 食料の供給 D 農地の開拓 E 働く技術の伝授
F 医薬品の支給 G 医師の派遣 H 学校の建設 I お金の支給

→持続可能な社会を実現する支援の必要性の指導に使用

- 自作教材『ワークシート③急務!～貧困の連鎖を断ち切ろう～』

あなたは貧困の連鎖を断ち切るために選ばれた、使命感に燃えるJICAの所長です。あなたはまず、どの分野の問題を解決するようJICA職員、青年海外協力隊員に指示を出しますか?これまでの学習を通して、日本にできそうなことを考えてみよう。

→持続可能な社会を実現する支援についての考えを広げ、深めさせる指導に使用

- その他、感想文・意見文等を記入する自作の作文用紙

(4)参考資料等

- 池田香代子著『世界がもし100人の村だったら』(マガジンハウス)
- JICA配信『Starting Line～協力隊の活動から得たもの』(https://youtu.be/e_8PSXSPEQ4)
- 自作資料『貧困の写真「泥水を飲む女性」「内戦に泣く子供」「ゴミの沼を泳ぐ子ども」「ハゲタカに狙われる瀕死の子ども」』
- 自作資料『JICAの支援内容が判る写真「クロントーイスラムの図書館」「レムチャバン港」「美術教師の指導」「山崎製パンの支援」「サイエンスハイスクールチョンブリ校」「バンケン浄水場」※研修中に撮影』

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

本単元を通し生徒は課題について知識を深め、自らの考えを深められるようになった。以下に単元最後の作文を紹介する。

(1) 私たちが途上国にできること

私たちが途上国のためにできることは、浄水場やごみ処理場を建て、建設中には募金や衣食住の提供をすることである。

日本は狭く小さな国でありながら比較的ごみが溜まらず衛生環境がよいのはごみ処理場や浄水場があるからである。そしてそれらの施設は募金や衣食住の提供のように短期間でしか途上国に対して効果を発揮できないというデメリットを克服する性質を持つので、一回建ててしまえばその地域の環境問題は長期間なくなるだろうと思う。

しかし、その施設を建てるにはかなりの時間を要するというデメリットがある。それを克服するのが前半で述べた募金や衣食住の提供である。これらは調達してしまえば、短時間で現地に運べて、すぐに効果をもたらすという性質を持つので、すぐに効果を発揮できない施設の建設等と良い具合に組み合わせられるということなのだ。このような多面的な支援は途上国を効率的に発展させていくと思う。そしてこのような支援を実現するのは経済力や技術力を持った日本なのではないだろうか。

(2) 国際的視野に立って、自分が今やらねばならないこと

私は今回の授業を受けて、毎日の授業を大切にしていこうと思いました。現在、途上国では教育に恵まれていないことが多いので、その子達の方まじめに学習して、将来私が大人になった時に、日本の学校で学んだ知識を途上国の人達に教えてあげたいと思います。私の将来の夢は小学校の先生になることです。世界の問題を分かりやすく教えられたらと思います。

やっぱりそのためには今の勉強を意欲的に取り組んでいかなければなりません。日々の勉強を大切にしていって、途上国と自分の将来につなげていきたいです。また、募金などの自分にできることがあれば、途上国の発展に少しでもつなげていけるよう、協力したいと思います。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 成果

本単元の指導を終え、以下の成果を得ることができた。

【知識として身に付いたこと】

国家間の経済格差・発展途上国の貧困の現状・JICAと、その活動について

【考えを深められたこと】

- 貧困の連鎖を断ち切るためには知識や技術、経済力が必要であること
- 日本が働きかけなければならないこと
- 持続可能な社会を実現するための支援について
- 世界を支えるためには学びが必要不可欠であること
- 国際的視野に立って、自己の生活を振り返り、今後の生き方について考えること

海外のこと、世界の国々に興味を示す生徒は多いものの、これらについて知る機会は少ない。特に今回印象的だったのが、先進国のように裕福な生活を送っている人が世界の大部分を占めると思い込んでいた生徒が六、七割と、非常に多かった。途上国の支援についても、はじめは募金程度の案しか出てこなかった。しかし世界の現状の数値的な理解、視覚的な理解を踏まえ、生徒は自分たちがいかに豊かな生活を送っているか気が付いたようである。また、中学二年生は公民の授業を受けていないため、JICAの存在(ODAの存在)もほとんど理解していなかった。

このような状況であるため、生徒に日本の支援の必要性を実感させるには、はじめに世界の現状やJICAについての指導を徹底させることが重要である。「世界の中の日本」を正しく理解することで、途上国支援の必要性を感じ、支援の内容と学びの意義を真剣に考えることができるようになったのだと思う。

(2) 課題および課題の改善策

① 他国の尊厳を守り、尊重する態度の育成

世界平和や人類愛などの道徳的観点を養うことはできたと思われるが、他国の尊厳について考えたり、尊重したりする態度の育成までには至らなかった。今後は諸外国の特色や異文化の素晴らしさを理解させたり、自他国が協力して何かを行うことの意義について考えさせたりすることのできる指導を行いたい。

② 後発発展途上国、発展途上国、中進国の状況のずれの理解

経済格差や貧困の状況を伝える際にはアフリカの後発発展途上国の現状を視覚的に捉えさせた一方で、JICAの具体的な支援については中進国のタイ(今回の研修先であったため)で行われている内容を紹介した。それゆえ、生徒は中進国と後発発展途上国の差についてのみ考えることとなった。授業において生徒が意見として挙げていた支援についてはいずれの国にも共通するものであったものの、後発発展途上国、発展途上国、中進国の状況のずれの理解には至っていない。

③ 社会科との横断的な指導の必要性について

②に付随して考えるべきことだが、道徳や特別活動の授業として経済格差や発展途上国の現状について理解させるのは、時間的に限界がある。つまり社会科の地理の授業において世界の国々の地誌や現状、公民の授業においてODAの存在やその立ち位置、持続可能な社会の実現の必要性について指導をした上で、本単元の指導を行った方が効率的であるし、何より正しく世界の状況を把握できるようになる。国際理解教育の指導は社会科の基礎知識が必要である。道徳、特別活動等の枠にとらわれない、横断的な指導を心掛けていくことが重要であると感じた。

10 教師海外研修に参加して

JICAの支援には浄水場や商業港の建設、日系企業による支援の援助などの大規模なものから、個対個の心の繋がりを得られる青年海外協力隊のボランティアもある。双方ともに国と国との繋がりを強くするのに必要不可欠な要素であるのだ。今回の研修を終え、まず我々教員が途上国の苦しんでいる人々を救いたいという心の温かさと二国間相互の経済発展に寄与する活動を追及したいという二つ視野を持って、国際理解教育に従事することの必要性を強く感じた。

学校名：さいたま市立指扇中学校

氏名：山岸 啓介

THAILAND

[担当教科：美術]

- 実践教科等：美術
- 時間数：8時間
- 対象生徒：2年生
- 対象人数：37人 × 4クラス

1 単元名

私がフェアトレーダー ～ビジネスで国際協力～

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・世界のものとお金の現状を考える。(批判的に考える力)
- ・フェアトレードの仕組みを理解し、可能性を考える。(多面的・総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本題材は、国際理解教育を出発点として、美術の制作課題へとつなげていく題材である。

世界は「もの」でつながっていると同時に、経済格差や貧困が生まれる仕組みが存在しているという現実がある。そこで、デザインやビジネスでこれらの問題を解消していこうという「フェアトレード」という仕組みがあることを学び、そのシミュレーションを授業で体験することで、生徒たち自身が消費者としての在り方を改めて考えるきっかけとしたい。

SDGs においては以下の目標達成につながる内容であると考える。

1. 貧困をなくそう
8. 働きがいも経済成長も
10. 人や国の不平等をなくそう
12. つくる責任つかう責任

制作は、発展途上国で制作されるキャンドルのモデルを開発するという設定で行われる。素材とする樹脂粘土は可塑性が高く、着色も容易なため、生徒の思いが表現しやすい。形や色で魅力的でかつストーリー豊かなデザインを実現し、商品の付加価値を創造していくことができる。

(2)児童生徒観

好奇心は旺盛で、新しい取り組みには意欲的に取り組む。また、手を動かしたり、話し合いにより意見を交換したりすることには抵抗が少ない。しかし、世界との関わりを身近に感じる場面が日々の生活の中では非常に少ない。

(3)指導観

世界の現状については頭で理解していても、生徒たちに自分が当事者であるという意識は生まれにくいようである。当事者意識をどのように育てていくかは大きな課題であると言える。より身近なものとして意識させていくためには、以下のような事柄が重要であると考える。

- ①日本とのつながりから世界へと視点を広げていく。
- ②美術の制作活動や話し合い活動など、体験的かつ主体的な取り組みを重視する。
- ③総合的な学習だけでなく、日々の教科指導に国際理解や ESD のエッセンスを入れていく。

5 評価基準

観点	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
評価規準	世界の現状について積極的に考える。 意欲的に制作している。	作品の持つ付加価値を考え、魅力的なアイデアを考えている。	樹脂粘土の特性を生かして、独創的で美しい作品に仕上げる。	お互いの作品を鑑賞し、作品の良さや工夫点を読み取っている。
評価方法	導入やグループワークに意欲的に参加し、自分の意見をワークシートにしっかり書いている。 授業で意欲的に制作している。	魅力的なアイデアを考え、制作企画書としてワークシートを作成している。	樹脂粘土の特性を生かして、独創的で美しいキャンドルとパッケージのデザインをしている。	お互いの作品の良さを味わい、ワークシートに文章で表現している。

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界における、ものとお金のつながりを考えよう。	世界に存在する経済格差に着目しながら、世界の国々がものとお金でどのようにつながっているかを体験的に考えるようにする。	パワーポイントで、授業の導入を行う。 貿易ゲームを行い、各班で協力して取り組む。各班と全体で振り返りをする。
2	フェアトレードについて考えよう	ものとお金のつながりによって生まれる世界の格差を理解し、その解消に向けての取り組みの可能性について考える。	パワーポイントや VTR、ワークシートを活用し、貿易ゲームの振り返りと分析を行う。フェアトレードという仕組みを、発問に対する意見交換をしながら理解していく。また、制作課題についての導入を行う。
3～8	キャンドルを制作しよう	生徒自らが、フェアトレードを行う立場をシミュレーションし、付加価値のある商品とパッケージのデザインを行うことで、本来の消費者としての在り方を改めて考えさせる。	発展途上国でキャンドルを制作してフェアトレードで利益を生むという設定で、利益が生まれるような付加価値を加えてデザインして、樹脂粘土でモデル制作をする。また、購買を促進するようなパッケージデザインも考え、画用紙等で制作する。制作企画書を必ず添える。
9	作品を鑑賞しよう	お互いの作品を、消費者の立場で鑑賞し、授業のまとめをする。	互いの作品を鑑賞し、ワークシートにコメントを記入する。また、現在フェアトレード商品のデザイナーとして活躍する日本人の報道を VTR で見る。

7 授業事例の紹介

小単元名【 フェアトレードについて考えよう 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月13日(木)第5限

(イ)実施会場 2年3組教室

(ウ)本時の目標

- ・ものとお金のつながりによって生まれる世界の格差を理解する。
- ・その解消に向けての取り組みの可能性について考える。

(エ)指導のポイント

- ・できる限り内容をシンプルに伝える。また、ICT を有効に活用する。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
10分	○前回の授業振り返りをする。【6】	・前回の授業では何を行ったか確認する。 ・Q1「どんな振り返りだったか？」貿易ゲームの振り返りを各班で確認し発表する。	班 座 席	・パワーポイントで内容をシンプルに伝える。(1時間共通)	・ワークシートへの記入と授業での発表(1時間共通)
5分	○貿易ゲームの事象の確認【6】	・貿易ゲームの事象を現実世界と比較し、経済格差や貧困が生まれる仕組みについて確認する。		・ゲームの結果は多様であり、多くのことが読み取れる。様々な感想を適切にすくい取っていくようにする。	
10分	○発展途上国の現状について知る。【1】	・VTR「チョコレートの真実／世界が100人の村だったら」を視聴する。(5分) ・Q2「チョコレート買いますか？」の問いについて考え意見を発表する。		・問題は複雑に絡み合っているため、絶対解はないことに留意する。	
10分	○フェアトレードについて考える。【4】	・フェアトレードについて知る。 ・Q3「フェアトレードは募金と何が違う？」の問いについて考え意見を発表する。 ・フェアトレードの利点について知る。		・貿易ゲームで起こった新しい価値観による取引を振り返る。 ・タイでの体験や、身近な例を取り上げる。	
5分	○消費者の在り方について考える。【2】	・Q4「安くて質の低いものか、高くて質の高いものか？」の問いについて考え意見を発表する。		・正解はないが、授業を通じて意識したい問いであることを強調する。	
10分	○制作課題について説明を聞く。	・VTR「サイレンス(実在するフェアトレードパートナー)の活動」を視聴する。(5分) ・今回の制作課題の説明を聞く。 ・Q5「あなたの考える付加価値とは何か？」について考える。 ・ワークシート回収		・ただ作りたいものをつくるのではなく、様々な立場の視点が必要であることを意識させる。 ・消費者が欲しくなる商品の付加価値について考えさせる。	

(2)授業の振り返り

前回の授業で行った貿易ゲームは非常に活発に行われたが、週1時間の教科ではつながりが薄くなってしまうため、できるだけゲーム終了時に振り返りをして記録しておくことが望ましい。また、一方的な説明にならないように、細かい問いをいくつか設定し、常に個人やグループで考えさせる構成が必要である。制作時間の確保のために、1時間に多くの内容を詰め込んだ計画になっている。テンポの良い進行が必要である。

(3)使用教材

ワークシート

2 学年 国際理解・開発教育

1. 前回の「貿易ゲーム」を振り返り、班で話し合ってお互いに記入してください。
(何が起ったか、どう思ったか)

2. _____ を買おうとおもいますか？
はい・いいえ (○をつける)

理由はい-

3. _____ は「露金」と何が違うと思いますか？
① 発展途上国の生産者にとって→
② 先進国の消費者（私達）にとって→

4. あなたは物を買うときにとちをを選んでいきますか？
A・B (○をつける)

理由はい-

5. あなたの考える _____ とは？

班 年 組 番 氏 名

パワーポイント資料 前半

世界は様々な問題を抱えている
戦争、貧困、開発、差別、
人権、環境、...

**50年後、100年後
持続可能な社会とは？**

発展途上国のスラムや
農村部の貧困の現状

世界の金持層
上位5分の10%所有 82.7%
世界の
次の5分の10%所有 11.7%
世界の
中位5分の10%所有 2.3%
世界の
下位5分の10%所有 1.9%
世界の貧困層
最下層5分の10%所有 1.4%

**経済格差
は深刻**

出所「人間開発報告書(2002)」

世界は「もの」や「お金」でつ
ながっているのに、なぜ経済的
な格差が生まれるのだろうか。

貿易ゲーム

- 各班の目的は、渡されたものを使
ってできるだけ多くのお金を稼
ぐこと。
- お金は、紙を型紙に合わせてはさ
みで切って「製品」を作り「マー
ケット」で売ることによって得られる。

長方形 300ドル
正三角形 500ドル
半円 500ドル
円 1000ドル

小さい金紙 100ドル
大きい金紙 1000ドル

班	1	2	3	4	5	6
鉛筆	1	1	1	1	1	1
はさみ	2	1			2	
型紙						
紙	1	1	20	20	1	1
お金	2000	500	200	200	2000	100
結果	25000	2800	1800	2500	35100	1800

**Q1.どんな振り返りでしたか？
各班の代表が発表**

- 鉛筆、はさみ、型紙
=製品を作る技術
- 紙
=資源
- 製品の形が決められている
=グローバルな経済

○他のグループとの関わりは？
例)
・お金で買う、ものを交換する
・他のグループで作業する
・他のグループと協力する
・他のグループに働かされる
・他のグループに助けられる
・(ものを盗まれる)

山岸Tがもたらしたゲーム中の変化

①長方形が300ドル
→100ドルになった。
=需要の変化
市場価格変動

もう古い！
いらない！

山岸Tがもたらしたゲーム中の変化

②6班に5分だけ、はさみと
長方形の型紙を貸し出す。
=技術支援

JICA

班	1	2	3	4	5	6
鉛筆						
はさみ						
型紙	先進国	中進国	発展途上国	発展途上国	先進国	発展途上国
紙						
お金						
結果	25000	2800	1800	2500	35100	1800

○ルールはどのグループも同じ
=自由貿易

→発展途上国を不利な状況に
追いやる。
格差が広がる。

チョコレート
(カカオ)

カカオの約76%は、西アフリ
カのガーナから輸入されている。

※貿易ゲームに置き換えると、、、

- 鉛筆、はさみ、型紙
=チョコレートを作る技術
- 紙=カカオ

カカオ農園の
児童労働映像

危険な労働
病気になる
収入が少ない
負の連鎖
学校に行けない
食料が買えない
栄養不足

Q2.この現実を知って
あなたはチョコレートを買
おうと思いますか？
(好き嫌いは別にして)

パワーポイント資料 後半

③山岸Tが発展途上国から「折り紙」を300ドルで買い取る。 =適正な価格で買い取る 技術支援や製品デザイン指導 新たな価値観による製品 フェアトレード Fair: 公正な Trade: 貿易	身近な フェアトレード のチョコレート  ※近くのイオンで 買いました。	フェアトレードで 購入できる商品の例 	タイで出会った フェアトレード ショップ  FAIRTRADE 2014
タイの農村部や山岳地帯の少数民族 が伝統的に作ってきた工芸品を、 	オシャレな雑貨にして販売 	生産者：農村部の少数民族 ↑ 公正な価格で買い取る 前払金、長期的取引 商品の（技術）デザイン指導 フェアトレード団体：輸入販売者 ↓ 安心して安全な商品を買う どんな商品が売れるのか考える 付加価値を提供 消費者：私たち	生産者：3、4、6班 ↑ 折り紙を公正な価格で買い取る 折り紙を作るようにデザイン指導 フェアトレード団体：山岸T ↓ きちんと折れているかチェック 今までにない新たな付加価値を提供 消費者：マーケット 貿易ゲームでは？
国際協力で「募金」は一般的ですが、 Q3.フェアトレードは 募金とは何が違う？ ①発展途上国の生産者にとって ②先進国の消費者（私達）にとって	生産者 ↑ 収入が増える 仕事につける＝自立支援 伝統を継承できる フェアトレード団体：輸入販売者 ↓ 付加価値＝HAPPY かわいい！素敵！欲しい！ 気軽に国際協力 消費者：私たち 持続可能な社会	例：てんとう虫チョコ ヨーロッパでは「春に てんとう虫がとまった人 のところに幸せが訪れる」 という言い伝えがあり、 幸福のシンボルとして親 しまれている。生産者の 労働環境も配慮した 100%オーガニック素材 のフェアトレード・チョコ レートである。  NEOBISS ACE	ところで、 フェアトレードの チョコレートは 美味しいけど 少しお高いが、  People Tree Fair trade chocolate White Chocolate of Europe
Q4.これまであなたは ものを買うときに どちらを選んでいましたか？ A 安くて、質の低いもの B 高く、質の高いもの	生産者：農村部の少数民族 ↑ 商品の（技術）デザイン指導 フェアトレード団体：輸入販売者 ↓ どんな商品が売れるのか考える 付加価値を提供 消費者：私たち 今回の課題Ⅱこの人になる	「Silence」の 紹介映像 	今回の美術の制作は、 フェアトレードの専門ブランド 「ピープル・ツリー」 そのパートナーのひとつで インド、コルカタの生産者団体 「サイレンス」 の仕事の例をモデルにして取り組む。
「サイレンス」とは 耳と口の不自由な人びとにアクセサリや カード、キャンドルづくりなどの職業訓練を 通して、社会的、経済的に自立した生活を送 るための支援を行っている。 	美術の制作課題 ①みんなに買ってもらえそうな 「付加価値」のあるキャンドルの デザインを考える。 ②キャンドルのモデルを制作する。 ③パッケージやコピーを考え商品化する。 	美術の制作課題 ビジネスで国際支援 	美術の制作課題 Q4.あなたの考える、商品の 付加価値（HAPPY）とは？ 

（資料内の画像で実物が用意できるものは準備する）

（4）参考資料等

『新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える』

制作・発行：財団法人神奈川県国際交流協会 2007.03.20

『国際理解教育実践事例集～世界を知ろう！考えよう！』

監修：埼玉県立総合教育センター 編集：JICA 教材作成実行委員会 2013.03

『世界がもし100人の村だったら』DVD

Disc2 ガーナ：チョコレートも知らず一生カカオ農園で働き続けるアペティ&コフィー兄弟（11歳&6歳） 発売元：フジテレビ映像企画部

『Lofty Bamboo』タイのフェアトレードショップ

<http://www.loftybamboo.com/> （2016.09）

『Ace Japan』NGO 団体ホームページ

<http://acejapan.org> （2016.09）

『People Tree』フェアトレードブランドホームページ

<http://www.peopletree.co.jp/> （2016.09）

『Silence』生産者団体の映像

https://www.youtube.com/watch?v=aVq62Iv_zDo （2016.09）

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒は、貿易ゲームなどのイベントをきっかけに、様々に意見交換をしながら、意欲的に考え課題に取り組むことができた。また、制作で手を動かしながら頭を使う機会を得ることができた。商品（作品）の付加価値を考えるというのが重要なポイントであるが、これは非常に苦勞をしていた生徒が多く、興味深いアイデアを生み出した生徒もいたが、全体的には多少課題の残る結果になったと思われる。しかしながら、授業の序盤に提起した、「安くて質の低いものか、高くて質の高いものか」という問いについては、少しだけ考えを深められた様子が見える。制作というロールプレイの中で学んだ利益と付加価値との関係性から、今後求められる「消費者」としてのあるべき態度とは何か、「つくる責任つかう責任」とは何か、に、わずかでも意識を置かれることが期待される。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

国際理解教育は、総合的な学習の時間で取り扱うことで、時間をかけてじっくり取り組むことができる。内容の幅を広げ、また深められる最もスタンダードな取り組み方である。実際に自校では、3学年で総合的な学習の時間のテーマを「国際理解」と設定し、修学旅行に関わる自国文化の調べ学習や、「世界がもし 100 人の村だったら」のシミュレーション、留学生を招いての交流授業など、様々に展開をしていくことができた。自分も3学年担任として、タイでの研修のエピソードを活用しながら、以上の取り組みの指導をしてきた。3学年の生徒の様子を見ると、大きな成果があげられたと考えている。

一方で、「4 単元の指導について」に記述したように、日々の教科指導の中に国際理解や ESD のエッセンスをいかに取り入れていくかが、大きな課題ではないだろうか。汎用性が高くかつ身近な題材で、体験的な学びの機会を増やそうということで、担当教科の授業で実験的に取り組んでみようと考えた。

今回は、タイの研修で出会った「フェアトレード」というキーワードをもとに、ものづくりの視点で国際協力の可能性を考えていくという課題を設定した。実在するフェアトレードブランドのパートナー（生産者団体）を紹介し、生徒がデザイン提案をするという仮定で、魅力的な付加価値のあるキャンドルのデザインでいかに利益を生むかという課題である。

フェアトレードを意識付けていくきっかけとして「貿易ゲーム」を行ったが、制作時間の確保と、フェアトレードというテーマをクローズアップさせるために、ルールをかなり簡略化した。今回は目的が達成できたように思われる。

制作に関しては、フェアトレードブランドや生産者団体に協力を要請し、生徒の優秀作品を商品化することができたら理想的である。それが難しくても、作品についてプロの講評をいただいたりすることで、授業の動機付けが大きく変わってくる。外部機関と積極的に関わっていくことが、生徒の学びを大きく変えていく可能性がある。また、実際の授業では、熱を使うことが危険と判断したため、キャンドルはロウを使うのではなく、樹脂粘土でデザイン提案をするにとどまった。可能性があれば、制作プロセスを整理し、本物のロウや、フェアトレードのミツロウなどを素材として使ってみるのも興味深い。



10 教師海外研修に参加して

研修では、同行した教員や JICA のスタッフをはじめ、現地の方々との様々な出会いがあり、多くの経験を得ることができた。それらの経験自体が一番の教材であり、様々な形に変わって活用されていく可能性を感じた。ただし、経験者のみにしか活用できない教材では意味がない。汎用性と持続可能性の高いものに還元できてこそ、価値があると考えた。10日間の濃密すぎる時間から得られた膨大な経験を、消化し、整理していく作業は、これからも続いていくのだろうと思っている。

THAILAND [担当教科: 社会科]	学校名: 豊島区立明豊中学校 氏名: 櫻井 直 ● 実践教科等: 公民 ● 時間数: 3時間 ● 対象生徒: 3学年 ● 対象人数: 30人
--	--

1 単元名

第4編 私たちと国際社会 第2章 国際社会の課題と私たちの取り組み
「未来の地球をともに考える」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

タイ国に支援をするならどういった支援が適切かを考える。(・③多面的、総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・生徒の興味・関心を引き出すために、視覚に訴える資料を活用する。各時間において、目標に沿って学習するためのワークシートを使用する。
- ・既習事項である南北問題と南南問題の知識と関連させながらODAの役割を考察できるようにする。

(2)児童生徒観

- ・落ち着いた生徒と、活発な生徒がはっきりと分かれている学級である。活発な生徒ほど学習に対しての取り組みが意欲的である。これまでの定期考査の結果は、他クラスに比べて平均点が高い。ただ、限られた生徒の発言に偏っている傾向があるので、一人一人が意見を表明することができるような指導の工夫が必要である。

5 評価規準

観点 評価	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の 評価規準	様々な課題を抱える国際社会において、異なる国や文化の間で、どのような国際協力ができるのかを意欲的に考えようとしている。	国際社会における我が国の役割、日本の国際貢献、世界平和や地球環境、資源、エネルギー、貧困などに関わる課題を見だし、対立と合意、公正と公平などの視点から多面的・多角的に考察し、その課程や結果を適切に表現している。	世界平和の実現と人類の福祉の増大に関わる国際社会の活動に関する資料を様々な情報手段を活用して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	人間の安全保障の考え方やそのための国際協力のあり方、日本の具体的な取り組みについて理解している。

学習活動に即した <u>具体的な</u> 評価規準	* 上記の規準について、児童・生徒が、何をどこまで達成したら「B (概ね満足できる状況)」とするかを設置すること			
	① 日本の国際協力の在り方を理解し、貧困国に対する日本の取り組みをノートに記述できている。自身の考えを挙手発言できている。	① ワークシートの発問に対し、個人で予想を立て、自分の考えを1つ以上記述できている。	① ワークシートODAに関わる資料を的確に読み取ることができている。	① 既習事項と関連させながら、日本のODA 優先配分国の予想を的確に解答することができている。

6 単元の構成

時限	小单元名	学習のねらい	授業内容
1	現代の貧困と多様化する世界	・世界の貧困について主体的に関心を持つ。 ・南北問題と南南問題の違いを理解する。	・南北問題と南南問題の言葉のイメージからなぜ南地域が貧しいのかの予想を立てる。 ・日本のさまざまな国際協力について学習し、政府開発援助（ODA）の役割を理解する。
2	日本の平和主義と国際貢献	・政府開発援助（ODA）の役割を理解する。	・発展途上国例としてタイ国を扱う
3	未来の地球をともに考える	・発展途上国への支援として何が適切かを考える。	・ODAについて、政府開発援助額の順位を資料から読み取る。 ・タイ国への援助の項目として重要度のあるものの順でランキングを付ける。

7 授業事例の紹介

小单元名【 未来の地球をともに考える 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月21日(水)第2限

(イ)実施会場 3年3組教室

(ウ)本時の目標

・発展途上国(タイ国)への支援としてどういった支援が適切か自分の考えを発表する。

(エ)指導のポイント

・視聴覚教材を豊富に用意、明示することで生徒を飽きさせない授業を展開し、国際社会学習の初期段階から国際社会に対しての興味・関心を育む。

・主発問に対して個別活動とグループ活動両方で考えさせることで、個人で考える力とグループで考える力を養う。

・グループ活動では発言する力以外に他人の意見を聞く力も同時に養えるような取り組みとして、コミュニケーション能力の育成を図る。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 7分	・本時の目標を示す ODAって何だろう	・路上で勉強するフィリピンの少年の写真から、場所はどこか予想を立てる。 ・「フォトランゲージ」青年海外協力隊の活動写真から気づくことを挙げる。	個人	・正解を探すのではなく、生徒の気づきを自由気ままに拾い上げる。	姿勢良く意欲的に授業に臨んでいる(目視)関心・意欲・態度
展開 33分	国連が指定するODA優先配分国と日本が多く援助している国とは ODAの種類 タイ国への適当な援助項目を考えよう ・ランキング発表	・国連の優先配分国を端の生徒から順番に読み上げる。 ・日本が多く援助をしている国の予想を立てる。(ワークシート) ・日本のODAの区分グラフを読み取る。 ・「ダイヤモンドランキング」で援助項目として重要度のある順にランキングを付け、理由を考える。 A水道インフラ B学習環境 C農業 D工業 E高齢者障害者支援センター F食料 G医療 H交通・貿易 Iその他 ・班ごとにランキングのポイントを発表する。	個人 個人(5分) 4人班(10分)	・ゲーム性を持たせる為に、国名を読むのにつつかえたら、最初からやり直させる。 ・前時に学習したタイ国の現状(既習事項)を思い出しながら班ごとに最上位と最下位のポイントを4人で合意形成できるように話し合わせる。	・ランキングを選んだ理由を的確な文章で記述できている。(ワークシート)思考・判断・表現 ・班の考えを意欲的に発表できている。(目視)関心・意欲・態度
まとめ 10分	・ODAには無いNGOの活動 ・未来の地球を考えて、これから私たちができる援助とは何か ・日本のODA実績上位国にアフリカの国が少ない理由	・教師がNGOの活動例を紹介する。 ・ワークシートに自分の考えを記入する。 ・日本が支援する優先配分国が決定した実情を教師の話から知る。	個人	・青年海外協力隊や身近な学校で取り上げている支援もNGOに当たることを意識させる。 ・日本のODAの金額と内訳は果たしてこのままで良いのか、自分たちの未来を考えて、これからはどうしていったら良いのかを投げかけて終わる。	

(2) 授業の振り返り

「発展途上国に対しての援助項目を生徒が考える」

これまで思考の評価をメインにした話し合い活動や個人での考察等を各単元の学習に取り入れてきたが、ここまで既習事項に照らし合わせて考察を広げる授業は今までに無かったのでは無いかと感じた。というのも、教師が実際に見てきた資料や写真に教師自身が写った教材等を使用したことは、生徒に世界を身近に感じてもらえるものになった。また、授業の流れとして発展途上国に対してのイメージを学習した上に、現状世界の貧困はどこまで広がっているのかをグラフ資料や地図から読み取る作業を通じて3時間の中で蓄積してきた知識を発揮できるような流れにできた。例えば、話し合いの中で「タイは衛生面があまり良くなかったから水道インフラを整えた方が良いのではないか。」や「食料や金銭は支援した時点で消化してしまうが、農業や工業の技術支援は長期的な目で見て発展を援助できる。」等といった考えが生徒からでてきたことが大きな成果である。

(3) 使用教材

写真「路上で勉強するフィリピン少年」、「青年海外協力隊活動写真」



ワークシート

(4) 参考資料等

外務省HP「日本のODA実績」

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

「貧しいから援助する。だけではなくて…」

ある生徒のワークシートに書いた考えを例にする。

問 未来の地球を考えて、これから私たちはどんな援助を行っていったら良いだろうか。

- 1 授業を通して、自分たちが使っていた物(服、靴、ランドセル、バッグ)などを少しでも貧しい国々に送ってあげることが大切だと思った。

↓

- 2 他の国を発展させることだけを考えずに環境面の配慮が未来への地球が続く、持続可能な社会になっていくと思うのでお金のことを考えずに技術面の支援が大事だと思う。

個人ができる支援(募金や物資援助)の観点から、ODA を授業のメインに学習したことで、国としてどう取り組んだら良いかの意識や、長期的な目線を生徒に養うことができた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

- ・成果:個人ができる支援(募金や物資援助)の観点から ODA を授業のメインに学習したことで、国としてどう取り組んだら良いかの意識や、発展途上国を自立支援させる為の長期的な目線を生徒に養うことができた。
- ・課題:タイの援助項目を考えさせるといった論点を絞った思考にしたが、実際のタイへの二国間援助の内訳を資料として見せるなど生徒が考察した後のフィードバックをできなかったこと。
- ・改善策:授業が学期末になってしまったことから、タイへの ODA 内訳を示した資料を3学期の授業で提示する。また、生徒が考えた意見を例示しながら次回の授業に繋げるようにする。

10 教師海外研修に参加して

「日本が今後果たすべき役割と途上国の自立支援の必要性」

本研修では、1 バンケン浄水場視察、2 LTOP(高齢者ケアサービス)サイト視察、3 APCD(アジア太平洋障害者センター)サイト視察、4 サイエンスハイスクールチョンブリ校見学、5 レムチャバン港視察、6 クロントーイスラム視察、シーカー財団施設(図書館)見学、7 セサティアン聾学校見学、シニア海外協力隊員(美術科教員)の講義、8 バンコク都小学校訪問といった数多くのプログラムを経験することができた。訪問先の共通点としては、どの施設やプログラムも支援のもと成り立っていることが挙げられる。支援を必要とする国では間違いなが、当初、発展途上国として認識していたタイ国の印象は実際に視察したことで大きく変化した。講義においても ASEAN の中心地として発展し、もはや中進国であり、高齢化が問題になっている点は日本とも似ていた。また、訪問した各学校の生徒の様子を見ると、将来の夢やどういった大人になりたいかのビジョンが明確であり、勉強を頑張り、国の発展に寄与しようという姿勢が見て取れた。水道や交通網のインフラにはまだまだ課題があるが、先進国の援助を受けながら中進国から先進国の仲間入りをしようとする国民意識がそこにはあった。ただ、タイムカードの退勤時間が全て17時で押されていた残業の無い勤務感には驚いた。

そんな国民意識を感じながら、向かったクロントーイスラムの現状には衝撃を受けた。街に降りてすぐに分かるゴミの臭いや汚染されたドブの様な川、暑い中密集した住居に住む人々。街の衛生面はすぐにでも改善する必要があるし、その子どもたちの中には学校に行けるのに非行に走り学校に行かない子がいるということも聞いた。街の中に綺麗な図書館があったが、これは財団の支援のもと建てたものだった。今後、途上国が自立できるような支援の仕方が必要であると心から感じた。学校を建ててもそこに行かない。技術を教えても活用できない。施設を建設しても活用できていない。日本国は ODA の資金の額面だけで評価するのではなく、支援後その国はどう発展したかを見ていかなくてはと感じた。最後に、私は国際理解・開発教育の内容としてどういった支援が適切な支援なのかを今の子どもたちに考えてもらい、未来の人材を育てていきたいと思う。

	学校名：佐渡市立佐和田中学校 氏名：増田 有貴 THAILAND [担当教科：英語、家庭]	● 実践教科等：総合的な学習の時間 ● 時間数：9時間 ● 対象生徒：3学年 ● 対象人数：81人
---	---	--

1 単元名

考えよう！持続可能な社会の実現のために、私たちができること
～タイにおける国際協力から佐渡の未来を考える～

2 単元の目標

- (1) 国際社会で活躍する人々や、佐渡の地域おこし協力隊の生き方や考え方を知り、自らの行動に活かしたり、社会貢献をしようとしたりする。【進んで参加する態度】
- (2) 国際協力の必要性やあり方、日本の役割について理解を深める。【つながりを尊重する態度】
- (3) 国際社会の中で相互依存の関係であることを理解しながら、互いに助け合い共生する心を養う。【他者と協力する態度】
- (4) タイにおける諸問題から佐渡の現状と将来を考え、持続可能な社会の実現のために、課題解決策を提案することができる。【批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- (1) 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- (2) 子どもの多様な考えを引き出す
- (3) 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- (4) 考えるための材料を見極めて提出する
- (5) すべ・手だては活動に埋め込むなど工夫する
- (6) 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- (7) 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1) 教材観

本単元では、“Think Globally, Act Locally”をキーワードに、タイの諸問題から国際協力・開発の必要性やあり方、日本の役割について理解を深め、そこから持続可能な社会の実現のために地元・佐渡の現状と将来について考える。最終的には「20年後、地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を提案し、行動しようとする態度の育成を目標とする。授業では、中進国タイが抱える高齢化や都市部と貧困地域の格差問題を切り口に、様々な国際協力・支援について考えた上で、身近な国際貢献として、途上国の課題解決のために取り組む地元企業について紹介する。その後、スラム出身で外交官になったオラタイさん、青年海外協力隊・シニアボランティアとして活躍する方々の取組や思い、やりがいなどに焦点を当て、社会貢献活動について考えを深めていく。そして後半には、佐渡の地域おこし協力隊から、自身の活動や経験を通して見た「佐渡の魅力や強み、課題、今後の可能性」を講話いただき、生徒の課題発見や、実際に行動する意欲へと繋げたい。本単元は全9回の授業で構成されているが、国際的な話題が、生徒の実生活からかけ離れたものと捉えさせないために、身近な話題と結びつけたり、現地で活動する日本人の活躍や日本との共通点などを提示したりしながら、「世界の問題」を「自分の問題」として考える場を与えたい。将来的には佐渡だけでなく国際的な視野で日本や世界の現状を見つめ、長期的な課題について考えようとする意欲を喚起したい。

(2) 児童生徒観

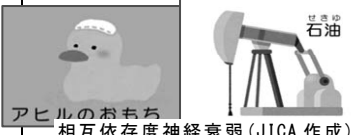
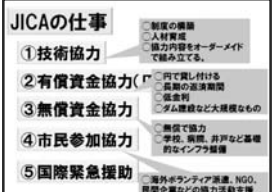
本学年の生徒は、5月に「世界一大きな授業」に取り組み、世界の識字率や教育の実態、負の連鎖、マラさんの人生について学んでいる。また、9月上旬に上越教育大学教職大学院の原研究チームを迎え、異文化理解のワークショップも経験している。ワークシートの記述や授業の様子から、ほとんどの生徒は、国際問題の深刻さや異文化理解の重要性を理解できているものの、自分の身近なこととして捉えるまでには至っていない。

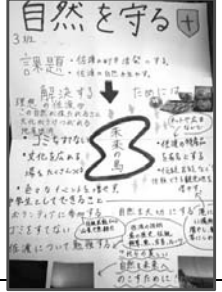
また、生徒は、11月に地域貢献・課題解決として、高齢化のためシャッター街となってしまった校区内にある河原田商店街の活性化を図るため、パンフレット作りを行う。そして12月には、将来の夢やなりたい自分を文章にまとめた「夢作文」を作成し、進路実現へと繋げていく。本単元での学びや知見が、その後の地域貢献活動への意欲につながり、更には自己の将来について向き合ったときに、何かしらの形で世界と繋がりをもったり、誰かに役立つ自分をイメージしたりしながら、進路について考えてほしいと願う。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
評価規準	- 様々な国際協力や国際社会で活躍する人々の生き方を知り、自らの社会貢献への意欲をもつ。 - 異文化や国際協力を理解しようと意欲的に活動や話し合いに参加している。	- 国際協力の必要性やあり方、日本の役割について自分の見解をもつことができる。 - 課題解決の方法について考察し、自分の言葉で他者に伝わるように発表できる。 - 佐渡において、持続可能な社会の実現のための課題解決法を提案することができる。	- 発展途上国の課題や国際協力についての知識を身につけている。 - 国際社会の中で、日本は諸外国と相互依存の関係にあることを理解している。 - 写真や資料から必要な情報を読み取ることができる。
評価方法	学習の様子・活動への参加態度・発言・ワークシートの記述		

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界を知ろう ～モノの動きと繋がりを考えよう～  アヒルのおもち 相互依存度神経衰弱 (JICA 作成)	自分たちの日常生活は世界中の国々から支えられていることに気づき、諸外国とどのように相互依存の関係にあるかを理解する。	① クイズ「アフリカとつながりのあるものを選ぶ」に取り組み、日常生活で馴染みのあるものが、途上国からの輸入であることを知る。 ② ワークショップ「相互依存度神経衰弱」を通して、製品と原料、産地を知ること、私たちの日常生活（食・モノ）が、世界中の国々から支えられていることに気づく。 ③ タイのエビの輸入を例に、自分たちの消費行動と生活様式が、相手国の環境問題にも影響することを考える。
2	タイってどんな国？タイの魅力を考えよう 	- タイの位置、気候、生活、文化、国民性等に興味、関心をもつ。 - タイの地理、文化、生活に関するフォトランゲージを通して、タイの魅力や強みについて理解する。	① 班ごとに、タイについて思いつくキーワードを考え、共有する。 ② クイズや写真、映像を通して、タイの基本知識を身につける。（位置、生活、文化、言語、等） ③ 各班に異なる種類の写真2枚を配布し、そこから読み取れることを推測しながらストーリーを作り、発表する。（タイを中心とした東南アジアの地図、電車の僧侶優先席写真と女性が僧侶にお祈りをしている写真、等）
3	国際協力について考えよう  JICAの仕事 ① 技術協力 ② 有償資金協力 ③ 無償資金協力 ④ 市民参加協力 ⑤ 国際緊急援助	- データや写真から、タイの現在の課題を知り、国際協力の必要性を実感する。 - タイにおけるJICAの様々な支援を知り、それらを分類分けすることで、持続可能な発展と国際協力のあり方について理解する。	① タイの高齢化を示すグラフや、バンコクと貧困地域を比べた写真から、現在のタイの課題を読み取る。 ② 日本が諸外国を支援する理由と、JICAの事業概要を理解する。 ③ JICAによる支援を表す写真6枚（技術協力、有償資金協力、無償資金協力）を用いて、支援の目的を考えながら分類分けする。
4	身近にある国際協力について知ろう	- 中小企業海外展開支援事業の意義や可能性、国際社会の中での日本の役割と相互依存性について理解を深める。 - 地元の中小企業の国際貢献の取組を知り、国際協力が身近であることを実感する。	① APCD（アジア太平洋障害者センター）と山崎製パンの協働事業とその成り立ちを知り、本事業の意義を理解しながら、相互依存の関係性について考える。 ② JICAの民間連携事業を理解する。新潟県の中企業の売り・強み、途上国の課題、事業内容、がそれぞれ書かれているカードを組み合わせるワークを通して、事業内容を理解する。 ③ 事業のメリット・デメリットを考え、日本の役割や支援のあり方について理解を深める。
5	「アクションを起こす人たち、	アクションを起こすことで人生を変えた人たちの生き	① スラム出身で外交官になったオラタイさんの人生を紹介し、貧困の負の連鎖を断ち切るも

	そこから変わる世界について考えよう	方を知り、教育がもつ可能性や、目標をもち行動を起こすことの重要性に気づく。 ●未来ブラリーの改修エピソードから、相互依存・共生社会であることを実感するとともに、社会貢献をしようとする意欲をもつ。	のは何かを考える。「教育の機会」、「学ぶ意欲」、「機会を逃さない行動力」 ② オラタイさんが学んだ図書館の改修は、スラムに住む人々の慈善募金と、それに感銘を受けた日本人との繋がりによることを知り、タイ人の国民性や相互依存、共生社会を実感する。
	シーカー・アジア財団の取組 		
6	地域おこし協力隊から見た「佐渡の今」と「佐渡のこれから」について考えよう	●地域おこし協力隊から見た佐渡の魅力や強みを聞き、自己有用感を高める。 ●佐渡の高齢化による商店街の課題を理解し、今後の佐渡の可能性や地域活性化のための取組を知る。	河原田商店街で地域の活性化のために活動している地域おこし協力隊による講演。 ① 協力隊から見た佐渡の魅力や強みを知る。 ② 現在の佐渡の課題や今後の目標などを聞き、佐渡の可能性を知る。(高齢化がもたらしたものとシャッター街の現状。佐渡を活性化させるための若者の取組、今後の可能性、など。) ③ 現在取り組んでいる持続可能な課題解決法は何かを理解する。
7 8 9	佐渡の将来について考えよう 	●地域の写真から、『佐渡未来ストーリー』を作る活動を通して、地域の課題や課題解決策を考え、理想の街を描く。 ●「20年後、地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を具体的に考え、ポスターにまとめ、発表する。	① 班で、「20年後も地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を考え、『佐渡未来ストーリー』を作る。各班に配布された15枚の写真から、4枚程度選び、佐渡の強み・売り、佐渡の課題を考える。『ア佐渡の課題 イ理想の佐渡 ウ課題解決策 エ中学生としてできること』について意見を出し合い、ポスターにまとめる。 ② クラスを解体して、班ごとに発表する。発表の内容について、相互評価する。
	【地域貢献活動】 河原田商店街活性化のために、パンフレットを作ろう (地域おこし協力隊とのコラボ企画) 商店街パンフレット企画テーマ お店のお宝(光る原石)を見つけよう!	●河原田商店街のインタビュー活動やパンフレット記事作りを通して、地域の課題を自分事として捉え、地域活性化のために主体的に行動しようとする態度を養う。 ●地域おこし協力隊と共に取り組むことで、自らの行動が地域貢献に繋がることをすると共に、自己有用感を高める。	① インタビューやパンフレット作りを行うことで期待できることを考える。 ② 各班の興味・関心に応じてインタビューを行う店舗を決定する。その後、質問を考える。 ③ インタビューの仕方(会話の広げ方)、写真の撮り方などを学ぶ。河原田商店街でインタビュー活動を行う。 ④ インタビュー内容をもとに、店の情報やお宝、魅力など、それぞれが感じたことを記事にまとめる。



7 授業事例の紹介

小単元名【身近にある国際協力について知ろう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月7日(金)第5限

(イ)実施会場 3年2組教室

(ウ)本時の目標

- 中小企業海外展開支援事業の意義や可能性、国際社会の中での日本の役割と相互依存性について理解を深める。
- 地元の中小企業の国際貢献の取組を知り、国際協力が身近であることを実感する。

(エ)指導のポイント

本時では、中小企業海外展開支援事業に焦点を当て、地元新潟県の企業の活動や取組についてワークを通して理解する。身近にある企業が、独自の技術を生かして国際協力を行っていることを知ることで、地元新潟に自己有用感をもつとともに、国際社会の中での日本の役割を考える機会としたい。

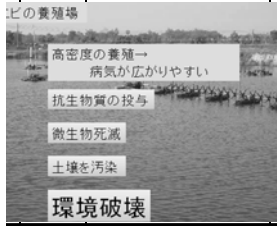
また、国際協力が、途上国の課題と企業の強み・売りとマッチするものであることも

気付かせたい。そのために、カードを使ったワークでは、「ア. 中小企業名と会社の売り・強み イ. 途上国の課題、国名と国旗 ウ. 取組内容」に分けられたカードを班で読み込み、一致させていく。各企業の技術が、途上国のどのような課題を解決しようとしているのかを考える事で、それぞれの事業の意義を考える際のヒントとしたい。そして、各事業が、企業と対象国にとってそれぞれ何がプラスなのかを話し合わせることで、国際協力が一方通行ではなく、win-winの関係であることを理解させたい。

更に、国際協力は成功事例だけではないことを気づかせるために、事業のプラス面を出した後、「もし課題があるとすれば何があるか」と問いかける。生徒の批判的な思考を促し、多様な考えを引き出したい。

(オ) 本時の展開

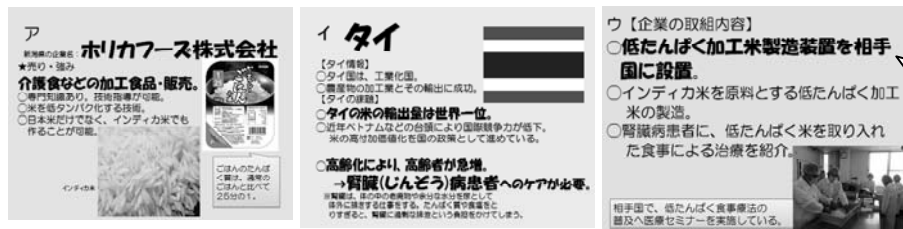
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
展開 10分	前時の復習 【3(6)】	●JICAの支援である技術協力、円借款、無償資金協力について、その特徴を振り返る。 ●数名分の感想を聞き、他の生徒の学びや気づきを知る。	一斉	●パワーポイントを使い、タイにおけるJICA事業の写真を写しながら、前時の生徒の学びを振り返る。 ●前時の生徒の感想から、視点の良いもの、本時に繋がるものを選び、紹介する。	
	本時のMQの提示【3(1)】	●本時のゴールと身につけたい力を示し、見通しをもたせる。	一斉	国際社会の中での日本の役割とは？	
展開 32分	タイのAPCDとタイヤマザキの協働事業の紹介 【3(2)】 【3(3)】	●写真から、事業内容を想像し、ペアで話し合う。 ●APCD(アジア太平洋障害者センター)と山崎製パンの協働事業を知り、本事業の意義を考える。	一斉 ペア	●写真を数枚提示し、想像できるようにする。 ●パン製造や販売だけでなく、経営アドバイスの提供等により、障害者の就業・自立支援の効果を高めることができたことを押さえる。 ●企業の強みと途上国の課題が一致しているか、確認しながら進めるよう促す。	●中小企業海外展開支援事業の意義を理解している。【参加態度】
	【カードワーク】 新潟県の中 小企業の取 組理解 【3(4)】	●新潟県の中小企業5社(A～E)の取組と途上国の課題を一致させるカードアクティビティを通して、事業内容を理解する。 ●3種類のマッチングカード(ア. 中小企業名と会社の売り・強み イ. 途上国の課題、国名と国旗 ウ. 取組内容)を机上に広げ、カードの情報を読み取りながら、関連するものを見つけ、並べる。 ●スライドを見て答え合わせをすると共に、説明を聞く。 ●班で興味をもった事業を選び、企業と対象国にとってそれぞれ何がプラスになるか(win-winの関係性)を	班活動	パートナー ということは…? ★一方通行ではない！ ★相互依存の関係があり ★双方にプラスとなる！ (WIN-WINの関係) ヤマザキ 社会貢献 ・ヤマザキ基準のパンを世界に発信！ ・会社の可能性を広げる!! 多様な挑戦！	●企業の強みと途上国の課題との繋がりを考えながら、アクティビティに参加している。【参加態度】 ●事業内容の全体像から、企業と途上国との相互依存関係を理解している。【ワークシート】

	【3(1)】	考え、ワークシートにまとめる。 ・それぞれの事業で、もし課題があるとすれば何があるかを想像する。【批判的な思考】		ら想像する。	【生徒の記述①】 ＜企業のプラス＞ ・社会貢献ができる ・視野が広がる ・経験を積める ・技術が向上する ・途上国との関係強化 ・製品や技術を海外に広められる ・企業の利益が上がる ・世界平和に貢献 ・可能性が広がる ・助け合える
	【生徒の記述②】＜途上国のプラス＞ ・防災対策などの課題解決となる ・国民の命が救える・知識が増える ・農民の収入が安定する ・就業の場が増える ・技術者が増える・技術が向上する ・日本の安心安全な製品を輸入できる	【生徒の記述③】＜考えうる途上国のデメリット＞ ・費用がかかる・言葉の壁があること ・正確に技術を教えないと間違った使い方をしてしまう ・途上国の環境に適していなければ意味がない ・途上国の同じ分野の製品が売れなくなる ・1からやらなくてはいけないから時間がかかる ・天候によって収穫が左右するためそればかりに頼るのは危険 ・故障した場合、途上国で修理できないのでは			
展開 8 分	授業のまとめ 【3(6)】	●地元の中小企業の国際貢献の取組を振り返り、国際協力が身近であることを実感する。しかし、日本が行う支援の全てが途上国にとってプラスにならない可能性もあることを理解する。 ●本時のMQ「国際社会の中での日本の役割とは？」について、自らの考えを記入する。 ●本時の感想を記入する。	一斉	●パワーポイントで、「タイのエビ養殖による森林破壊」の写真を見せながら、環境問題、労働の搾取、支援の押し付け、持続可能性への疑問、などもありうることを押さえる。 ●企業の国際協力の貢献性だけでなく、支援の裏に潜む危険性など、多面的に考えさせる。	環境？ 平等？ 持続可能？ 本当に、その国が必要としていること？ ●国際社会の中での日本の役割について、自らの考えをもち、まとめている。【ワークシート】
	 実際の授業では、時間が足りず、MQの答えと感想書きは宿題とした。				
	【生徒の記述④】＜本時のMQ：国際社会の中での日本の役割とは？＞ ・技術や製品を輸出するだけでなく、それを相手国で維持・拡大・発展させていくための人材育成が必要。 ・技術面だけでなく、国民の安全や命に関することなど、日本のこれまでの経験を生かした支援をする。 ・外国と協力関係を築き、自国の技術を伝え、パートナーとしてwin-winの関係を築いていく。 ・途上国が存続できるもので支援する（持続的な発展につながる）・技術支援の工夫が必要。 ・製品の支援や設置だけでなく、正しい使い方、作り方、修理の仕方を教える必要はない。				

(2) 授業の振り返り

山崎製パンと APCD の協働事業において、「慈善事業ではなく『パートナー』という関係でお互いに取り組んでいる」との説明を真剣に聞く生徒の姿から、発想の転換を迫ることができたという手応えを感じた。また、新潟県の企業と途上国のマッチングカードアクティビティでは、カードの種類・情報、共にやや多かったものの、高齢化対策、災害対策など様々な分野で新潟県の企業が貢献していると知り、生徒は誇りに感じたことが振り返りシートの記述から見て取れた。企業の取組のデメリットを想像させるのは難しかったが、「途上国では、製品が故障した場合の修理や部品の調達が難しいのではないかなど、鋭い考えを発表した生徒もあり、それらが他の生徒の刺激となったり思考を促したりし、意義のある発問となった。一方で、授業全体を通して教師の説明量や教材の情報量が多く、また指示や声掛けの仕方においても教師主導で進めてしまったことが反省点として残る。今後は、生徒が主体的に考え、話し合う必然性をどのように設定するかを検討するとともに、掘り下げて議論するための時間的余裕を確保する授業構成を考えたい。

(3) 使用教材



他、「プロテックエンジニアリングトルコ、トップ工業-カンボジア、ワキヤ技研-インドネシア、雪国まいたけ-バングラデッシュ」の組み合わせで作成

(4) 参考資料等 マッチングカードを作成するにあたり、以下の web サイトを参照した。

・JICA「中小企業海外展開支援事業」<https://www.jica.go.jp/sme_support/> (10 月)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

※単元の目標に関する箇所を下線を引く

【1限の生徒の感想】『世界を知ろう』 「日本食はもはや日本産ではない」という言葉に、なるほど、と思った。<u>身の回りの多くのものが外国産に頼っていることに驚いた。</u> 私たちは途上国の支えを受けて生活しているが、同時に<u>途上国の環境を破壊しているかもしれない。多くの連鎖があるが、今すぐに解決できる問題ではないと思う。</u>	【3限の生徒の感想】『国際協力について考えよう』 ここまで多くの活動をしていることを知らなかったし、<u>日本が今までしてもらったことへのお返しもあるのだと思った。</u> 様々な国が、<u>国境を越えて助け合う姿勢</u>がとてもいいな、と思う。小規模でも、それが技術を教えたりするものだったら、<u>教わった人が今度は教える側になって、どんどん広がっていくのではないかな、</u>と思った。
【4限の生徒の感想】『身近にある国際協力について知ろう』 - 新潟の企業がアジア諸国に技術支援をたくさん行っていることを初めて知った。食料支援なども大切だが、災害についての支援は今すぐにでも必要としている国が多くあると思う。中越地震や雪崩などを経験している新潟には、<u>その災害対策の支援はやらなければいけない義務の一つだ</u>と思った。グローバルな世界で、<u>お互いが納得し合える貿易・支援</u>をしていかなくてははいけない。 - 日本と途上国の国際協力はたくさんあるが、<u>その協力に課題はないのか、</u>見直し進めていく必要があると感じた。 - 自分たちに身近な技術が、様々な国で求められていることがわかった。国際協力には色々な方法があることを学んだ。 - 国際協力では、<u>パートナーという考えが必要だ</u>と学んだ。一方的に良いことをしていると思っていても、相手国には悪影響があることもあり得ることを知った。<u>相手側の事情を考える</u>ことが大切だと改めてわかった。 - 佐渡でも障害者の方がパンを作る活動があることを知っていたけど、そういう活動が外国にもあるのだと思った。<u>援助活動を持続させるには、お互いに対等な関係であることが必要だ</u>とわかった。環境や利益について見直していくことが大切だと思った。 - 私たちの知らないところで、<u>日本の技術が世界に広まって役立っている</u>ことを知ってすごく嬉しくなった。	
【7～9限 『佐渡未来ポスター』課題解決のための主な提案】 - 佐渡の雄大な自然を生かして・・・佐渡の絶景カレンダーを販売する、映画やアニメの大自然のシーンを再現する、等 - 佐渡に多くある神社・寺院を生かして・・・スタンプラリーを作る、伝統芸能の体験型イベントを企画する、等 - 佐渡に多くある空き家を生かして・・・個性あるお店に改装する、イベント会場にする、体験型民泊にする、等 →<u>佐渡オンリーワンのもの、今後残していきたいもの、大切にしていきたいものを生かしたアイデアが多く挙がった</u>	

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

1時限より日本と諸外国との関係性や戦後に日本が受けてきた援助について学習してきたため、4時限では、「日本の技術を世界へ広めることは責務である」のような意見が自然と生徒の中から出てきた。また、単元を通して国際協力についての知識や考えを積み上げたことから、佐渡の課題解決を提案する佐渡未来ストーリー作成で、「持続可能な開発の視点」を踏まえて、生徒たちは思考し、全班が工夫を凝らして具体的な提案をすることができた。更に、提案したことを実際の貢献活動として実行できたことで、生徒に「自ら行動を起こすことで社会へ働きかけることができる」と実感させることができた。生徒の取組やワークシートの記述から、単元の目標は概ね達成できたと言える。

一方で、特に3時限のように、資金協力など規模が大きく専門的な話題になると、意欲が低下する生徒が見られた。国際的な話題でも外国の人々に想いを馳せ、繋がりを自分事として捉えられるよう、現地の写真や映像を使用したり、日本との比較から気づきを促したりするなどの手立てを講じたが、十分ではなかった。各分野における国際協力の必要性を実感するためには、その国の経済、環境、政治等の背景を理解する必要がある。そのために、今後は国際理解教育を単発で終わらせず、他教科と連携して、横断的に継続して取り組んでいく。

本実践は、授業間の繋がりを意識させることとクラスを超えた意見交流となることをねらい、毎時間の冒頭で、前時の復習を行い、生徒の感想を3学年全クラスの中から数名分を提示したため、難しい話題でも生徒の意欲を喚起することができた。国際理解教育を特別なものと捉えず、どの分野とも繋がりがああるということを認識し、生徒自ら学びを深めていけるような土台を作りたい。そして、生徒が今後、答えのない問題を前にしても、あらゆる知識や経験と結びつけながら思考し、課題解決しようとする態度を育みたい。

10 教師海外研修に参加して

同じ志をもつ仲間たちやJICA職員の方々との出会いから始まり、国際教育研究会や上越教育大学教職大学院の原研究チーム、地域おこし協力隊など多くの方々とのネットワークを構築することができた。「私自身がリアルな教材に」を目標に参加した教師海外研修であったが、得られた知見は想像以上に多く、その後もネットワークを通じて多岐に渡る学びがあり、本実践を成功させることができた。また、日常で情報を得る際、自然と国際理解教育の視点で教材収集をするようになったことも変化の一つである。今後は、教科の枠を超えた国際理解教育の実現のために、常にアンテナを張り、教科問わず国際的な視野をもちながら指導にあたること、自身の専門性を磨きながら、学びを周囲に発信し続けることに尽力していきたい。

- 実践教科等：国語総合
- 時間数：6時間
- 対象生徒：1年4組
- 対象人数：41人

THAILAND

〔担当教科：国語〕

1 單元名

国際的な課題（SDGs）について調査し発表する。

2 単元の目標

- ・国際的な課題(SDGs)について理解し、それについて論じられた評論を正確に読解する。【批判的に考える力】
- ・自ら課題を発見する力を養う。【進んで参加する態度、未来像を予測して計画を立てる力】
- ・効果的な言葉を用い、他者に自身の意見を伝える。【批判的に考える力】
- ・他者の意見を理解し、それについて考察する。【多面的、総合的に考える力、他者と協力する態度】
- ・学習を通しての自身の変容を言語化する。【批判的に考える力】
- ・自身の身近な問題意識や日々の学びと地球規模の課題との関連を考察し、それを相互に発表し合うことによって、様々な課題に目を向け、主体的に行動することについて考察する姿勢を獲得する。【つながりを尊重する態度、未来を予測して計画を立てる力】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための材料を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1) 教材觀

評論Ⅲ「生物多様性とは何か」福岡伸一

本単元では地球規模の課題に対して問題提起、提言が行われている良質な評論である本教材を読み解き、まず筆者の主張を正確に理解したうえで、その主張がSDGsとどう関連しているのかを考察させる。そのうえで、自らが問題と感ずることを普段の生活の中から発見し、それにまつわる画像をもとに、その問題について、わかりやすい言葉でプレゼンテーションできるように表現の基礎をサポートしたい。またその課題がどのように地球規模の課題とつながってくるのか繋がりを意識する姿勢を獲得させられるような構成を検討した。

本単元を通して、テキストを正確に読解する力、課題を発見する力、表現する力、国際的な課題に目を向ける素地、自身のキャリアと国際貢献を関連付けて考える姿勢を育てたい。

(2) 児童生徒観

本年度新設された理数科一期生であり、一年生の他のクラスよりも一単位少ない4単位の授業を行っている。国語に対して苦手意識を持つ生徒も多いが、常に前向きに積極的に授業に取り組む生徒が多い。他者とコミュニケーションを取ることを苦手とする生徒が一定数いるがそれを周囲がサポートし学び合い支え合う雰囲気ができている。将来サイエンスの分野への進路、キャリアを志望している生徒に対し、社会的、国際的視点を獲得させたいと考えている。

(3) 指導観

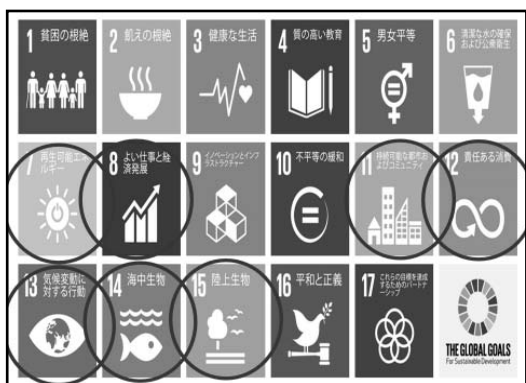
タイでの研修の中で、日タイの生徒同士の交流に参加し、日本の生徒のプレゼン発表を観る機会を得ることができた。しかし、その発信力の乏しさに衝撃を受け、問題意識を非常に感じ、生徒に「発信する力」を獲得させたいと考えこのような単元構成を考えた。

募金や寄付、ボランティア。それも大変すばらしい行動であるが、生徒一人一人の問題意識、日々の学びそして進路実現が今後のサステナブルな社会に寄与、貢献していく可能性に気づかせ、自身のキャリア形成に対する前向きな姿勢や、社会貢献に対する志を涵養できるような指導、実践が行えるよう心砕いた。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	自分の考えを適切な言葉で表現しようとしている 他者の意見を傾聴しようとしている	相手の考えや異なる考えを尊重し、自分の考えを深める。 自分の考えをまとめ適切な言葉で表現できる。	相手に分かりやすく伝わるよう工夫することができる。 相手の意見の良い部分、改善点を的確に指摘することができる。	自身の意見を補完する資料を適切に用いて、論理の構成を工夫できる。
評価方法	・机間指導における観察・プリント・発表・レジュメ			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本の国際協力と国際的な課題	・日本の開発援助や世界的課題に興味を持つ	・タイにおけるJICAの事業を例として示し日本の国際協力の在り方について知る。 ・現在世界が抱える諸問題および国連の示している17のグローバル目標「SDGs」について学ぶ。
2～3	国際的な課題について書かれた評論を正しく読解する。	・テキストを正確に読解し筆者の主張を理解する。 ・筆者の問題意識が「SDGs」のどの分野に該当するか確認する	教材の読解を通して、生物の多様性が失われることが地球環境に及ぼす影響知り、筆者が「生命観と環境観のパラダイムシフト」の必要性や「分際を忘れたヒトという種」に対して強い問題意識を持っていることを理解する。
4		・筆者の主張と関連する具体例について考える。 ・わかりやすい言葉で説明する。 ・筆者の主張とSDGsとの関連に気づく	「国家間のエゴ」や「効率思考」によって生物多様性が失われてしまった例について調べてきた内容を話し合う。 ・筆者の主張とSDGsとの関連について考察する。
	地球規模の課題について書かれた評論 「生物多様性とは何か」 福岡伸一		
	プレゼンテーションについて学ぶ。	・効果的なプレゼンテーションについて学ぶ。	・「プレゼンテーション」について学ぶ。 ・17のグローバル目標に関連する「問題」を設定し(自身が問題と考える現象がどの目

			標に関連するか勘案し)その内容をプレゼンテーションする準備をする。
5	自身が発見した課題についてプレゼンテーションする。	・自身の問題意識が「SDGs」のどの分野に該当するのかを踏まえたうえで、効果的な言葉で自身の意見を表明する。 ・話し手がどのような問題意識を持っているのかメモをし、正確に理解する。 ・プレゼンの内容を①影響力(他者への貢献)②内容③声の大きさ④パフォーマンス⑤説得力という評価基準で相互に評価する。	ルーティン(3分) 単元の振り返り及び本時の目標の確認(5分) グループ(3人)でプレゼンテーションし合う(10分) 教室内で最低2人にプレゼンテーションする(15分) クロストーク(5分) クロストークで出た「課題」についてグループで掘り下げる(5分) 本時及び単元のまとめ(5分) 本時の振り返り(5分)
6～7	全員の前でプレゼンテーションする	・クラスメイトの問題意識を共有する ・全体に伝わるプレゼンテーションをする。 ・本単元の振り返り	・SDGs と関連した自身のテーマを全体に発表し、相互評価する ・本単元を振り返り、まとめとして文章にする ・発表する

7 授業事例の紹介

小単元名【 他者に貢献するプレゼンテーションをしよう ～SDGsと課題発見～ 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月14日(金)第4限

(イ)実施会場 1年4組教室

(ウ)本時の目標

- ① 他者に貢献するプレゼンテーションをしよう。
- ② 相手のプレゼンテーションを傾聴し的確に評価しよう。
- ③ 自身の変容を言語化しよう。

(エ)指導のポイント

- ・初めてのプレゼンテーションを円滑にできるような環境づくりをする
- ・国際的な問題に興味を持ち、その興味と自身の学びとを繋げていききっかけになるような指導をする。
- ・自身の気づき、変容を言語化できるよう、スライド、話し合い活動を入れて工夫する。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
3分	ルーティン	古典文法事項の確認	一斉	緊張感を持って取り組ませる。	
5分	導入	単元の振り返り及び本時の目標確認		前回までの授業で用いたスライドを使用し学習内容を振りかえらせるとともに、本時の課題を明確に理解させる	本時の目標を理解しようとしている。 国際的な課題(SDGs)について理解している。

現代の社会
 グローバル化 価値観の多様化
 貧困 紛争 テロ 変化の加速
 IOT化 シンギュラリティ
 少子高齢化
**課題を発見出来る人
 学び続けられる人**

課題を発見する姿勢の獲得

課題発見なくして解決なし!

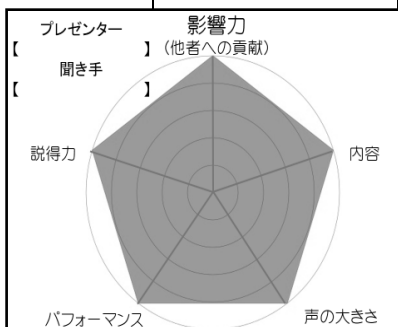
①課題・問題を発見し、調査してみよう
 ↓
 ②グローバル目標(SDGs)との繋がりを意識してみよう
 ↓
 ③プレゼンテーションしてみよう。
↑ 本時

15分	グループ内プレゼン	グループ内(3人)でプレゼンテーション2分、相互評価2分を行う。 ※この活動ではメモを取りながら聞く。 「自分の発見した課題を他者に伝える。(その課題と国際的な課題(SDGs)との関連を意識する)」	班	時間管理を行い、適宜机間指導を行う 「話し言葉」でのプレゼンテーションを指導する。	・5項目(①影響力(他者への貢献)②内容③声の大きさ④パフォーマンス⑤説得力)の基準を意識してプレゼンテーションに取り組んでいる。
-----	-----------	---	---	--	---

プレゼンテーションとは、「贈る・差し出す」という意味の「present」が語源であることからわかるように、単なる情報伝達ではなく、「相手(聞き手)にメリットを与える」ことでなければなりません。「相手(聞き手)の心を動かし、行動を起こさせる」ことがプレゼンテーションの目的です。

① 影響力(変容→他者への貢献)

書き言葉＝文字
 ↓
話し言葉＝声
 消えてしまう
② パワーワード



15分	教室内プレゼン	教室内で最低2人にプレゼンテーションし、評価してもらおう。(「学び合い」方式)	全体	手持無沙汰な生徒はいないか、対話に参加できない生徒に対するフォロー。	・効果的な言葉を用い、他者に自身の意見を伝えている。 ・メモを取りながら傾聴している。 ・積極的に相互評価を行っている。
5分	全体共有	数名の生徒に全体にプレゼンテーションしてもらい、内容について各班で掘り下げる。	一斉	拍手で終わらず、グループ内で深められるよう注意する。	・積極的にプレゼンテーションしている。 ・傾聴的に確かに評価している。
10分	まとめ・振り返り	本時及び単元のまとめ・振り返り			自身の変容、気づきについて明確に言語化している

(2) 授業の振り返り

コミュニケーションが苦手な生徒も多い中で、クラス全員が2人以上に自身の意見をプレゼンテーションできるのかどうか、という点が不安要素であったが、生徒一人一人が質の高い調査を行い、見せ方、話し方、身振り手振りの工夫を行っていた。また相互にサポートしあいながら積極的に活動することが出来ており、予想をはるかに超えた生徒の力に圧倒された。

最終的に「自分の日々の学びや大学進学後の研究などが、いつか世界を大きく変えるかもしれない。」ということへの気づきを促せるような授業を目標としていたが、振り返りやその後の授業内での姿勢の変化(積極性、主体性、読書内容の変化)を勘案すると、十分達成できたと考える。

また、本実践を行うにあたり、「共有地の悲劇」に関する知識やグローバル化のきっかけとなる歴史的事象の知識を世界史の大橋教諭が、そして、生態系や生物多様性に関する知識を生物の淵本教諭がそれぞれの授業でサポートしてくださった。淵本教諭においては公開授業参観後、生物という教科においても評価の対象となる内容と判断し、合同授業として全体プレゼンの場を設けてくれた。今後益々重要となる科目横断型、教科連携型の実践を行うことができたことも今後に向け大きな一歩となった。

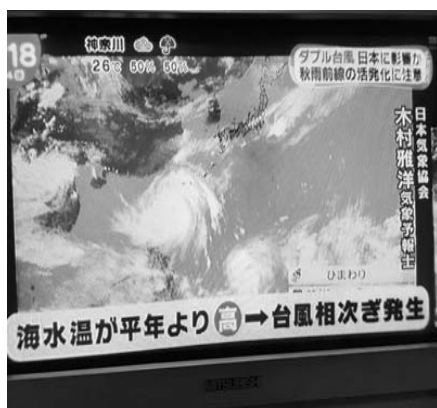
(3) 使用教材

・東京書籍「精選国語総合」 評論Ⅲ「生物多様性とは何か」福岡伸一

・私たちが目指す子供のための「持続可能な開発計画」

http://www.savechildren.or.jp/news/publications/download/sdgs_child_friendly.pdf

・プレゼンテーションの際には以下のプリントと、生徒一人一人がその課題にまつわる画像を持ち寄り行った。



←台風やゲリラ豪雨の増加から地球全体の気候変動について言及した生徒が準備した画像

マンションの断水で困った経験から水の重要性に気づき、安全な水にアクセスできない人々の存在について言及した生徒の準備した画像→



(4) 参考資料等

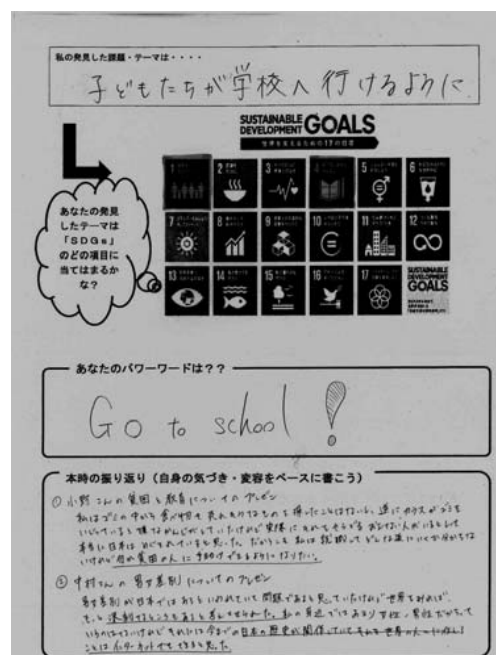
・学校のための持続可能な開発目標ガイド unicef

<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/>
等

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

今回の単元を通して生徒の変化を大きく感じた。特に顕著だったのは、振り返りの感想において「何かを変えていける人間になりたい」「手助けできる人間になりたい」「もっと学びたい」という意見がほぼ共通していたことと、授業への取り組み姿勢が(古文漢文も含め)積極的かつ主体的になったことである。以下いくつか生徒の感想を記載する。

・少し前までは空爆や内戦のニュースを見ても何も感じなかったが、今日までの一週間はやたらと深く考えるようになった。
・発展途上国の女性差別はひどいと思ったが、女性差別に異議を



唱える人がいたから今の日本がある。私たちが今何をやってもすぐには変わらないかもしれないが、私たちが死んだあと少しでも良くなることをしたい。そのために、今この世界のことをもっと知っていかなければならないと思う。だから一生懸命勉強して大学に行って、何かを変えられる人になりたい。

・自分にできることなんて見つけれないと思っていたが、それは見て見ないふりをしているだけなのだと気づかされた。

・いろいろな人のプレゼンを聞く中で、現状把握から問題発見の段階にステップアップできた。また、意識をもって生活すれば目標達成に近づくことができるということに気づいた。様々な切り口からSDGsの目標について考えることが出来、少し進化出来たと思う。なんのために国語を学ぶのか分かった気がする。

・「知る」ということは先進国に生きる人間の義務だと思った。

予想を超えた反応、変化が見られ、授業者として身の引き締まる思いがした。ここで得た気づきを実際に行動に移せるような実践、また自身のキャリア形成意識につなげる実践に挑み、国際人として生き抜いていける力、国際社会に貢献しようと思う志を獲得できるようサポートしていきたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣前からJICA主催のエッセーコンテストに全員で応募し、国際的課題に対する興味関心喚起を行ってきた。タイでの研修を通して最も生徒に獲得させたいと思ったのは、グローバルな課題意識と表現力、発信力であった。学習を通して、自らの進路やキャリアをグローバル社会とのかかわりの中で見つけようとする姿勢を獲得できるような授業構想を練った。具体的には「課題を発見する力を養う」「国際的な視座から物事を考える」「他者に伝える表現方法を考える」という目標を設置した。(P)コミュニケーションが苦手な生徒への対応に苦慮したがALの手法の一つである「学び合い」を取り入れ、クラスで相互にサポートし合えるよう工夫をして、プレゼンテーションの相互評価という授業を行った。(D)振り返りの記述やその後の授業の中で、自身の学びに対する誇りであるとか、使命感というものがうかがえた。理数科クラスであり元々国語に対して苦手意識を持つものも多く、他クラスよりも1単位授業数が少ない中、前回の模試と比較すると偏差値が5ポイントも上昇した。特に評論文の得点率上昇は目覚ましく、苦手としていた国語に対する向き合い方も大きく変わった。(生物、世界史の先生方と相互協力できたことも大きい)(C)ただし、教科内での実践であるため、ODAであるとかJICAの取り組み、発展途上国における具体的課題といった内容への踏み込みはまだ足りないので、今後、そういった機会を提示できるようにしたい。(A)

10 教師海外研修に参加して

私は「幸せでいるための国語力とは」「生存率を上げるための国語力とは」というテーマを持って教職に就き、実践を行ってきたが、「拡大や成長は必ずしも個人の幸せと結びつかない」「転換期を迎えている現代社会での幸せな人生とは何か」といった、根本的な問いも常に孕んでいる日々であった。そんな中で、タイでの10日間の研修の機会を得、無償資金協力、有償資金協力、技術開発プロジェクト等、様々な現場を視察し日本の国際協力、貢献の現状を学び、スラムで暮らす人々の生活に直接触れる機会を得ることができたことで、さまざまな示唆を得られた。また国際協力の現場で活躍している日本人や現地の方々、チームメンバーと出会い、想いや意見、経験を共有することで、観光では得られない深い学びを得られ、教員として、一人の人間としてこれからどのように生きていくべきか考える契機となった。

中でも、タイでの日々の中で、平均的な日本人のもつ教養・能力やモラルの高さ、そしてその層の厚さは圧倒的な強みであることを実感した。そして勤務校の生徒のような、自身の進路に対して前向きな生徒たちに、グローバルリーダーとしての矜持心を育むことができれば、世界はより良い方向に変わるかもしれない、そんな希望を強く持った。資本主義は近代で最もうまくいったシステムだが、そのために、現在、大規模な経済破綻や格差の拡大といった政治的な問題も生じている。サステナブルな社会実現するためには全く新しいイノベーションを起こすことが必須であり、全世界的な喫緊の課題といえるだろう。この研修を通して、志を持ち、国際的な視点で物事を考え、他者と協働的に問題を解決し、イノベーションを起こしていけるような生徒を育てたいという気持ちを強くした。得られた機会に感謝し、日々真摯に教育活動を行っていく所存である。

学校名:長野県中野西高等学校	● 実践教科等: コミュニケーション英語Ⅲ
氏名:宮澤 まどか	● 時間数 : 4時間
THAILAND	● 対象生徒 : 高校3年生
[担当教科:] 英語	● 対象人数 : 37人

1 単元名

「包括的」な社会のために、自分ができることを考えよう

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- (1) タイと日本を比較し、その違いを見ることで、自分の周りとは違うものを「受容する」ということについて考える。(多面的・総合的に考える力、批判的に考える力)
- (2) ODAの働き、JICAの活動について触れ、国際支援について関心を深める。そこから、国際支援の必要性、そこにおける日本の役割について考える。(つながりを尊重する態度)
- (3) APCD(アジア太平洋障害者センター)の活動を通して知った「包括的」という言葉について、包括的社会という言葉について考える。そして「包括的社会」とはどのような社会なのか、そのために自分ができることを考える。(批判的に考える力)
- (4) タイにおける諸問題について触れた後、自分の周囲にある課題について考える。そこから、自分の周りにある課題解決に向けて、自分ができることを考える。(未来像を予測して計画を立てる力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1) 教材観

本校は昨年度ユネスコスクールとして認可され、校内に ESD プロジェクトチームを設置し、国際交流・異文化理解、環境教育、人権・平和・主権者教育、アクティブラーニングの4本柱を設定し活動している。国際理解教育を行う上で生徒に伝えたいことは「自分に何ができるか考える」という当事者意識を持つ、ということである。世界の課題、自分の身の周りの課題に触れた時に、他人事と捉えず、自分に何ができることは、という意識を持たせることが、国際理解教育を行う上での目標である。

本実践では①自分の目で見て他国を知り、視野を広げ、自分と異なるものを受け入れ、尊重する気持ちを養うこと、②支援というものが一方的に与えるものではなく、相手の立場を支える取り組みであり、相手の存在を対等なものとして尊重するものだということ、の2点を柱として授業を行う。タイという国について学ぶことで、生徒の異文化理解への姿勢を促し、他を受容し理解することの大切さを伝えたい。そして、タイで行われているタイと日本間の支援を見ることで、国際支援への理解、その必要性について考えたい。支援から見えるタイの課題に触れた後、SDGsで見る世界の課題、自分の身の周り、日本に潜む課題について考える。世界の課題、タイの課題、日本の課題と、徐々に生徒に近いものに落とし込んでいくことで、課題を身近なものと感じて考え、生徒自身が考えようとする意識を持ち、課題に向けて自分ができること、自分のこれからの学びと関連付けて考えようとする意欲を喚起したい。

(2) 生徒観

生徒の中には、年に数回行う海外高校生訪問団受入で他国の生徒と交流したり、異文化理解や時事英語といった授業を通して、異文化に触れたり、国際的な事象について学習した経験があるものもいる。そのような生徒もいる一方で、大半の生徒にはそういった経験が無く、外国に興味を示さない生徒も少なくない。学習に対しても受け身の部分が多く、与えられた課題は行うが、自分から考え何かに取り組むという姿勢はなかなか見られなかった。しかし、夏季休業中に本研修でタイに行くことを伝えたと、休み明けにタイはどんな国だったか、何が面白かったか、授業でどんなことをやるのか、など質問してくる生徒が見られた。

海外に行ったこと、タイという国について興味を持ってきている生徒たちに対して、自分がタイで見てきたものを伝えることが、生徒たちの一つの異文化体験となり、生徒たちが日本とは違う国を知るきっかけになればと考えた。また、SDGs、タイの課題、日本の課題に触れ、自分ができることを考えることで、これからの自分たちの学びの意味を見出して欲しいと考えた。

(3) 指導観

教師自身が見てきたものを生徒にも可能な限り多く体験させたかったので、写真資料を多く利用した。また、生徒の自主的な発言、活発な意見交換を促すために、フォトランゲージを用いた資料の読み取り、グループによる意見交換、クラス全体での意見交換の時間を全ての授業で設けた。授業のまとめには、生徒自身が授業内で考えたことを振り返ることができるように、自分の意見をまとめるワークシートを全ての授業で配布、記入させた。

加えて、担当学年が高校3年生という進路決定を控えた学年であったことから、自分のこれからの学びの意味、その目的を考えるきっかけになるような発問設定に留意した。こちらからの発問を通して、国際社会に生きていくことになる生徒たちに、視野を広く持つこと、海外やその人々の生活や文化に興味を持ち、違いを受け入れ、互いを認めあいながら、協力・共生していくことの大切さを伝えたいと考えた。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	・タイの文化や社会を知ることを通して、世界の多様な文化や価値観について理解を深めようとしている。 ・タイが抱える諸問題に関心を持ち、それらの原因、その解決に向けて活動している人について関心を持つことができる。	・タイにおける日本の支援について触れ、国際協力の在り方について考えることができる。そこから、国際協力の必要性について考えることができる。 ・自分の身の回りにある問題について考え、意見を列挙することができる。	・資料(フォトランゲージなど)から必要な情報を読み取ることができる。 ・「包括的な社会」という言葉についてグループで考え、まとめた考えを全体に発表することができる。	・ODAの仕組みについて理解を深めることができる。 ・世界が抱える課題やタイが抱える課題、それに対するJICAの支援について理解を深めることができる。
評価方法	学習の様子・発言・ワークシートの記述・感想			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	写真から学ぶ「タイ王国」	・タイの雰囲気、文化、習慣などについて興味、関心を持つことができる。 ・タイと日本の共通点、相違点を考えさせる。 ・相違点を挙げていく中で、自分の周りとは違うものについて、「受容する」とはどういうことか、考えさせる。	・タイで撮影した写真を示し、日本の文化や習慣との相違について考える。 ・他国の違い、それに対する驚きを、否定的に見てしまう姿勢について考える。 <授業を終えての生徒の感想> ・タイの文化と日本の文化を比べると違いが分かるし、面白いなあと感じた。 ・本やテレビで見るよりも実際にその場に行き、体験するのとでは得られるものが違うと思った。
2	タイにおけるJICAの取り組みを通して、国際支援について理解を深める。	・ODAについて理解を深める。 ・タイで行われている国際支援について理解を深める。 ・なぜ国際支援が必要なのかを考える。 <生徒の感想> ・援助をしあうことで、お互いに発展を遂げていくのだと思った。みんなが支え合うことで、困ったときのつながりを得られるんだと思った。 ・ガールスカウトをやっていて、貧しい国に使わない物を送ったことがあるけど、改めてその必要性が分かった。	・ODAの概要、JICAの活動を理解する。(タイ国内の取り組みを中心に) ・写真から読み取れることをグループでまとめる。(①どんな支援が行われている場所か②なぜその支援が行われているのか) ・各グループで読み取ったことを、クラス全体で共有する。 ・JICAの活動、戦後日本が復興のために支援を受けていたことに触れながら、国際支援のあり方について考える。
3	タイでの取り組みから、世界の課題、日本国内で見えてくる課題につ	・APCDの取り組みから、タイが目指す社会を考える。	・APCDの活動について触れ、タイが目指す社会についてグループ内で意見を出し合い、まとめる。

	いて考える。	・SDGsについて触れ、世界が抱える課題について考える。 ・タイの課題、世界が抱える課題について考えた後、日本(自分の周り)の課題について考える。 ・「包括的」という言葉について考える。 (→自分の周りは包括的と言えるのか、どのような社会が「包括的な社会」と言えるのだろうか。)	・SDGsのロゴと各ゴールを一致させて、世界が抱える課題にはどのようなものがあるのか考える。 ・日本で見えてくる問題についてグループ内で意見を出し合い、まとめる。
			＜生徒の感想＞ ・包括的な社会にするためには、排除しようとする気持ちをなくす必要があると思うけど、難しい問題だと思う。 ・世界にある差別とか問題について見たり考えたりしてきたけど、日本に目を向けると共通する問題も多くて驚いた。 ・抱えている問題は多いけれど、それを解決するためにどれだけの人が行動しているのか疑問に思った。
4	「包括的な社会」とは、どのような社会なのだろう。自分たちが考える包括的な社会と、そのために自分ができることを考えよう。	・「包括的」という言葉の意味について考える。 ・「包括的な社会」とはどのような社会なのか考える。 ・自分たちがまとめた「包括的な社会」のためには何ができるだろうか。	・「包括的」と「排除的」という言葉を比較しながら、それぞれの言葉の持つ意味を考え、グループで話し合う。 ・その言葉と自分が生きる社会を組み合わせて考えたときに、どのような社会になるだろうか。派生図を使ってグループでまとめる。 ・自分たちが考えた「包括的な社会」のために自分ができることを付箋に書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【 To make a better place -自分ができることを考えよう- 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月11日(金) 第2限

(イ)実施会場 3年2組 HR教室

(ウ)本時の目標

生徒たちは本時までにはタイの課題、それを支援する日本やJICAの活動、その他組織の活動を見てきている。さらにそこからSDGsを通して世界が抱える課題について知り、自分の周りに潜む課題や問題についても意見を出し合うことで、課題を抱えているということは決して他国に限ったことではないということを考えてきた。

社会の一員としてこれから進んでいく生徒たちに、自分の周りにある問題、世界の問題を他人事と捉えずに、それらについて真剣に考え、できることを考えようとする態度を育てることが本授業の目標である。スケールが大きく、難しいテーマではあるが、「自分にできることは何か」ということを考え、そこから自分の学びが何かにつながる可能性についても意識させたい。

(エ)指導のポイント

① 本時では導入として、何らかの課題に対して活動する人々について取り上げる。「何かアクションを起こしている人」というタイトルで協力隊の活動を紹介することで、他の人の活動を自分ができることを考えるきっかけさせる。

② 生徒の積極的に探究する姿勢を引き出すために、グループごとに資料を読み取り、読み取ったことをクラス全体で共有するという学習活動を設定した。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	これまでの振り返り 【3(6)】	前時までの感想(疑問や新たな気付き)をまとめ、クラス全体で共有する。	一斉	前時に考えた、身の回りにある様々な課題について想起させる。	
展開 ① 10分	タイで出会った「何か」のために活動する人 【3(3)】 【3(4)】	・タイで何かのために活動する人々の写真と、その人に関する説明文を各グループに配布する。 ・写真を見て、あるいは英文を読んで、写真に写っている人がどんな活動をしているのか、	グループ	・8グループで活動。 ・4つのテーマに関し、各テーマ2枚ずつの写真を配布。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか

		何のために活動しているのかを考える。 ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。 ・他グループの発表を聞きながら、他のグループの写真についても理解を深める。		・他のグループの写真についても興味を持たせられるように、各自ワークシートにメモを取らせる。	
展開② 15分	「包括的な社会」とはどんな社会だろうか 【3(1)】 【3(2)】 【3(7)】	・前時に投げかけた「包括的な社会」について考える。 ・グループごとにマッピングを行い、意見をまとめる。 ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。	グループ	・「包括的」という言葉が少し難しいかもしれないので、教師が少し考えるきっかけを与える。 (アジア太平洋障害者センターの所長の言葉から、生徒の意見を引き出したい。) ・グループで出た意見を、一枚の紙にまとめさせる。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか
展開③ 15分	自分たちができることを考える 【3(1)】 【3(2)】 【3(7)】	・「包括的な社会」のために世界、あるいは自分の周りから無くしたいと思うこと、そのために自分がやってみようと思うことについて考え、グループ内で共有する。(付箋に書く) ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。	グループ	・できる、できないにとどめず、自分ならどうするかという可能性も含めて考えさせる。 ・話し合いが停滞してしまわないように、適宜机間巡視を行う。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか
まとめ 10分	本時の活動のまとめ 【3(2)】	・本時を通して考えたこと、感じたことをワークシートに記入する。	一斉	・これまでの授業を通して生徒たちに考えて欲しかったことを最後に伝える。	

(2) 授業の振り返り

生徒に「包括的な社会」について、そこから「そのために自分にできること」を考えさせるために少しでもヒントとなるように、タイで出会った「何かのためにアクションを起こしている人」として展開①の部分を設定した。本授業までにODA及びJICAの取り組み、青年海外協力隊やシニアボランティアについても触れてきていたので、そこで実際に活動する人、何のために活動しているのかを知る機会になったのではと考える。

本時の主題は展開②及び③の「包括的な社会とはどんな社会だろうか、そのために自分ができることを考えよう」であったが、想定していた通り、生徒には少し難しいテーマだったようで、グループワークの最中に教師に助言を求めたり、グループの中で意見が止まったりしてしまうグループがいくつか見られた。しかし、これまでの授業を通してクラスで考えたこと、自分が感じたことなどをつなぎ合わせながら最終的に意見をまとめられている姿が見られたと思う。また、自分の周辺に存在する課題を考えた後の活動だったので、自分の周辺の事例を考えながら意見をまとめようとする生徒もいた。

生徒が一生懸命考えようとする姿が見られたにもかかわらず、時間配分の工夫が足りずに生徒が考えるための十分な時間を与えられなかったこと、その考えをクラス全体で共有する時間を作れなかったことは大いに反省すべき点であった。

(3) 使用教材

<「前時の振り返り」スライド 一部抜粋>

前回の振り返り
みんなで出し合った

「自分の周りの課題」

- ・食料自給率の低下(他国への依存)
- ・国債 ・就職難 ・少子高齢化と過疎化
- ・所得格差 ・基地問題 ・SNSの事件
- ・LGBTへの意識 ・弱い日本
- ・税金の使われ方 ・若者の政治無関心
- ・女性の管理職の少なさ ・奨学金制度

前回の振り返り
こんなものも挙がったよね！

- ・批判精神の強い人
- ・幸せのハードルが高い
- ・ジェネレーションギャップ
- ・グローバル化が足りない
- ・豊洲市場移設問題
- ・長野電鉄の運賃が高い

<生徒への問いかけ: 本時のテーマ>

本時のテーマ:
What can we do?

- ① タイで出会った、「〇〇のためにアクションを起こしている人」
- ② 「包括的な社会」について、考えよう！
- ③ 私たちだって「〇〇のために～できる！」

<「タイで何かのために活動している人」スライド 一部抜粋>

B: 高石淳一隊員 (SV: シニアボランティア)



- ・日本では高校教師(美術の先生)
- ・4年前に退職、タイへ赴任
- ・高石さんが赴任した当初は、美術の授業が成り立っていなかった
- ・新しいものを調達ではなく、現地でできることをする

C: 吉田圭助さん (シーカ・アジア財団)



- ・シーカアジア財団 タイ事務所 職員 (未来プラリーの運営)
- ・タイ最大のスラム、クロンイサムから、ブランドを立ち上げ現地の女性を雇うプロジェクトに取組中

＜生徒への問いかけ：包括的な社会ってどんな社会だろう＞

でも、その前に前回の授業に戻ります

- ・「包括的な社会」という言葉について話をしました。
- ・日本、あるいは自分の周りには「包括的な社会」と言えるのだろうか？
- ・そもそも、「包括的な社会」ってどういう意味なのだろうか？

包括的な社会ってどんな社会だろう...

- ・「包括的」って言葉だけで考えれば、...全体を一つにまとめている様、全てを包含する

→ 「みんな」
とか、「社会全体」
という言葉が
key word!!

包括的な社会と...
APCD (アジア太平洋開発銀行)

「みんな」
とか、「社会全体」という言葉が key word!!

- ・inclusive (包括的) な人権に基づいた社会
- ・障害のない人とともに諸活動に参画できるバリアフリー社会

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

＜生徒たちの感想＞

- ・自分の国が今あるのも、他の国の支えがあってこそのものだと思った。
- ・今の社会をより良くするには一人ひとりが「こういう風にしたい」と思うことが大切なのかなと思った。
- ・自国と他国は常識も文化も必要としているものも違うけれど、その違いに気づき、寄り添った支援が必要なのかなと思った。
- ・行ったことのない国の話を聞くのは新鮮で面白かった。それと同時に日本との違いを比較してしまい、日本がどれだけ恵まれているかが分かった。海外で人の役に立ち活躍している方がもっといると思うので、調べてみたいと思った。人を先入観で見ず、身の回りのことから何か役立つことをしたい。
- ・ボランティアで他の人に教えている人もいたり、自分のためよりも他人のために行動している人がすごいと思った。でもそれは自分のためでもあるのかなと思った。人のために何かをしてあげることによって自分の存在価値を見いだせることがあるので、winwin の関係であるのかなと思いました。
- ・私は将来理科教師として理科を教えようと思っています。日本で楽しさを教えることも大切ですが、発展が不十分な場所で基礎理科を教えようかと、視野が広がりました。どこの国の子どもたちも面白ことや自分の興味のあることに目を輝かせます。私はその子どもたちの将来の目を伸ばしてあげたいと思いました。



＜考察＞

違いを受容すること、国際協力について考えること、タイの課題を通して自分の周りの課題について考えること、これらを通して包括的な社会とは何か、そのために自分ができることは何か、について生徒に考えさせてきた。生徒の授業での様子、アンケートでの振り返りから、生徒各々でしっかり考えていたように思う。アンケートの抜粋にもあるように、自分の将来と結びつけてそこからの展望を考えている生徒も見られた。しかしその一方で、「一人ひとりが行動することが必要だと思った」や、「他の人のために活動している人がいてすごいと思った」のような、当事者として何ができるかというところまで深

められていないような意見も見られた。問いかけが大きすぎて、自分のこととして考えられていなかった故の意見だと思う。生徒がより深く、自分の将来やこれからの学びと結び付けて考えられるような授業内容、教師からの問いかけが重要なのだと強く感じた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【海外派遣前】

- ・国際理解教育を、少しでも自分の体験が伴ったものにしたいと思い、この研修への参加を希望したが、担当教科との関連付け、具体的な授業などは考えることができていなかったのも、派遣前の授業案作成は非常に苦労した。(苦労した点)
- ・タイにおけるJICAの取り組み、見学先などについて可能な範囲で調べたり、情報を提供されたりしていたので、ある程度の情報を持って研修に参加することができた。(良かった点)

【海外派遣中】

- ・実際の国際協力の現場、そこで活動する人々の話を直接聞くことができたので、知識が自分の身となるのを感じることができた。(良かった点)
- ・各日程終了後に、参加者全員で振り返りミーティングを行ったので、自分以外の参加者が感じたことや考えたことを全て共有できた。自分の意見だけでなく、参加者全員の意見を聞いたことは、この研修への参加目的、そこから得なければならないことを日々考えさせられる大変有意義な時間であった。(良かった点)
- ・帰国後の授業をより深く想定しておくことができていれば、各見学先の情報をもっと能動的に得ることができたかもしれない。(反省点)

【海外派遣後】

- ・海外派遣で得たものがとても多く、どこに焦点を当てて授業を行うべきかの選択に苦労した。(苦労した点)

【授業実践までのPDCAサイクル】

段階	項目
P(計画)	・生徒が「～だと思った」や「～だと感じた」というような単純な感想で終わらないようにするために、生徒への問いかけができるような授業内容を設定する。 ・前時までに学習したこと、考えたことの総括となるような授業内容を設定する。 ・生徒個人の活動とならないように、授業全体をグループワークで構成し、クラス全体での意見共有の時間を設定する。
D(実施)	・視覚からの情報をできるだけ多く提供したかったので、各時間パワーポイントを作成した。また、生徒がその授業内で考えたことを、自分自身でしっかり振り返ることができるようにワークシートで毎時間授業ごとの振り返りを行った。 ・グループワークで授業を実施したが、各意見がグループ内だけでとどまらないように、クラス全体で意見を共有する時間を設定した。
C(検証)	・問いかけを多く行ったので、生徒各々が、教師が投げかけた問いについて一生懸命考える姿が見られた。しかし一方で、グループ内で他の生徒とうまくコミュニケーションをとることができない生徒もあり、意見共有が一方的になっている部分も見られた。また、問いが難しくすぎて答えを出すのに苦労している生徒の姿も見られた。 ・授業時間内に予定した内容が終了しないことがあり、生徒の感想記入等の時間を短縮せざるを得ないこともあった。
A(改善)	・問いが難しくなりすぎないように、そうであったとしても生徒が熟考できる時間を与えられるように、もう少し時間をかけて授業を組み立てられれば良かった。 ・教科と国際理解教育を結び付けられるよう、国際理解教育の授業に継続性を持たせられるよう、年間を通した計画が必要だと感じた。

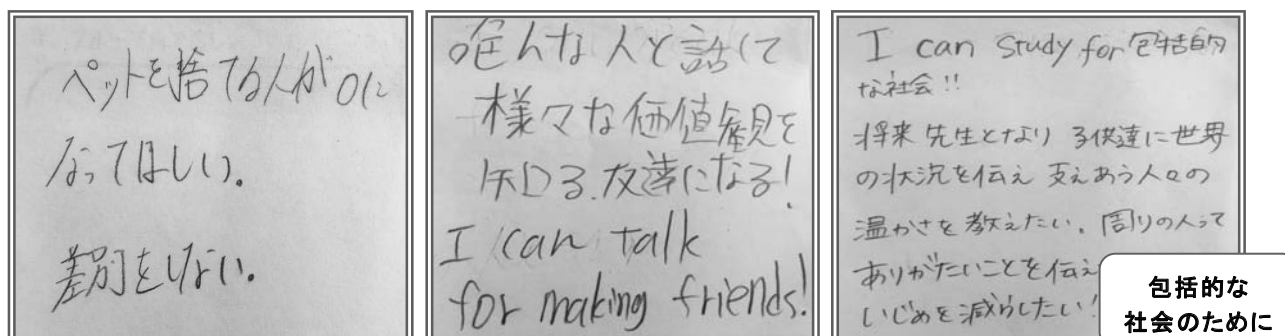
10 教師海外研修に参加して

この研修に参加した一番の動機は「国際理解教育について、自分の実体験を得たい」ということであった。国際理解教育の必要性が高まり、生徒に国際理解教育を行っていく立場として、語ることでできる実体験が無いことがとても苦しいことであった。また、知識だけで実体験のないまま生徒にそれを伝えたとしても、それは生徒に伝わるだけであって、理解まで深まっていけないのではないかと不安もあった。生徒の理解を深めるには、自分の実体験が必要と思い、この研修に参加した。

アジア太平洋障害者センターで聞いた、「inclusive にしようとすることで、かえって exclusive になってしまっていないか」という言葉は、授業実践において大きなキーワードとなった。授業を実践した生徒たちは、これから自分で進路を切り開いていくことになる高校3年生であり、これから大学や専門学校に進む生徒たちが、何のために学び、何のために行動するのか、この授業を通して考えるきっかけになってもらえればとの思いもあった。これからの未来を担っていく若者たちへ、という意味も込めて、「包括的な社会とは、そのために自分ができることは」について考えて欲しかった。これまでの授業で考えたこと、意見交換で得たことを踏まえながら、自分たちが考える包括的な社会、そのために自分ができることを、一生懸命考える姿を見ることができたように思う。自分自身がタイへ行き、この言葉を直接聞くことができたから、生徒に本当に考えてもらいたいこととして投げかけることができたのだと思う。自分で足を運び、直接目にする、直接聞くことの大切さを改めて感じた。

今回授業を実践してみて感じたことは、国際理解教育は学校内あらゆる場面での連携が必要だということである。本実践は授業を担当している学級でしか実践することができなかった。世界で起きている問題、世界の共通課題を取扱った授業は、ある教科、それについて関心のある者だけではなく、学校全体で取り扱っていく必要のあることであると考えた。これからの未来を担っていくのは、自分でもあり日々接している生徒たちでもある。広い視野を持ち、世界の課題を、身の周りの問題を他人事と考えずに、何かできることはないかという問題解決意識を持った生徒を育てていくことが、これからの目標である。本研修が生きる場をこの授業だけで終わらせないために、教師として精進していきたい。

本研修で出会うことができたタイチームのメンバー、JICAタイ事務所の方々をはじめ、タイで様々な場所を案内し、いろいろな話を聞かせてくれた方々、すべての方々のおかげで、本当に有意義で貴重な研修に参加できたと感じている。すべての方々への出会いに感謝し、今後も努力していきたい。



包括的な
社会のために

9 費用対効果？

所属 JICA 東京 学校教育アドバイザー
名前 鈴木 啓修

平成28年4月に埼玉県教育委員会から長期派遣研修教員として、JICA東京に派遣されて、初めて本研修の計画、及び実施に参画する機会に恵まれた。学校現場に勤務していた時から、本研修の存在については知ってはいたし、実際、参加する教員を教頭として送り出した経験もあった。しかし、今回、運営スタッフの一人として計画、実施に関わることで、改めて本研修の素晴らしさを認識できた。

まず、注目すべきは募集要項にある本研修の目的である。目的(2)には、「研修参加者による学校現場等での授業実践を通じ、開発課題を自らの問題として捉え、主体的に考える力、またその根本解決に向けた取り組みに参加する力をもつ児童・生徒を育成する。」とある。ここまで、子どもたちに対しての育成すべき資質・能力に関して明確にコミットしているのかと正直、驚かされた。そして研修内容も7月の派遣前研修から始まり、海外研修後の派遣後研修、授業実践、報告会まで約6か月に渡るパッケージとしての資質向上プログラムになっている。私は「これはやりがいのある仕事だな、真摯に取り組まなければ」とすぐさ思った。さらに、本研修を担当するJICA職員は、開発教育、国際理解教育、学校教育の専門家であり、学校教育に対する理解が深く、私のアドバイスなど必要のない優秀な人材であったため、大変スムーズに協働できた。私もなるべく質の高い研修づくりに貢献しようと、知合いだった国立教育政策研究所の後藤顕一先生に講義を依頼し、派遣前研修で育成すべき資質・能力のための授業づくりについて学ぶ機会を提供できた。また彼を通じて、ESD・SDGsの専門家である東京都市大学の佐藤真久教授にプログラム全体のアドバイザーに就任していただくことができたことも幸運であった。佐藤先生には、派遣前、派遣後研修、そして海外研修(モンゴル)にも同行、授業観察を含め、あらゆる機会でご貴重なアドバイスをいただき、本研修の質の保証という観点から大きな収穫であった。また、参加された先生方はそれぞれ、熱心で前向き、溢れるアイディアと行動力を持った優秀な先生ばかりで、「こんな先生方と学校で働きたいな」と思わせてくれる素晴らしい同志に巡り合うことができたことは、私にとっても大きな財産である。

昨今、費用対効果という言葉がどんな組織でも使われるようになった。個人的にはあまり好きな言葉ではないが、学校現場においても学校運営を語る上で、しばしば使われる言葉となった。児童・生徒の変容という一見、測るのが困難な教育の成果をも、費用対効果という観点で測ろうとする風潮が見られるのは事実である。JICAにおいても頻繁に耳にする言葉であるが、本研修についての費用対効果は、すこぶる高いと私は自信を持って断言できる。学校の教室で、世界の人々と共存していく大切さ、国際協力の重要性が確実に子どもたち伝わっている場面を授業観察で何度も目撃することができた。今回の研修を生かした授業を持続可能にしていく決意を語る教員がほとんどであった。各学校現場に国際理解教育を推進していくリーダーが本研修を通じて確実に育っているのを感じる。また、昨年度の本研修参加者でこの春から青年海外協力隊現職教員特別参加制度で途上国に赴任する教員が複数いると聞く。そして今年度の参加者の中にも、途上国で国際協力に貢献したいと考えている教員が複数いることも事実だ。では何故、このような成果が挙げられるのであろうか。それはJICA東京が、このプログラムを外部に委託するのではなく、心をこめて手作りで行っているからだとは思っている。時間とエネルギー、そして「熱い思い」という費用を掛けるからこそ、大きな効果が得られるのだと思う。それが「人づくり」の原点である。人材育成、人づくりが本命であるJICAという組織において、本研修は、組織の手本となる事業であると思っている。

最後に、このような素晴らしいプログラムに参画する機会に恵まれたことに感謝するとともに、来年度も、本プログラムに少しでも貢献できるよう精進したいと考えている。

10 授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解教育セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

■長野県

イベント名：信州グローバルセミナー 2016

日時：2016 年 12 月 18 日（日）

場所：JICA 駒ヶ根

主催：JICA 駒ヶ根

プログラム：

1. 基調講演
2. 分科会①「世界の課題と国際協力を知ろう」
3. 分科会②「長野県の国際協力を知ろう」

■新潟県

イベント名：第 13 回国際教育研究会 JICA 教師海外研修授業実践報告会

日時：2016 年 12 月 23 日（祝）

場所：クロスパルにいがた

主催：特定非営利活動法人にいがた NGO ネットワーク

共催：JICA 東京

プログラム：

1. 授業実践報告およびデモンストレーション
2. 教師海外研修行政官コース参加者による報告
3. 座談会

■東京都

イベント名：2016 年度 教師海外研修 東京都報告会

日時：2017 年 1 月 22 日（日）

場所：JICA 地球ひろば

主催：JICA 東京

プログラム：

1. 授業実践デモンストレーション
2. ポスターセッションによる授業実践報告
3. 座談会

■埼玉県

イベント名：グローバルセミナー 2017

地域で育むグローバル市民

日時：2017 年 2 月 12 日（日）10:00 ～ 16:40

場所：コーププラザ浦和

主催：埼玉国際協力協議会、

（公財）埼玉県国際交流協会、JICA 東京

プログラム：

1. 学校現場における国際理解教育実践事例の紹介
2. パネルディスカッション
3. グループワーク

■群馬県

イベント名：ぐんまグローバルセミナー 2017

日時：2017 年 2 月 18 日（土）

場所：群馬県庁

主催：（公財）群馬県観光物産国際協会、

NPO 法人 ESD ぐんま、JICA 東京

プログラム：

1. 教師海外研修授業実践報告
2. 教師海外研修行政官コース参加者による報告
3. ワークショップ

■千葉県

イベント名：国際理解セミナー

日時：2017 年 2 月 25 日（土）

場所：千葉市文化センター

主催：（公財）ちば国際コンベンションビューロー、

JICA 東京

プログラム：

1. 講演・ミニライブ
2. 報告会（授業実践&パネルトーク）

学校・教員のための 国際理解教育支援プログラム

JICAでは、世界の現状や開発途上国が抱える課題への理解を深めるため、学校現場で活用いただける国際理解教育／開発教育支援のための各事業を実施しています。

教員向けプログラム

●教師海外研修

開発途上国の現状、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を子どもたちの教育に役立てることを目的とした研修です。校種や地域の違う先生方がチームとなって国内と海外の研修に取り組みます。研修で得た学びと感動を、授業や教材作成を通じて子どもたちに伝えてください！
毎年、全国で約160人の教員が研修に参加しています。



●国際理解教育セミナー

教員をはじめとした国際理解教育に関心がある方々を対象にした国際理解教育／開発教育の基本的な考え方を学ぶ講座を、各地のNGOや教育委員会、国際交流協会と協力して開催しています。ワークショップや参加型学習の手法を体験しながら、世界を学ぶ授業作りにお役立てください。



●グローバル教育コンクール

世界が抱えるさまざまな問題について考え、その解決のために行動できる人材を育成するため、学校現場などで活用できる素材を作品として募集しています。応募部門は次の二つ。

- ①「写真」部門・・・写真や映像を通して現地の人たちの暮らし、表情、そして言葉などと共に、「こんなことを、伝えたい！」というメッセージをお寄せください。
- ②「グローバル教育取り組み」部門・・・学校や市民団体での国際協力や教育への取り組みをはじめ、NPOやNGOなどの国内・海外での活動について報告ください。

●青年海外協力隊（現職教員特別参加制度）

教員の方々が身分を保持したまま、青年海外協力隊または日系社会青年ボランティアへ参加するための制度です。毎年、春募集時（3～5月）に募集しています。

児童・生徒向けプログラム

●国際協力出前講座

開発途上国の実情や日本との関係、日本の国際協力について知っていただくために、教室にJICAボランティアの経験者が講師としてお伺いします。講座は、異文化理解、教育や農業、医療、スポーツ、音楽といったテーマや、対象国や地域を決めて行うことも可能です。また、道徳や人権学習、ボランティア学習、環境教育、キャリア教育などの授業でも活用されています。



●国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

毎年、開発途上国や国際協力をテーマに中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを開催しています。上位入賞者には、開発途上国でのJICA事業の現場視察など研修に参加する機会が与えられます。コンテストの開催概要や募集作品のテーマについては、毎年6月頃にJICA地球ひろばのHPで発表されます。



国際理解教育／開発教育のための教材

●ぼくら地球調査隊 小冊子5種

環境、感染症、教育、食料問題など、私たちの身近で起こっている地球規模の課題について、楽しく学ぶことができます。

※ホームページよりダウンロードいただけます



世界の水問題
(環境)



学校に行けない
世界の子どもたち
(教育)



砂漠化する惑星
(環境)



いのち、輝け！
(保健・公衆衛生)



世界の食料
(食糧)

●ぼくら地球調査隊 ウェブコンテンツ

博士と3人の子どもたちが世界を旅しながら地球について学ぶウェブコンテンツです。アニメーションを見ながら、地球で起きている様々なことを知り開発途上国を身近に感じることができます。



「JICA地球ひろば」のご案内

●JICA地球ひろば

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、開発途上国での活動体験談や参加型体験学習を組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行、社会科見学等の団体訪問も受け入れており、年間約1万人に見学いただいています。

開館時間：10時～20時（平日）／10時～18時（土・日・祝）

休館日：第1・第3日曜日、年末年始 ○入館無料

連絡先：〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

TEL：03-3269-2911／0120-767278

詳しくはコチラ

JICA地球ひろば

検索



あなたの近くのJICA相談窓口

●JICAデスク

開発途上国で活動した経験を持つ国際協力推進員が、皆さんのお越しをお待ちしています。

東京都(23区外)八王子市役所市民活動推進部 多文化共生推進課内 Tel: 042-620-7437

✉ jicadpd-desk-hachiojishi@jica.go.jp

※東京都(23区)については、JICA東京(Tel: 03-3485-7680)までお問合せください。

埼玉県 (公財)埼玉県国際交流協会内 Tel: 048-833-2992

✉ jicadpd-desk-saitamaken@jica.go.jp

千葉県 (公財)ちば国際コンベンションビューロー内 Tel: 043-297-0245

✉ jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp

群馬県 (公財)群馬県観光物産国際協会内 Tel: 027-243-7271

✉ jicadpd-desk-gunmaken@jica.go.jp

新潟県 (公財)新潟県国際交流協会内 Tel: 025-290-5650

✉ jicadpd-desk-niigataken@jica.go.jp

長野県 (公財)長野県国際化協会内 Tel: 026-235-7186

✉ jicadpd-desk-naganoken@jica.go.jp



おわりに

教師海外研修プログラムは、教員自身が国際理解教育／開発教育／ESD に取り組むに当たり、他都県の現職教員とともに実際に途上国を訪れ、そこで行われている日本の国際協力や支援の現場を視察するとともに、人口増加や貧困問題、近視眼的開発がもたらす様々な環境・開発問題を現場において見て感じ、日本との関係性から「相互依存」と「多文化共生」への理解を深めることを通して、その成果を授業に生かすことを目的としています。平成 28 年度の教師海外研修プログラムは、2015 年 9 月に発表された持続可能な開発目標（SDGs）の発表をうけて、JICA 東京と JICA 駒ヶ根の連携のもと、新体制で本プログラムを再編成し、運営、実施してきました。教員の所属する都県も、東京都、長野県、埼玉県、新潟県、千葉県、群馬県、埼玉県にわたり、第一線の現職教員の参画による有意義な海外研修プログラムでした。

これまでの教師海外研修プログラムは、教員が所属する都県別で訪問国を分けていましたが、昨年度に引き続き、今年度も校種ごとにわけ、小学校及び特別支援学校所属の教員はモンゴル国において、中学校及び高等学校所属の教員はタイ国において海外研修を行いました。参画した教員は、所属する都県は異なるものの、同一校種の教員同士でチームとなり、派遣前研修から、派遣中、派遣後研修にわたり、参加準備と現地研修、授業づくりに取り組みました。

先生方は、事前研修で学んだことを実際の海外研修の現場で見て感じることで、「相互依存」と「多文化共生」の理解を深めたことと思います。また、途上国で活躍する日本人に会うことで、多くの感動と日本人としての誇りを胸に刻んだことと思います。帰国後は、それぞれの学校において、「総合的な学習の時間」における国際理解教育や教科指導、道徳教育や学級活動などの学校教育活動に位置付けて実践が行われました。本海外研修プログラムに参画した先生方が現地で受けた感動と学びは、その先生方の言葉に乗って確実に子どもたちに届き、子どもたちも目を輝かせて授業を受けていました。

今回の海外研修プログラムは、持続可能な開発のための教育（ESD）で指摘されている 4 つのレンズ（統合的レンズ、文脈的レンズ、批判的レンズ、変容的レンズ、UNESCO（2012）に基づく）を基礎にしたものとして特徴あるものとなりました。さまざまな課題・資源・時間・空間・人をつなげる統合的レンズ（つながり・かかわり）、身近な文脈（歴史や地域）で深め、世界の文脈に広げる文脈的レンズ（広がり・ふかまり）、課題の再設定や捉え直し、意味づけ、問いを重視する批判的レンズ（捉え直し、意味づけ）、社会が変わる・変える、個人が変わることを連関させた変容的レンズ（個人の変容、社会の変容）を活かすことにより、今日までの教育実践を新たな次元で捉え直すものでした。

新学習指導要領では、「持続可能な社会」という用語が多々明記されているだけでなく、「何ができるか」や「知っていること・できることをどう使うか」といった資質・能力の重視、アクティブラーニングやカリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程について強調がなされています。近年のグローバル化の時代、これからの地球市民性と混成文化の時代、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代において、本教師海外研修プログラムに参画された教員自身がこの経験を活かし、同僚の教員らや地域の方々とともに、新たな次元で、学校教育活動の充実に役立てていただけることを切に願う次第です。

平成 28 年度教師海外研修アドバイザー

東京都市大学大学院 環境情報学研究科
教授 佐藤 真久

平成 28 年度 教師海外研修報告書
～国際理解教育の授業実践事例集～



独立行政法人国際協力機構 東京国際センター 市民参加協力第一課
〒151-0066 東京都渋谷区西原 2-49-5
Tel: 03-3485-7461
<http://www.jica.go.jp/tokyo/>